

---

# PAST DESIRE -tail-

早村友裕

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

P A S T   D E S I R E   -   t a i l -

### 【Nコード】

N 7 8 9 9 C

### 【作者名】

早村友裕

### 【あらすじ】

ディアブル大陸の西岸を支配するグリモワール王国は穏やかな気候と豊かな国土に恵まれ、450年以上も安定を保ってきた。初代グリモワール国王ユダ「ダビデ」グリモワールは稀代の天文学者「グーティア」グリフィスと共に、72の悪魔を魔界から召還し、悪魔それぞれと契約した証にコインを作って72人のレメゲトンにそれぞれ与えた。しかし、何百年もの時は流れ、王家が所有するコインの数はいつしか減っていた。レメゲトンの数も今ではわずかに6名、所有するコインは23。それは長く領土拡大の機会を狙っていたセ

フィロト国にとって好機といえた。  
(LAST DANCE - tai  
1 - 続編)

・・・ハジマリ・・・(前書き)

この物語は連作です。

【LOST COIN - head】 [de.syo.setu.com/n3660c/](http://nco<br/>de.syo.setu.com/n3660c/)  
【LOST COIN - tail】 [de.syo.setu.com/n3665c/](http://nc<br/>de.syo.setu.com/n3665c/)  
【LAST DANCE - head】 [ode.syo.setu.com/n4082c/](http://nc<br/>ode.syo.setu.com/n4082c/)  
【LAST DANCE - tail】 [ode.syo.setu.com/n4617c/](http://nc<br/>ode.syo.setu.com/n4617c/)  
【PAST DESIRE - head】 [ode.syo.setu.com/n6324c/](http://nc<br/>ode.syo.setu.com/n6324c/)  
【PAST DESIRE - tail】 (本作)  
【WORST CRISIS - head】 [ode.syo.setu.com/n0921d/](http://nc<br/>ode.syo.setu.com/n0921d/)  
【WORST CRISIS - tail】 [ode.syo.setu.com/n0973d/](http://nc<br/>ode.syo.setu.com/n0973d/)

順にお楽しみください。

## ・ ・ ・ ハジマリ ・ ・ ・

ディアブル大陸の西岸を支配するグリモワール王国は穏やかな気候と豊かな国土に恵まれ、およそ450年以上も安定を保ってきた。その大きな支えとなったのがレメゲトンと呼ばれる王国付きの天文学者たちだった。

初代グリモワール国王ユダ「ダビデ」グリモワールは稀代の天文学者ゲーティア「グリフィス」と共に、72の悪魔を冥界から召還し、悪魔それぞれと契約した証に全部で72のコインを作ってレメゲトンにそれぞれ与えた。

レメゲトンたちは悪魔の強大な力を使役してグリモワール王国に反映の時代をもたらした。

しかし、何百年も時は流れ、王家が所有するコインの数はいつしか減っていた。レメゲトンの数も今ではわずかに6名、所有するコインは23。

それは長く領土拡大の機会を狙っていたセフィロト国にとって好機といえた。

グリモワール国建国から466年目の夏、セフィロト国はグリモワール国に対して宣戦布告した。

これは短く、しかし激しい戦争の始まりだった。

今日はセフィロト国の大使がやってくるという。  
理由はいわずとも分かっている。

先日のセフィラ王都乱入事件の後、ゼデキヤ王は原因究明と関係

の保全に全力を尽くした。何が何でも戦争を避けようと奔走したのだ。

だが、その努力は実らなかった。

ネブカドネツアル王はセフィラ王都侵入を認めず、国を貶める卑劣な言いがかりだと声を荒げた。また、レメゲトンがセフィラに対して攻撃を加えた事を盾に謝罪を求めてきた。

無論セフィラと交戦したのは事実だが、ねえさんを取り戻すための正当な戦闘だ。

とはいえ任務通達は王からの口頭、急を要する事態だったため任務中の記録はとっておらず、レメゲトンがほぼ単独で動いた先日の事件を証明する手立てはなかった。

拳句の果てに国境を守る炎妖玉騎士団が領権侵害したなどという虚言まで使い、開戦の理由を国際的に知らしめた。

全く持つて信じられない事だった。

本日到着するセフィロト国の大使がセフィラであるという情報が入っていたため、謁見にはレメゲトンが参列する事になった。

天使を召還するセフィラに対抗できるのは、悪魔を召還するレメゲトンだけ。

急いで準備を済ませ、家を出ようとすると珍しい声がした。

「アレイスター、待ちなさい」

その名で呼ぶのは一人しかないない。

「……父上」

グリモワール国の重鎮、クロウリー公爵　つまりは、自分の父

親だった。

紫水晶の目には感情が映らない。自分も人の目にはこんな風に気難しく映るのだろうか、凜とした冷たい空気をもつとても近寄りがない人だった。

そして自分にとっては逆らえない人物だ。

この人の命令で自分はこの家に連れてこられ、教育され、さらには騎士への道も絶たれたのだ。

「何でしょうか」

「グリフィス家の末裔の事だ」

どきりとした。

思わずつばを飲み込んだ。

「どうやらずいぶんと入れ込んでいるようだが、ほどほどにした方がいい。王家を敵に回すのは得策ではない」

「！」

一体この人は、何をどこまで知っているんだろう？

くるりと振り向いた父親の姿は何年経っても変わらない威圧感で大きく見えた。

「グリフィス家の娘に構うな」

有無を言わさぬ口調だった。

これまでならそこで口を噤んで何も言えなくなっていたかもしれない。

「……それはできません」

クロウリー家に引き取られてから20年、反攻したのは初めてだった。

初めて父の驚いた顔を見た。

この人にもこんな表情があったのか。

思わず目を見開くと、クロウリー公爵はふいに後ろを向いて口早に言った。

「すぐにお前の婚姻相手を探してやる。クロウリーの血を途絶えさせるわけにはいかない。大丈夫だ、育てろなどと言わん。生まれた子はこちらで引き取るう。とにかく」

「父上！」

「お前はもう戦に赴く身だ。その前に……」

「聞いてください、父上！」

「アレイスター。お前はまだ自分の立場が分かっていないのか？」

そういわれて言葉に詰まった。

冷や汗が全身から噴出す。逆らってはいけないと心のどこかが叫んでいる。

「謁見が終わればすぐ戻って来い。それまでに用意させる。」

喉が震えて声が出ない。

言葉を紡ぐ事はままならず、そのまま父親の背を見送った。

完全に遅刻だ。

「遅くなりました。アレイスター・クロウリー、ただいま参上しました」

慌てて謁見の間に飛び込むと、すでに到着していたライアット公爵の冷たい声が放たれた。

「クロウリー伯爵、レメゲトンならそれなりの節度を持って行動していただきたい。今は国の一大事なのでから」

「申し訳ございません」

すぐに頭を下げ、謝罪する。今は事を荒立てている場合ではない。

王族が高い壇上に並び、その階段元を漆黒星・輝光石騎士団長が

ブラックルビー  
ダイヤモンド

大きな槍を手に守る。

そこから向かって左側にじじいを始めとしたレメゲトンが並び、右側にはライアット公爵を筆頭に貴族議会の有力者たちが並んでいる。

息を整えながらレメゲトンの列に並んだ。

するとすぐに扉が開いて、セフィロト国の大使が3人謁見の間に入ってきた。

先頭を歩くのはセフィラの神官服に身を包んだ男性だった。細いフレームの眼鏡をかけていて狡猾そうな笑みを湛えている。淡い茶の髪はかるく波打っていた。何番目のセフィラなのだろうか、大使



の主任を務めるくらいだからおそらく第1番目ケテル、または第10番目マルクトあたりか。

その右後ろは聖騎士団の鎧を身につけた赤茶の髪の女性だ。気の強そうな顔はあまり好ましくない。敵国の王族を前にするというのは不遜な態度だ。

そして、左後ろに控えていたのは見覚えのある燕尾服だった。

「ゲブラ」

隣のガキが震えるような声で呟いた。

それに気づいたのか細長い手品師はこちらに向かってにこりと微笑んだ。

大使3人は全員が見守る中颯爽と壇の下まで進み出て跪いた。

「遠路はるばるご苦労、セフィロト国の大使よ。長い挨拶はいらぬ、本題はもう分かっておる」

壇上から王の声が降ってくる。

その中に微かな怒りが混じっている事は王に仕えて久しい者ならすぐに分かったらう。

「セフィロト国、ネブカドネツアル王より親書をお預かりしております」

先頭のセフィラは丸められた親書を差し出した。セフィロト国のシンボルが刻まれたそれは、たった一枚だったがこの国を左右する多大な権力を持っていた。

季節はちょうど夏を迎えようとしていた頃、グリモワール王国とセフィロト国の間に戦争が勃発した。

## SECT・1 悪魔ノ末裔

大使の謁見を終えて屋敷に戻ってくると、執事のクリスが待っていた。

「ぼっちゃま、旦那様が……」

「分かっている」

顔がこわばるのは止められなかった。

父親が待つ応接室の一つへたどり着き、その前で一度深呼吸した。意を決してノックする。

「入れ」

扉越しに声がした。

部屋に足を踏み入れると、壁まで迫る本棚が出迎えた。

もともと本の好きな父親は若い頃学者を目指していたと聞いた。

最も、クロウリー家の当主にそんな選択肢はない。

悪魔耐性が弱くコインの所有者になれなかった彼は政治家の職に就き、いまでも忠臣としてグリモワール王家に仕えている。

「遅かったな」

「申し訳ありません」

「まあいい」

そう言い捨てて父親は抑揚のない声で言った。

「すでに幾人かに話はつけた。レヴィ公爵家の長女セリーヌ「M」レヴィと次女フィリア「M」レヴィ。それにフローラ「K」ビエラ。いずれもクロウリー家跡継ぎの母として申し分ないだろう」

3人とも名前に聞き覚えがあるからおそらくどこか公式の場で顔を合わせた事があるのだろう。何よりレヴィ家もビエラ家もクロウリー、グリフィス、ライアット等と並ぶグリモワール王国に7つしかない公爵家だ。

こういう時に、公的な場にほとんど出席しなかった自分が恨めしく思われる。

その娘がどんな人物であるかを全く思い出せないのだ。

「明日には一度全員と顔を合わせられるよう手配する。今月中には式を……」

「父上、それは」

「口答えは許さん」

びくり、と体が震えた。

どうしてだろう、幾つになっても全身がこの人を畏怖する。逆らえない。

「先方は是非にとおっしゃっている。明日の午前には引き合わせよう」

思い出せない。

初めて会った時からこうだったのか……？

張り付いたように声が出なかった喉は、最後まで反抗の言葉を紡ぐ事が出来なかった。

一体どうしてこんな事になってしまったんだろう。

眠れない一夜を過ごした後、重い頭と体を引きずって起き上がった。

思考がほとんど停止している。よく分からないままクリスの指示で装丁を整え到着するというレヴィ公爵家の娘を待った。

心を占めるのはあの笑顔。

もう離れないと誓ったのに。

「ぼっちゃま、本当によろしいのですか」

「……」

戦争に行く前に式を挙げる。

それはある意味子孫を残した後は用済みだと宣告されたようなものだった。

あの父親を知る者からすれば当たり前の事であるし、いつかはこうなると予測していた事でもあった。以前ならきつとそれを諦めて

受け入れただろう。4年前、レメゲトンの職に就いたときのように、自分を殺して偽りの言葉を唱えて。

だが、今は違う。

大切な人が心に住んでいる。

あの少女以外はいらないと、心の底から叫んでいた。

「セリーヌ様にご到着されました」

いったいどうしたらいいのか。

答えが出ないままに扉は開いた。

音に反応して振り向いた。

開いた扉の向こうには黒髪美しい女性が立っていた。完全に少女の域を脱した顔立ちは教養に溢れた理知を示唆していた。

しかし、すでに名も忘れてしまった彼女にかける言葉が見つからなかった。

「お久しぶりです、クロウリー伯爵」

久しぶり、と言われても全く覚えていない。

どうしたものかと思っていると、彼女はくすくすと花がほころぶように微笑んだ。その様子は姉上の雰囲気ととてもよく似ていた。

「やはり、もうお忘れなんですね。セリーヌ「マリア」レヴィと申します。公式の場で幾度かお会いしましたのに、いつも伯爵は私の事をお忘れてした」

「ああ、それは……申し訳ありません」

いつものことではあるのだが、我ながら失礼極まりないと思う。

かといって覚えようと思っても、毎回何十人も挨拶に来る女性の名を覚えるのはなかなか困難なわけなのだが 最も、覚える気がないといってしまうばそれまでだ。

「もう自己紹介は必要ないでしょうが……」

礼儀に従って膝を折った。

「アレクスター「ウォルジェンガ」クロウリーです。以後お見知り

おきを、婦人<sup>レディ</sup>」

手をとって軽く口付けた。

そのまま手をとって導き、椅子を引いた。

優雅な仕草で腰掛けたレヴィ家の娘は、幼い頃から貴族としての嗜みを叩き込まれてきたのだろ。無駄な動きは一切なく、表情までも計算されているのではないかと思うほどだ。

その反対側に座り向かい合わせの体勢をとる。

「本当に今回は驚きました。まさかクロウリー公爵様直々に私の元へ令を下されるなんて」

娘は本当に嬉しそうに微笑んだ。

「いつかこうやってお話してみたいと思っていました。それがこんな形で叶うなんて思っても見ませんでした。まるで夢を見ているようです」

困惑して口を噤んだ。

もともと話すのは得意ではない。上に一方的に好意を押し付けられるのは好きではない。

相手に失礼のないようにと思ってはいるのだが、愛想よくするのは最も苦手とすることだった。終始笑顔の義兄上じゃあるまいし、女性との会話など思いつきもしなかった。

ずっと自分の事ばかり話すレヴィ家の長女を持て余しながらぼんやりとしていた。

「アレイスター様とお呼びしてもよろしいですか？」

「どうぞお好きに」

姉上が騎士団長クラウド＝フォーチュンと出会ったのはやはり社交の場だったらしい。

すでにレメゲトンとして国内を忙しく回っていた頃の出来事なので詳しくは知らないが、どうやら姉上の方から積極的に近づいたのだとか。確かにフォーチュン家は侯爵家でありさらにその当主の義兄上は騎士団長でもあるが、公爵家であるクロウリーの娘を、それも父上の思い入れの深い姉上をそう簡単に迎え入れられたとは考え

にくい。

姉上自身の強い意思がなくては無理だっただろう。

何より、クロウリー家の者と婚姻を結ぶにはとある条件が必要だった。

その条件によつてクロウリー家は近親婚が多く、さらに血が濃くなる傾向にあつた。

今日3人ともに会え、と言つた父上の言葉の裏には試せ、という命令も入っていたはずだ。

がたりと席を立つた。

「アレイスター様？」

驚いたような娘の声を尻目に、テーブルの反対側にいた娘の背後に回つた。

本当ならいくらか時間をかけて調べるのだが、もう面倒だった。

後で叱責を受けてもいい。どうせ自分はもう幾許もないうち戦争のためこの家を出るのだ。

「少しの間だけ失礼します」

義兄上は幸運にも耐性に恵まれたらしい。

忌まわしきクロウリーの系譜だった。

公然の秘密として、クロウリー家は悪魔の子孫だと言われている。それは何も噂に限つた事ではない。

「ア、アレイスター様……？」

椅子の後ろからレヴィ公爵家の長女を抱きしめた。

「無礼をお許しください。しばしの間だけ……」

娘は頬を染めてじつと俯いた。

静寂が通り過ぎていく。

1分、2分……

この娘が何を考えるかは知つたことではない。ただ、10分ほどこうしていればいい。

すぐに答えは出る。

沈黙が部屋を支配してから１０分以上過ぎただろう。

それまできつちりと姿勢を正していた娘の体勢が不意に崩れた。だが、それに何の感慨もわからない。

早く自分から離して休ませなくてはいけない。

「お加減が悪いようですね」

「あ、いえ、大丈夫です……」

ずっとまわしていた手をほどいて使用人を呼んだ。

「別室でお休みください」

「あの、アレイスター様」

まだ何か言いたそうな娘を部屋から追い出して、一息ついた。

悪魔の血は確実に耐性を持たない人間を蝕む。

クロウリー家に嫁ぐためにはレメゲトン並みとはいかなくても、それなりに強い耐性が必要だった。特に悪魔耐性の強い自分は悪魔の血が濃いとされている。

ダンスで手をとるくらいならたかが知れているが、全身を密着させた状態では普通なら１０分前後が限界だった。

「かあさま……」

幼子のように呟いて窓の外を見た。

庭園が広がり、ダリアの花が最後の艶姿をひらめかせていた。

## SECT・2 叶ワヌ願イ

その日のうちに3人と会い、3人とも試した。

幸か不幸か3人の中に十分な悪魔耐性を持つ者はいなかった。

これは一般的に知られていないことだが、悪魔の血を引くとされるクロウリー家の人間もまた存在するだけで悪魔の気を発するのだった。

悪魔の気は人にとって毒だ。身体も精神も徐々に蝕んでいく。特に血が濃く、強い気を発する自分にはそれ相応の耐性を持つ花嫁が必要だった。

そんな自分に、父は吐き捨てるように言う。

「お前は無駄に耐性ばかりある。明日まで待て。また他に……」

この上まだ探そうというのか。

「父上、もう」

「お前は口を挟むな」

「ですが」

「口を慎め、アレイスター」

民衆からは絶大な支持を誇る悪魔の血を自分はずっと毛嫌いしてきた。

幼い頃から人に触れられる事はなく、また触れようと思わずに生きてきた。炎妖玉騎士団ガーネットにいた頃もあまり長く人に触れないよう注意を払ってきた。生みの母も範疇外ではない。

その中でも例外といえるのが実の姉とレメゲトンのねえさん、それに あにくそガキだけだった。

あんなに人に触れたいと切望したのは初めてだ。

並外れた悪魔耐性を持つあのグリフィス家の末裔は、何の気兼ねもなく触れられる世界で唯一の人間なのかもしれない。

「少し家柄は落ちるが仕方がない。明日にまた3名ほど候補を屋敷に呼び寄せておく」



「私は」

「くどい！」

びりびり、と全身が押さえつけられるような怒号。  
体の心まで震え上がり、思考が停止する。呼吸すらもままならなくなってしまう。

この人にだけは何故か逆らえない。自分ではどうにもならない畏怖が覆いかぶさってきて身動きが取れなくなる。

それでも。

どうしても譲れないことはある。

自分はある少女に出会ってずいぶん変わる事が出来た。

「父上。お聞きください」

「聞くことなどない」

ぴしゃりとした口調に押されそうになる。

しかし大きく息を吐いてゆっくりと言葉を紡いだ。

「私はもう他の女性に会いません。配偶者を手当たり次第連れてくるのはやめてください」

「何を言う。お前にはクロウリー家を継ぐことの出来る男児をこの家に渡す義務がある。そのために庶子のお前を引き取ったのだ」

ウォルジェンガ・ロータス、その名を捨てたのは5歳の時だ。初めてこの屋敷に足を踏み入れた時から、自分の名前はアレイスター・W・クロウリーになった。

そのためこの父との関係は一方的なものだった。

「父上も、もうリリア・ロータスのような犠牲者を出したくはないはずだ」

その名にいつも無表情な父親が反応した。

生みの母リリア・ロータスは悪魔耐性が低かったために、息子の悪魔の気に耐えられず病に倒れ、そのまま帰らぬ人となった。

もともとクロウリー家の使用人で、城下から通う平民だった母は見目麗しさから父親の身の回りの世話係に昇格し、主の子を身ごも

ってしまった事で職を失った。

それでもクロウリー家に引き取られるまで5年もの間、城下の裏町で女手一つ自分を育ててくれた。

「……二度とその名を口にするな！」

初めて見るかもしれない嫌悪の表情を浮かべた父は吐き捨てるように言った。

思わず一度口を噤む。

「去れ。明日までには手配する。妙な考えは起こさん事だ」  
「嫌です」

引き下がれなかった。

心臓が破裂しそうなくらいに拍動しても、握り拳の中で嫌な汗をかいていても、畏怖の念で足が震えても。

「まだグリフィス家の娘に未練があるのか。王家があんな娘を引き入れようとしている。それを邪魔する事はまかりならん」

「……それは、グリフィス女爵が決める事です」

「そこが根本的に違うというのだ。決めるのは陛下と殿下だ」

「ゼデキヤ王もミュレク殿下もそのように人の心を見捨てるような事はぜつたいにありません」

「ではグリフィスの娘がお前を選ぶとでも言うのか？」

そう返されて言葉に詰まった。

あんなガキが俺を選ぶ事などあり得ない。なぜなら隣には育て親のねえさんがいるからだ。

「話にならん。それ以前に王家に楯突く事は臣下として絶対にあつてはならんのだ」

レメゲトンとしてではなく政治家としてずっと王家に仕えてきた現クロウリー公爵は、王家に絶対の忠誠を誓ってきた。

きつとこれからそうだろう。

「私も用がある。話はここまでだ。候補は追ってクリスに知らせておく」

父親は立ち上がり、部屋を出て行った。

自分はまだそこに佇んで唇をかみ締めていた。

あのくそガキが自分を選ぶ事はない　それはわかっていたはずだった。

その上で見守る事を選び、傍にいと誓ったのだ。  
だが、今の気持ちはどうだろう。

自室に戻ってソファに身を沈めた。頭に手を当て、自嘲的に呟く。  
「何て……我俥だ」

あのガキの事は言えないな。  
我俥どころの話ではない。

ねえさんやミュレク殿下を差し置いても、俺の事を一番に選んで欲しいと思う自分がいる。他の誰でもなく自分だけを見て欲しいと願う勝手な思いがある。

あの舞踏の夜に一瞬だけ夢を見たのが間違いだったかもしれない。  
自分だけが漆黒の瞳に映っていると勘違いし、欲が出てしまったのだ。

「最悪だ」

求められなくても傍にいただけでよかった。

しかし、傍にしていることを許された。

そうすれば次に願うのは分かっていたはずなのに。いつかは独占欲と支配欲がのさばってくる事なんて周知の事実であつたろうに。

愛されたいと願う心にだけは絶対に気づいてはいけなかったのだ。  
砂漠の真ん中で水を求めているような渴望に支配されていく。

忘れようとすればするほどその心は膨らんでいく。  
「いったいどうすればいい……？」

問いは部屋の静寂に吸い込まれるだけで何の答えも導いてはくれなかった。

答えの出ぬまままた眠れぬ夜を過ごした。

ところが次の日、重い気持ちを抱えて起き上がった自分を待っていたのは信じられないニュースだった。

### SECT・3 陥落

王国最強の炎妖玉騎士団ガーネットが守る東端の砦カーバンクルが陥落した。その知らせに頭を殴られるようなショックを受けた。

同時に目が覚めた。

いまは戦争の時だ。結婚がどうの、自分の願望がどうのと言っている場合ではなかったのだ。昨日までの自分を反省し、すぐにジユデツカ城に参上した。

王の執務室にレメゲトンが全員集合していた。

メイザース侯爵が静かに戦況を告げる。

「大使が書簡を届けた日の午後にはすでに攻撃が始まっていたようです。準備が不完全だった炎妖玉騎士団ガーネットは応戦したものの被害は甚大、残った兵を連れて団長であるバーディア卿が東の都トロメオに退いたそうです。」

「宣戦布告をした瞬間に攻撃とは、してやられたな。」

ゼデキヤ王は頭を抱えた。

部屋を沈黙が支配する。

炎妖玉騎士団は3年前まで自分が騎士として部隊長を務め、今はレメゲトンとしても所属する思い入れの深い騎士団だ。

団長のフォルス「L」バーディア卿にはプライベートでもかなり世話になっている。

みな無事なのだろうか。

「……すぐトロメオに向かいます」

そんな言葉が自然に口から滑り出た。

「頼む、クロウリー伯爵。それにファウスト女伯爵、すぐに出発してくれ」

「御意」

「おそらくセフィロト国も戦にセフィラを投入しているはずだ。普通の兵だけではいくらも持たんだろう」

そうだ。

早く向かわねば。

「アリギエリ女爵、国家医師団から数名選出し、物資を届ける一団と共に戦地へ向かってくれ。到着後市民退去の指揮を執れ。準備ができ次第、<sup>ダイヤモンド</sup>輝光石騎士団と現在トロメオから最も近い琥珀騎士団<sup>アンバー</sup>を向かわせる。老師とメイザース卿は戦況と敵の戦略を調べ随時報告してくれ」

「はい」

「現場の総指揮はバーディア卿に一任してある。被害を最小限に食い止め、トロメオを最終点としてセフィロト国の侵入を防ぎ、防衛ラインをカーバンクルまで戻したい。まずはそれからだ。とにかく国土を防衛する。人々への被害を増やすな」

「承知しました」

ゼデキヤ王は的確に指示を出し、レメゲトンはその持ち場を与えられた。

「すぐ行動に移ってくれ」

「はっ！」

その中で動いていない人間がいる。

レメゲトンになったばかりのグリフィス家の末裔だった。

くそガキは戦場に出るにはまだ早い。おそらく王都残留が命じられるはずだ。

呆然となっているガキを一人残し、戦場へ向かう準備のため執務室を後にした。

「おそらくラックは漆黒星騎士団<sup>ブラックルビー</sup>の訓練所に移るはずよ」

廊下を早足で急ぎながら、隣のねえさんが言った。

「義兄上ならうまくやってくれるだろう」

「そうね。いまの實力で戦場に出るのは無理よ。まだ修行が足りない

いわ」

そこでねえさんは少し目線を床に落とした。

「離れ離れになっちゃうわ。あの子はまた……悲しい思いをするのね」

「大丈夫だ、あのガキは強くなると言ったんだ。大切なものを自分の手で守りたいと、はつきりミクレク殿下にも申し上げたそうだ」

「まあ、あの子殿下にそんな事を！」

ねえさんは小さくため息をついた。

「そう言っただって事をあなたに宣言してる辺りが一番問題かしらね」  
「は？」

「こつちの話よ」

城を出たねえさんは、数刻後に迎えに来るよう言ってから、颯爽と去っていった。

やはりねえさんは自分のことを御者が何かと勘違いしているらしい。

屋敷に戻ったが父親は公務で入れ違いにジユデツカ城へ向かったようだ。

沈黙の中に安堵した。

またあの人の前に出て、戦いに赴く事を直接告げる勇氣はなかった。

黙って王都を離れよう。後々どれほど叱責を受けようと連れ戻そうとしようと、戦地へ向かう事は王命なのだ。忠実なあの父親が強く出られるはずがない。

もし王都に別れを告げる人がいるとしたら、それは幾人にも満たない。

一番会わなくてはいけないのはきつと、彼らだろう。

在宅か分からなかったが、とりあえずねえさんの家に行く前にフオーチュン家へ向かうことにした。

どこか落ち着かない景色の中に戦の気配がある。

ダイヤモンド

輝光石騎士団は自分たちと共に戦地へ向かう。数百人規模の大所帯だ。その準備は即日で行われているのだから今頃団員たちは大忙しだろう。

屋敷に着くと、すぐに姉上が出迎えてくれた。

「ごめんなさい、クラウド様はいらっしゃらないの。忙しくなるそうね」

「……はい」

「見合いのこともクリスに聞いたわ。大丈夫、そっちは私から父上に申し上げておきましょう」

この人にはなんでもお見通しなのだろうか。

ほとんど年の変わらない腹違いの姉はいつも自分のことをよく見ていてくれた。昔はそれが苦手だった。何もかも見透かされているようで怖かった。

でも今は

「ちゃんと帰ってくるのよ、アレイ。あなたたちの結婚式、楽しみにしているのよ？」

「……いつの話です」

「いつでもいいわ。戦地で婚姻したって飛んでいくんだから」

「無茶はやめてください」

軽くため息をつくとき、姉上はいつものように軽く微笑んだ。

ふわりと温かい空気がその場を包む。

「貴方は強いからいつもそんな風に弱みは見せてくれないのね。ずっとそれが寂しかったのよ？」

自分と同じ紫の瞳は、悪魔の血を引く印だった。

「ラックのことはクラウド様に任せてちょうだい。あの人はきつと立派に育ててくれるわ。何しろ養女にしようと言っていたくらいなんですから」

「……そうですね」



そうだ、漆黒の瞳の彼女にも一度別れを告げねばならない。

またあいつは泣くんだろうか。それとも困らせないようにと我慢するのだろうか。

「さあ、行きなさい。貴方はグリモワール国のレメゲトンよ。貴方にはこの国を勝利に導くがある。この国の人々を守っていく力があるわ」

「はい」

ゼデキヤ王に誓った忠誠が揺らいだ事はない。

セフィロト国が攻め込んできた今、セフィラを相手に出来るのは今自分とねえさんしかない。

これまで自分が力を磨いてきた意味があるとしたら、きっとこの戦で国を防衛するためだ。

ガーネット  
炎妖玉騎士団は東の都トロメオに退いたという。

トロメオは大都市だ。そこが戦場になれば多くの人が犠牲になってしまう。早急に防衛ラインをカーバンクルまで戻さなくてはいけない。

「ちゃんと帰ってくるのよ、アレイ」

「ありがとうございます……行ってきます」

不思議と怖さはなかった。

もし自分の持つ力で人々を守れるのだったら、全力を尽くそうと思った。

ただ、一度だけ見たくそガキの涙が頭の中をちらついて離れなかった。

## SECT・4 別レノ言葉

フォーチュン家を出てそのままねえさんの屋敷に向かった。

どうやってこんな短時間にとと思うような大量の荷物を準備して出迎えてくれたねえさんは意外といった口調で言った。

「早かったわね」

「別れを言う相手もないからな」

「ラックなら上にいるわよ？　泣きそうな顔してるから会っていきなさい」

思わず顔が引きつりそうになったが、抵抗するより会いたいという気持ちの方が強かった。

馬車に荷を積み込むねえさんを置いて、屋敷の二階の廊下に黒髪の少女の姿を見つけた。

「……ねえちゃん」

階下の馬車を見下ろしてポツリと呟いた少女は今にも壊れそうな世界を必死で保っているように見えた。

「おい、くそガキ」

声をかけると漆黒の瞳がこちらを向いた。

かすかに潤んでいるようでどきりとした。

「……アレイさん」

「世界の終わりみたいな顔しやがって」

そう言う少女はまた顔をゆがめた。

「アレイさんも行っちゃうんだね」

「ガキの戯言を聞かなくていいかと思うと清々する」

いつものように台詞を吐いたつもりだったが、ガキの顔はますます歪んでいった。

「泣きそうな顔をするんじゃない。もう二度と会えないわけじゃないだろう？」

「そつだよ、そつだけどさ……」

泣きそうな顔するな、と言ったくせに我慢する姿は見ていたくないと思う。泣きたいなら泣けばいいと思うのに泣いている姿を見たくないと思う。

この少女を前にするといつも自分の中で矛盾と葛藤がせめぎあう。他の貴族の女性を前にした時とは感情の起伏が全く違っていているのだ。誰より愛しいグリフィスの少女は何かをこらえるように唇をかみ締めた。

「俺の前で我慢するな。見ちゃいけない」

「だって……だって……」

「ねえさんの前では言えなかったんだろう？」

本当は行かないで、と言いたかったはずだ。

そうやって必死に何かを押しとどめようとする姿すらも愛おしいのはもう末期なのかもしれない。

本当は傍を離れたくない。

ずっと傍にいてやると、舞踏の夜に約束したはずなのに。

自分はその誓いを既に破ろうとしている。

「うつ……だって……」

少女の大きな漆黒の瞳から涙が零れ落ちた。

二度目の涙だった。

一度目は滅びの悪魔グラシャ・ラボラスに左腕を食われた後だった。あの時怖かったと言つてすがりついた少女の姿は今でも脳裏に焼きついてはなれない。

「分かつてるのにつ……おれが弱いから……一緒に行けな……でも、ほんととは、ほんととは……」

しゃくりをあげながら切れ切れに言葉を紡いだ。

美しい涙の粒に目を奪われた。

それを隠すように少女は床に目を落とし、そのまま胸元に額を預けてきた。

思わずその体を受け止めて黒髪に手を当てた。

「顔、上げる」

そう言つと少女は顔を上げるところかますます強く額を押し付けて胸元をぎゅっと掴んだ。

「傍にいてくれるって言つたじゃん……」

絞り出された声は確実に胸を貫いた。

あの時誓つた言葉は嘘ではなかった。

だが、心と裏腹に目まぐるしく変化する時代がその誓いを引き裂いていく。

「おれだつて知らない場所でアレイさんが危険な目に遭うのなんてやだよ。すぐ助けられるように傍にいたいよ」

傍にいたい、と言つてくれる事が心躍るほど嬉しいはずなのに、今は胸の奥を締め付けた。

離れたくない。

心がそう言つても聞き入れてくれる世情ではない。

「おれに出来ることなんて……すごく少ないけど」

そんなことはない。

過去を受け入れられたのも、人の優しさに気づいたのもすべてお前のお陰だ。

これほどまでに感情は揺れ動くものだと思つたのも、人のために自分の全てをかけてもいいと思えるようになったのも

「約束を破るつもりはなかったんだ」

かろうじて呟いた言葉はただの言い訳でしかなかった。

それでも傍にしようとした気持ちが本当だという事だけは疑つて欲しくなかった。

「知ってる。戦争だつて……王様が……」

戦地に行つてしまえばこうして震える肩を抱いてやる事も出来ない。弱音を受け止めてやる事もできない。

「うそつき」

少女の言葉は鉛の様に重くのしかかる。

反論する術を自分は持たない。

不意に少女の漆黒の瞳が自分を貫いた。

「行かないでよ、アレイさん……！」

最後通告された気分だった。

苦しい。どうしようもなく胸が苦しい。

「すまない」

どうして自分はこの少女の傍にいてやれないんだろう。

自分は傍にいたいと願い、この少女は傍にいて欲しいと願ってくれたのに。

「どうしても行かなければならないんだ」

世界の崩壊を悲しんでただ涙を流し、見上げてきた少女の額にそっと口付けた。

額にするキスは尊敬。

驚いたように目を見開いた少女の頬にもそっと唇を寄せた。

頬へのキスは 愛情。

愛していると言葉がこぼれそうになるのをこらえて、震える桃の唇に惹かれる気持ちを抑えて艶やかな黒髪を撫でる。

「俺はミュレク殿下のようにお前を安全な場所に匿う術など持たない。だから……待っている。お前が自分で俺と同じ位置に立てるようになるまで」

自分に出来るのはそれだけだから。

この少女の強い魂を信じ、願う事を叶えてやるにはそうするしかないかったから。

それでも傍にいたいことを願うから 今のことでなくずっと先の未来を見据える事が出来たなら、少女はきっと自らを鍛える道を選ぶはずだ。

強く抱きしめると華奢な肢体はふわりと浮いた。

「代わりにお前がいる王都を、この国を守ってやるから」

静かにそう呟くと、少女は首に手を回してぎゅっと抱きついてきた。

もうこの少女以外要らない。それが父親に反抗する事になったと

しても。

自分を選んでほしいと思う気持ちはおそろくずっと消えはしないだろう。傍に続ける限りずっとその気持ちに翻弄されながら生きていくのだろう。

心地よい鼓動が重なって、少女の震えが次第に止まっていくのがわかった。

もし、もう一度だけ勘違いしてもいいと言われたなら、迷わず自分は少女の手をとるだろう。

「ごめんね、アレイさん。ワガママ言っちゃったよ」

首に手を回したまま耳元でポツリと呟く少女の声は、どこか恥ずかしそうに響いた。

「構わない。その方が……嬉しい」

もし、この少女がこんな風に弱みをさらけ出すのが自分だけだとしたら、少しは期待してもいいんだろうか。

「そうなの？」

不思議そうな少女の声に答えるつもりはなかった。

いつか少女の瞳が自分にだけ向けられる日が来るのなら……そんな事を考えないようにするのは一種の保険なのだろう。

小さな街の片隅で初めて見かけた時には、すでに決まっていた事なのかもしれない。

たとえそれが自分の中に流れる悪魔の血が呼んだ縁だとしてもかまわない。この時代この少女に出会えたこと自体が奇跡に思える。

これが世の女性たちの言う運命と言う奴なら、その存在を少しは信じてやってもいい。

何度も溢れそうになる気持ちを押しとどめておく事が最善だと言いつつ聞かせていた。

少女が自身の気持ちの変化に気づき始めているのだとは知らず、

言葉を何度も胸の奥に飲み込んだ。きっとこの感情をまだ知らない  
無垢な魂は受け止める事などないだろうから。

それでももしこの時少女に気持ちを伝えていたら、未来は変わっ  
ていたのだろうか？

それとも

## SECT・5 保険

遠ざかっていく屋敷の玄関ですつと手を振り続けるガキを後ろに見送って、戦地への道のりについた。

「子供が成長するのは嬉しいけれど寂しいのよね」

ポツリと呟くねえさんの声のトーンが恐ろしい。

道中馬車に二人きりというのはかなり厳しいものがある。

ところが、ねえさんの口から出たのはいつものように自分を牽制する言葉ではなくむしろ肯定する言葉だった。

「アレイ、あの子を絶対に離しちゃだめよ。ラックにはあなたしかないし、あなたにはラックしかないんだから」

「違うだろう。それは俺の役ではなくねえさんの場所だ」

戸惑いながらも当たり前前の答えを返すと、ねえさんの金の瞳が自分を射抜いた。

「もう認めなさい。あの子を支える事が出来るのはあなただけだよ」

有無を言わさぬ眼だった。

「他の誰の前であの子が泣くというの？ 怖いだなんて言うと思うの？ 誰の言葉だったら別離を納得するの？」

「それは」

「あの子が泣くところなんて一度だって見た事がないわよ。3年間育てていて、一度もないのよ？」

ねえさんの前で泣かないのは困らせたくないからだ。嫌われたくないからだとあいつははつきり言った。

自分の前で弱音を吐くのはきつと父親というポジションについてしまったからだ。

「もう悔しいったら……！」

そんな事を言われても仕方がない。優しく包むのが母の役目だとしたら、全部受け止めるのが父の役目だ。ごく一般的な家庭では



そうなっているはずだ。

残念ながら自分の家は全く違うものになってしまっているけれど、と、ねえさんの人差し指が目の前に突きつけられた。

「いい加減意地を張るのはやめなさい、アレイ。伝わらなくてもいいなんて言ってたらあの子は本当に気づかないわよ。誰かが教えな」と分らない事だつてあるの」

ごくろ、と唾を飲んだ。

ねえさんの目がいつになく本気だったからだ。

「次に会うのはいつになるのかしら。半年後？ 一年後？ その時あなたはいつたいどうするつもりなの？」

「……」

「あと2年もすればあの子も成人よ。その頃に戦争が終わっているかどうかは分からないけれど、確実に周囲はラックを放つては置かないでしょうね。もう私たちを含めて6人しかないレメゲトンの、しかも稀代の天文学者ゲーティア「グリフィスのただ一人の子孫よ、もし手に入られれば絶大な地位と権力を手にする事になるもの」

地位。権力。名声。

少女はきつと戦争とは全く違う争いの渦中に巻き込まれていくだろう。何も知らない無垢な少女はおそらくそれになす術なく翻弄されてしまっただろう。

「ミュレク殿下は立派よ。彼はラックを全てから守るつもりでいたもの。それをちゃんとあの子に伝えたのよ 姫のお気に召さなかったようだけれどね」

レメゲトンではない職を与えることは、この国をすべる王族であるからこそできることだ。

グリモワール王国ではすべての任命権限が王の下にある。レメゲトンはもちろん騎士、国家医師、騎士、議員、爵位に至るまですべてが王の名の下に定められている。

独裁ともなりかねない王の所業を唯一止める権限を持つのは貴族議会だ。通常議会とは別に設置されたそれは王を罷免する事が出来

る。

ある意味で王と同等の権力を持っているのだ。  
いずれにせよ要職はすべて王族の意思で決定される。

いかに名門クロウリー家の嫡子であってもそこに口を出す権利はない。

「ちゃんと示しなさい。あの子はいつだってそれを望んでいるわ」  
そうだ。あいつはいつも迷っている。

ねえさん、銀髪のセフィラ、街の人間……大切なものが多いせいで、やりたいこととやらなくてはいけない事が多すぎるということも困惑して足が前へ進まなくなるのだ。

そんな場面に何度も出くわした自分は、いつもあいつの目の前にやるべきことを「一つだけ」残してきた。

きつとまたあいつはたくさん大切なものに囲まれて身動きできなくなるときが来る。

そして、あいつが最も苦手とする身分とか権力とか、そんなものの大きな流れに巻き込まれていくんだろう。

その時自分は一体どうするんだろう。

果たして少女に手を差し伸べる事が出来るのだろうか。「一つだけ」の道の先に自分を選べと言う事が出来るのだろうか……？

戸惑って口を噤んだ自分に、ねえさんは諭すように言った。

「拒絶される事を恐れないで。あの子は今も成長しているわ。そう遠くない未来、あなたの気持ちを理解するようになるはずよ」

「俺は」

傍ににいるというだけでなく、もう一步先に進んだ解答が必要だった。

それはすなわち彼女の要望をかなえるだけでなく自分の望みを表に出すと言う事と同義でもある。

「大丈夫よ、心配しないで。ラックを3年も育ててきた私が言うのよ？ それが信じられないって言うのかしら」

答えられなくて唇をひき結んだ。

「努力……する」

かろうじてそう呟くと、ねえさんは不満そうだったがとりあえず納得したようだ。

その様子にどこか違和感を覚えた。

「ねえさん。どうしてそんな事を言い出したんだ？　今までは俺があのかそガキに不必要に近づくのを嫌がっていたはずだ」

今日のねえさんは少しおかしかった。

何かを急くように結論を導こうとした。

まるであのかそガキの将来を誰かに託すかのよう……

「仕方ないじゃない。これから向かうのは戦場なのよ。いったいいつ命を落とすか知れない」

ねえさんの顔が翳った。

「もちろん死ぬ気なんてさらさらないわよ？　でも、保険はかけておくものでしょ」

ああ、そうか。

自分の身のことなどすっかり忘れていた。

これから向かうのは戦場　いつ命を落としてもおかしくない場所だ。

「そんな弱気はねえさんらしくないな」

「……言うようになったわね、アレイ」

ねえさんは唇の端を上げた。

「じゃあ、最後にあの子に関係ないことを一つだけ。これは、忠告よ」

「何だ？」

「ほんのわずかだけれどレメゲトンに不信感を抱く者が出ているわ。おそらくセフィロト国の言い分を聞いたものたちでしょうね」

セフィロト国の言い分、つまりはレメゲトンがセフィラへ攻撃を加えたことが戦の一因となったことを指しているのだろう。

セフィラと戦闘したのは事実である。

だが、その裏の事情を知らない人々にとって戦争の引き金になる

ような行動をしたレメゲトンへの不信が高まるのは仕方のないことだ。

「分かった。気をつけよう」

最初は小さなひび割れでも、後の決壊に繋がる事もある。

「ごめんなさいね、私がいづらを倒せなかったばかりに」

「いや、それは」

無茶と言うものだろう。

貴族たちのひしめくジュデッカ城に突如現れたセフィラを転送しただけでかなりの功績だ。それも相手は美の天使ミカエル。王冠の天使メタトロン、王国の天使サンダルフォンに継ぐ実力を持つ強大な相手だった。

「セフィラにはもう負けないわ」

気まぐれ猫のような金の瞳に物騒な笑みを浮かべて、レメゲトンの長は宣言した。

とてもじゃないが、今のねえさんを敵に回す気はしない。

純粹に剣技や身体能力は完全に勝っているだろうが、悪魔を絡めた戦闘となると話は別だ。

「誰が来ようとトロメオより西には進ませないわよ」

「……そうだな」

あいつのいる王都を守るといったから。

それだけではない、レメゲトンとしてグリモワールの民を守る使命がある。大切な国を傷つけさせるわけにはいかなかった。

がたがたとなる馬車は、確実に戦場へと導いていった。

## SECT・6 フォルス「L」バーディア

東に近づくにつれ、戦の気配が濃くなってきた。

カトランジエの街を過ぎ、ラッセル山を越えた辺りから広がるグライアル高原を抜けていくと、おそらく東の都トロメオから逃げてきたと思われる人々の一団が大きな荷物を馬に引かせていたり兵士らしき鎧の男たちが軍に供給する食料を荷馬車に積んでいたりした。はるか遠い王都ユダでは感じられない生々しい空気が心を落着かせてくれなかった。

今この瞬間にもトロメオはセフィロトからの攻撃に耐えているのだ。

早く気持ちは加速するばかりでトロメオは遠かった。

それでも王都を出発して一週間、ようやく東の都トロメオに到着した。セフィロト国の攻撃はいったん止んでいるようだ。

その隙に外郭内に入り、まず何より先にトロメオを治めるシェフイールド公爵家の屋敷へと向かった。

この都市の造りは基本的に王都ユダと似ている。小高い位置にあるシェフイールドの屋敷を一重の外壁が取り巻き、その周りを城下町が埋めて、さらに周囲を大きな外郭が覆う。

特にその外側に堀を一周させているのがこの都市の特徴だった。

おそらくみな家に籠っているか既に逃げ出してしまったのだろう、街は閑散としている。兵は民家に分かれて宿泊しているのか、またはどこか一箇所ですべて野営しているのか、見回りの兵士以外は見当たらなかった。

シェフイールド公爵家も使用人のほとんどはすでに解雇したらしく、広い屋敷はがらんとしていた。公爵自身もおそらく既に避難し

てしまっただろう。

出迎えてくれたのは、自分と同じ年くらいの騎士団員だった。

「お久しぶりです、ウォル先輩！」

満面の笑みを湛えた彼は、懐かしい名を呼び覚ました。

生みの母以外では、故郷と呼べる炎妖玉騎士団ガイネットの者たちだけが使う名だ。懐かしいようなくすぐったいような感覚に、思わず頬が緩んだ。

「レメゲトンのメファイアⅡRⅡファウスト様ですね。私は炎妖玉騎士団アルマンデイン部隊長のフェルメイⅡバグノルドと申します。フォルス団長がお待ちですので、どうぞこちらへ」

はきはきと自己紹介をした部隊長フェルメイは人懐こそうな笑顔をねえさんに向けた。

3年前、19歳当時はアルマンデイン部隊の4班のリーダーを務めていたフェルメイがすでに部隊長　3年という時の長さを改めて感じ取った。

自分より一つ年下のフェルメイは当時から抜きん出た才能の片鱗を見せていた。

昔に比べると肩幅も広くなり、全体的にがっしりとした体格になったようだ。

フェルメイは黒い扉の前で立ち止まり、軽くノックした。

「失礼します。レメゲトンの方々をお連れしました」

返事もないのがちやりと扉を開けた。

するとそこで待っていたのはつい先日ミュレク殿下の誕生パーティで会ったばかりのフォルス騎士団長の姿だった。

真紅の甲冑に身を包んだ姿はとてもあの適当な人間と結びつかない。

「レメゲトン、メファイアⅡRⅡファウスト、アレイスターⅡWⅡクロウリー、ただいま参上しました。これより総指揮フォルスⅡLⅡバーディア卿の指揮下に入ります」

ねえさんと二人、膝について深く礼をする。

「おお、そうか！ 遠路はるばるすまないな！」

上からフォルス騎士団長の大きな声が降ってきた。

ねえさんが頬を引きつらせて団長を見上げる。そのあからさまな困惑の視線に、思わず小さくため息をついてしまった。

フォルス騎士団長と3人の部隊長を交えて、早速戦況報告を行った。

資料を手にしたフェルメイが現在の状況を説明する。

「セフィラと思われる人物は現在2人戦闘に出ているようです。白の神官服を纏って防具はほとんど身につけていない様子なのですぐに見分けられます。単体で相手にする事は不可能なのでこれまでは多くの兵を投入してきました」

「そっちは大丈夫よ、これからは私たちが相手するわ」

「お願いします。他に総指揮官もセフィラようですが、戦闘に出る意思はないようです」

「総指揮官……第1番目ケテル、もしくは第10番目マルクトだろう」

先日宣戦布告したセフィラかもしれない。

「兵自体の数は向こうが5000、しかし今も増え続けています。」

対してこちらは炎妖玉騎士団員200名と琥珀騎士団300名、兵が2000。追って輝光石騎士団員約300名が合流します。さらに一般志願兵が2000名派遣されるそうです」

「数でかなり負けているわね」

「ただ個人戦闘能力はこちらの方がいくらか上回るようです。城塞都市トロメオに籠ったとはいえ、先日の戦闘は兵数を越えて互角でした」

ねえさんは少し考えるポーズをとった。

「もうすぐアリギエリ女爵が輝光石騎士団と共に到着するわ。市民の避難を最優先にして、とりあえずはトロメオで地盤を固めましよう。カーバンクルを奪還するのはその後よ」

「現在も騎士団員の指示のもと少しずつ退去しているところです。全員が避難するにはまだかかりますが、次の攻撃までにほぼ全員が脱出できるはずです」

それを聞いてほっとした。

戦術を持たない人々を戦闘に巻き込むわけにはいかない。

「寝た子を起こすような事はしたくない。相手が攻めてこないのなら静かにしていきましょう」

「そうです。いいですね、フォルス団長」

フェルメイがフォルス騎士団長に同意を求める。

「うむ、任せる」

この人は今までの話を本当に聞いていたのだろうか。

利発なフェルメイが部隊長に就任したのはこの人にとってよかったらしい。

「それではレメゲトンのお二人はお部屋に案内します。長旅でお疲れでしょう、ゆっくりお休みください」

部屋を出るとすぐ、ねえさんはあきれたように言った。

「フォルス騎士団長はいつもああなのかしら？」

「……そうですね。あの豪快さがあの人の特徴ですから」

フェルメイが苦笑した。

「細かいことを考えるのが苦手なんですよ。しかし信念を通す心の深さは随一です。私も尊敬しています」

「あなたみたいな補佐がいて正解だわ」

ねえさんが言うと、フェルメイはもう一度苦笑した。

「フォルス騎士団長も、本当はこんな風に人の上に立つのを好みません。他になれる器の人がいないためにもう何年も続けていらつしやいますか……」

フェルメイはふいにこちらを向いた。

「団長はずっとフォル先輩を騎士団長に据える事を考えていました

3年前までは。楽しみにしていたのですよ、今でも時々その話



をするくらいです」

それを聞いてねえさんは肩をすくめた。

「こんな無愛想な騎士団長は嫌よ」

「無愛想で悪かったな」

「団長はおっしゃっていました。自分のように腕っ節がたつだけで頭の足りない者は人の下について攻撃の盾になるべきなのだ。騎士団長はもっと思慮深く、またその場にいるだけで人の視線を集めるような絶対的な存在感を持った者になるべきなのだ、と」

「フォルス騎士団長は十分人の注目を集めていると思うが」

思わず正直な気持ちを口にしてしまったのに、フェルメイは首を横に振った。

「そういう意味ではありません。自然に周囲に人が集まる。そう、カリスマ性とも言うのでしょうか」

フェルメイは微笑んだ。

記憶の中にある彼の笑顔よりずっと大人びたその表情に少し驚いた。

「共に戦える事を光栄に思います。レメゲトンの助力があるということで私たちはいつも以上の力を出す事が出来るのです。悪魔を使えるあなたたちは私たちの救世主なのです」

「ふふ、そんな大層なものじゃないわよ」

ねえさんは笑った。

それこそ万人をひきつける微笑みで。

「でも、私たちも全力を尽くすわ。あなたたちの期待に応えて見せる。それが私たちに課せられた使命よ」

## SECT・7 飛翔と奇襲

数日後到着したアリギエリ女爵と共にまだ避難の済んでいない市民と騎士団員や兵たちの前でレメゲトンの到着を宣言した。

シェフィールド公爵家の中庭を解放し、千人以上もの市民を集めてのお披露目だった。

目の前で戦が繰り広げられ、人々は怯えている。それを沈めるためにも表に出ておく必要があった。

二階のバルコニーから千人もの人を見下ろすと、本当にこの人数を守りきれるのが不安になっていた。

ここ数日セフィロト軍は何の動きもない。  
明らかにおかしかった。

それでも敵軍の様子を見ながら市民を少しずつ脱出させていく  
残されていく人々は不安に包まれていた。

レメゲトンの正装に身を包んだねえさんは市民たちを落ち着ける  
ため、比較的人間に友好的なクローセルを呼び出した。

「おお、クローセル様だ！」

「何という偉大なお姿……！」

地に伏し祈りを捧げる人々を、シェフィールド公爵家のバルコニーから見下ろし、クローセルはやれやれと首を振った。

「俺は見世物じゃないっつーの」

「ごめんなさいね、クローセル。あなたにしか頼めない事なのよ」

「まあ ミーナねえさんの頼みなら」

文句を言いつつも金髪碧眼の墮天使クローセルは、純白にほんの少し青空の色を溶かし込んだ色をした翼を一振りし、真つ青で一点の曇りもない夏の空に飛び立った。

バルコニーの下に集まった民衆からはどよめきが沸き起こる。

クローセルが大きな三叉戟を一振りすると、その先から太陽の光

を反射する水の粒が放たれた。

ダイヤモンド

輝光石の欠片を振りまいたようにきらきらと輝く雫は、光のヴェールとなって人民に降り注ぐ。

声も忘れ天を仰ぐ人々。

大昔からレメゲトン是这样やって人民の心を掴んできたのだろう。腰まであるストレートブロンドを風に靡かせたねえさんは人々を導く救世主のようだった。

その場にいるだけで人の視線を集める、絶対的な存在感を持った者　まさにそれはねえさんの事を指しているようだ。

「これで満足？　ミーナねえさん」

ふわりとバルコニーに戻ってきたクローセルに、ねえさんはねぎらいの言葉をかける。

「十分よ、ありがとうクローセル」

「ねえさん　もつと褒めて！」

調子に乗りそうなクローセルを一瞥し、ねえさんはすぱりと切り捨てた。

「もう帰っていいわよ」

「冷たい！　最近俺に冷たいよ　ねえさん！」

「嫌いからやめて。それでも疲れてるのよ、私」

これほどまでに対等に、というかそれ以上に悪魔と言い合うレメゲトンも史上少ないだろう。

クローセルは美しい顔を歪めて　元が完璧だから歪めても美しいのだが　まるで泣きそうな顔をした。

これほど正直に感情を表に出す悪魔も少ないだろう。

「だって俺　ねえさんの力になりたいのよ？　戦闘には出らんないけどさ」

クローセルの言葉にねえさんは軽く微笑んだ。

「仕方のないことでしょう。世界の理があなたを天使の前に存在させないのだから」

我俣を言う幼子を諭すような優しい声音だった。

クローセルは唇を尖らせた。

その表情には見覚えがあった。

「俺の知らないところで、ねえさんが危険な目に遭うのは耐えられないんだ」

とても聞き覚えのある台詞を呟いて、金髪碧眼の堕天使は俯いた。ざくり、と心臓が抉られる感覚が襲ってくる。

「……バカね。私が負けるわけないでしょう？」

微笑んだねえさんは、くそガキに見せる微笑みをクローセルに向けていた。

見た目だけなら文句なしに天使といえる容姿をしている彼の中身はどうやら未だ幼いようだ。ねえさんに懐いているのもくそガキがねえさんに向けるような感情を有しているからかもしれない。

「心配しないで。私は……」

その瞬間、クローセルの姿が空中から消え去った。

明らかに不自然な悪魔の消失。これが示す可能性はほぼ決定されているといっている。思わず剣の柄に手を掛けた。

どこだ？どこにいる？

天使の姿を探して周囲に気を張った。

しかしすぐに市民が集合した広場に、兵士が転がり込んでくる。

「セフィロト国の奇襲です！」

驚くほど広場に響き渡ったその声は、人民にパニックを呼び起こした。

広場を埋め尽くす悲鳴、慌てて広場を抜けようとする人々……騎士たちの指示を聞かない民主うのパニックはそのまま放っておけば深刻な事態を引き起こしていただろう。

それを留めたのはやはりレメゲトンの長であるねえさんだった。

「動かないで！」

凜とした声が響き渡った。

びたり、と千人を超す民衆の動きが止まる。

「避難は騎士団員が指示するわ。勝手に動けば敵の思う壺よ。指示に従って順番に避難しなさい」

有無を言わさぬ絶対的な口調は、確実に市民の心を捉えた。

ゆつくりと動き始めた民衆の群れから視線を外し、帝王の光を灯す黄金の輝きはまっすぐに上空を見上げる。

「来たわよ、アレイ。ぜったいに人々に被害を出しちゃ駄目」

真つ青な空に浮かぶ純白の翼。

マルコシアスと同じそれは天界に住まう者の証だ。

「空から奇襲とは考えたわね。でも、私たちがいるからにはそんな事させないわ」

その横顔は何が来ても揺るがない精神に裏打ちされた強い意思に満ちていた。

人々と正面から攻めてきたセフィロト軍はフォルス騎士団長に任せるとして、空から飛来したセフィラを相手にしなくてはいけない。ねえさんはマントをはずすと天に高く手を掲げた。

「デカラビア！」

第69番目、飛翔の悪魔デカラビアは全ての鳥を操る能力と飛行能力を与える。

バルコニーに漆黒の翼が広がった。

背中の大きく開いた黒いドレスから漆黒の羽根が伸びている姿は悪魔の化身のようだった。

「あなたも行くのよ、アレイ」

ねえさんの手が背に触れた。

背がむず痒くなり、漆黒の羽根が視界を横切った。

「最初は少し難しいかもしれないけれど、あなたならすぐに慣れるわ」

自分の背に漆黒の翼を確認する。

なんだか妙な気分だ。

だが、今にも空へ飛び立てそうな気がする。

まるで最初から飛び方を知っているかのように気分が高揚した。  
マルコシアスともハルファスとも違う加護が自分を包んでいた。

「さあ、行きましょう」

負けないための戦いに。

守るための戦いに。

空に浮かぶ純白の翼を目指して、漆黒の翼を一振りした。

地面に足がつかないのはひどく不安定な状況だった。

純白の翼を背に湛えた天使　セフィラの姿を目指して青空の中  
を真直ぐに飛翔した。

「ふふ、さすがねアレイ。私は飛べるようになるまでずいぶんかか  
ったのよ？」

「……それを突然実戦で使わせるなど、何を考えているんだ」  
ため息をつく、隣を飛ぶねえさんはくすくすと笑った。

「あなたならできると思っていたからよ」

「まったく」

あきれると同時に信じられていた事が嬉しかった。

「セフィラも2人いるみたいね。1人頼むわよ？」

「分かっている」

見上げた先には、同じく天使の加護を受けているのだろう、背に  
翼を湛え神官服に身を包んだセフィラが2人中に浮いていた。

## SECT・7 飛翔と奇襲（後書き）

何となく思い立って「LOST COIN」シリーズの読者合計を計算してみたところ、ちょうど4万人を達成したところでした。ありがとうございます。この場を借りてお礼申し上げます。

唐突に思い立って書き始めてから3ヶ月強、勢いだけでここまでできましたが多くの人に読んでいただけてとても嬉しく思っています。

現在「PAST DESIRE -tail-」が第1幕6章です。第1幕は8章で完結予定です。その後閑話をはさんで第2幕を書きたいと思っています。

どうにも進まない主人公二人ですが、もう少しの間お付き合いください。

07 10 19 早村友裕

## SECT・8 陽動

美しい天使に愛されるにはやはり造形が美しくないといけないのだろうか。

銀髪のティファレト、人形ネツ阿克、手品師ゲブラ……いずれも整った顔立ちと均整の取れた肢体をしていた。

初めて見る目の前のセフィラもまた美しい容姿をしていた。

一見すると優男と思える柔和な顔立ちのセフィラは、器用にも空中で礼儀正しく挨拶した。

「こんにちは、レメゲトン。長のメフィア・ファウスト女伯爵と悪魔の末裔アレクスター・クロウリー伯爵？」

「よくご存知ね」

そのセフィラの灰色の瞳を睨み返した。

「ならついでだからあなたたちのことも教えてくだらないかしら？」

「おおっと、これは気の強い美女だ。なかなか好みだねえ」

優男は色素の淡い茶の髪を揺らして笑った。

ねえさんは不機嫌を隠す気がないらしい。無然とした表情でその優男を睨んでいる。

「申し遅れました。セフィロト国のセフィラ第2番目、コクマです。以後お見知りおきを」

「残念ながらもう二度と会いたくないわ。私、あなたみたいに浮ついた人が一番嫌いなものよ」

「これは手厳しい」

印象と物腰だけは柔和なコクマはひよい、と肩をすくめた。

「じゃ、そちらの彼女は？」

「この子は第3番目ビナー。残念ながら誰も声を聞いた事がなくてねえ、言葉を忘れてしまったんじゃないかな」

グリフィスの末裔とそう変わらない年に見える少女は表情もなく



ただ空に浮いていた。白い神官服のサイズが合っていないのかこの少女が標準より小さいだけなのか、服に埋もれている。長い袖からほんの少し指先がのぞいていた。

青空と同じ色の瞳はぼんやりと宙を見つめている。

「この子はなりたてだからねえ。きつともうすぐ言葉を思い出すよ」  
コクマの言葉ではつとした。

セフィラは職に就くとき全ての記憶を消す　　ネツアクがそう言っていた。

「なりたてを戦場に送り込むなんてセフィロトは人手不足なのかしら？」

「いやいやそんな事はないよ。うちは王の発言が絶対だから」  
なりたてだという少女が戦場に引つ張り出されたのはネブカドネツアル王の指示らしい。

先日は、ねえさんだけに飽きたらずレメゲトンをさらに捕まえて来いと無茶な指示をしたり、虚言を使って戦争を起こしたり……どうもネブカドネツアル王はあまりよく出来た統率者ではないらしい。  
「そんな人が上司だなんて、あなたも苦労するわね」

「本当にそう思う？」

優男はふわり、と純白の翼を広げた。

十分な距離をとりつつ相手の動きに対処できるよう身構える。

「セフィロト国にはケテル様とマルクト様がいる。あのお二方がいらっしゃる限りセフィロトは栄光の中を進む」

マシヤン  
手品師ゲブラといい人形少女ネツアクといいこの優男のコクマといい、どうもセフィラにはおしゃべりが多いらしい。

例外は銀髪のティファレトくらいか。とはいえあいつも感情のコントロールがうまくいっていないように見える。

天使を司るセフィラがこんな調子で、本当に大丈夫なのだろうか？  
と思っただが、よく考えればこちらにも脳と口が直結しているガキのレメゲトンがいた事を思い出して小さくため息をついた。

そうだ、あいつも3年以上前の記憶はない。人格がリセットされ

たという点ではセフィラと同じ立場だ。

思わぬ共通点を見つけた。自分もねえさんもあのくそガキの相手にはかなり慣れている。もしかするとうまくコクマを操作して情報を聞き出せるかもしれない。

ねえさんにそれを伝えようとする、どうやらねえさんも既に考えていたらしく、軽くウインクして見せた。

「それじゃあ、今回の軍の指揮も王が執っているわけじゃないのね」「無論だよ。総指揮官はマルクト様さ。あのお方はすごい！ ケテル様の右腕として最高の英知を手にしていらっしゃる」

「第10番目マルクトが参謀って訳ね。ティファレトはどうしているのかしら？」

「ああ、あいつらは謹慎中。ケテル様の命に背くからあんな事になるんだ」

楽しそうに笑うコクマは、銀髪のティファレトと仲が悪いのだろうか。

思ったとおり、このおしゃべりなセフィラは簡単に答えられる質問には即答する。それによって生じる利害は考えていないようだ。

複雑な質問でなく、一言で答えられる質問を出来る限り自然に並べていけばかなりの情報を得られそうだ。

「今日の作戦もマルクトが立てたの？」

「そう、任務はあなたたちレメゲトンの足止め」

「あら奇遇ね」

ねえさんが物騒な笑みを湛えた。

「私たちも同じなのよ」

「うわあ、残念。でも綺麗な女の人には手を出さないって決めてるんだけどなあ」

大げさなりアクションで嘆いたコクマは、すっと顔を隠すように手を当てた。

「仕方ない」

一瞬で雰囲気豹変した。

放たれた殺気に反射的に抜刀してしまう。

「ビナー、クロウリー伯爵のほうを頼むよ」

先ほどと打って変わって冷徹な声に変化したコクマは白い神官服を脱ぎ捨てた。

柔和な顔立ちに似合わぬ鍛え抜かれた肉体が姿を現す。

ねえさんはそれを見て肩をすくめた。

「優男かと思ったら案外鍛えてるのね、少しだけ見直したわ」  
それを聞いたコクマはにやりと笑った。

神官服に埋もれそうな少女が自分の前に降りてくる。

少女が両手を大きく広げると、背に生えた純白の翼がゆらりと揺れた。同時に、背後の空間から起き上がるようにして理解の天使ザフィケルが出現する。

ゆるやかに波打つ栗色の髪、慈愛に満ちたその表情は至高の母の名に相應しい。

眠そうに半分瞼を閉じた少女は、声も出さず表情も変えずに右手のひらを前に向けた。

何が来ても対応できるようにと剣を正眼に構えたとき、ねえさんの鋭い声が響いた。

「アレイ、こっちはいいからすぐに軍のほうへ向かいなさい！」

「なぜだ、1対1の方がやりやすいはずだ」

敵から目を離さずに聞くと、ねえさんはもどかしそうに叫んだ。

「何のための足止めだと思うのよ、敵にレメゲトンの人数は知れているのよ？ こっちで二人を足止めして他のセフィラが正面から攻めてくるに決まっているでしょう！」

しまった、そうか！

「ありゃ、ばれちゃった」

コクマが肩をすくめる。

どうやら本当らしい。

すぐに向かわねば！

慣れない空中で方向を変え、都市の入り口へ進路を向ける。

「待て！」

コクマの声がしてビナーが思わぬ素早さで目の前に立ち塞がった。が、次の瞬間少女は何かに殴られたように急降下した。

重力を操るバシンの仕業だ　デカラビアとの悪魔同時召還。

悪魔がよほど天文学者に服従していないとできない芸当だった。そうでなくては悪魔同士で争いを始めたり機嫌を損ねて魔界へ帰ったりしてしまう。

「早く行きなさい！」

ねえさんの叱咤を受けてくると方向を変え、納刀する。そして遠目にも矢が飛び交っているのが分かる正面ゲートを見据えた。

背後では激しい戦闘がすでに始まっている。

ねえさんなら大丈夫。

振り向かず、できる限りの速度で都市正面のゲートへ向かった。

城壁の上から矢が乱れ飛んでいる。向かう先はトロメオの正面に集結したセフィロト軍だ。

敵から打ち返された矢を避けながら城壁の上に着地した。

同時に背から漆黒の翼が消失する。

「ウォル先輩?!」

戦線で指揮を取っていたらしいフェルメイが驚いた声を出した。

「すごいですね、さすがレメゲトンです。まさか空から来るとは思いませんでした」

「何をのんきな事を言っている」

思わずため息が出そうだった。

「いや、でも今ので敵がひるんだのも確かですし、こちらの士気上がるのも確かです」

「……それならいい」

のぞき穴から敵陣営を確認する。

どこに隠れていたのか数は約3000、その最前列に見慣れた影がある。

ねえさんの読みは当たりだ。

「セフィラの相手は俺がする。兵団の方は頼んだぞ」

「はい、任せてください！」

フェルメイはぴつと敬礼し、去っていった。  
さて。

レメゲトンが姿を見せれば見せるだけ士気が上がると言うのは本当らしい。

それならばせいぜい派手にやらせてもらおう。

## SECT・9 カマエル

矢が乱れ飛ぶ中、門の上に立った。

風で腰まであるストレートの黒髪が靡いた。

数百メートル先にセフィロト軍が陣形を組んで待機しているのが分かる。今動いているのは弓部隊だけだが、しばらくすれば全軍が進行してくるだろう。

広場の市民は退避し終わっただろうか。

空中でセフィラと戦闘を続けるねえさんは……

すべての雑念を打ち払うように叫んだ。

「ハルフアス！」

加護が全身にいきわたる。

「ひやはは！ 人間だ！ 人間だ！ あれ全部殺っていいか？」

ハルフアスの声が頭の中に響く。

「駄目だ。殺してはいけない。気絶させるだけだ」

「難しいな！ でもやる！ 俺やる！」

「……感謝する」

加護を受けた体で門の上から飛び降りた。

都市をぐるりと取り巻く堀を軽く凌駕して、舗装されていない道にざっと着地した。もう一度数百メートル先にいる敵軍を睨み、狙いの人物を発見する。

これだけ目立つ行動をしているのだ、敵軍の先頭に立つあのセフィラも自分に気づいているはずなのだ。

それでも出てこないのなら、派手に立ち回っておびき寄せるしかない。

左手で剣を構えて切っ先を真直ぐ敵軍に突きつけた。

「攻撃を止めるなよ、フェルメイ！」

後ろの壁に向かって叫ぶと、予想外に声が響いてしまった。いったん敵からの攻撃が止み、注意が完全に自分に向いた事を感じる。

これでおとりとして動く事が出来る。

次の瞬間には凄まじい数の矢が降ってきた。

「ハルファス、お前は剣以外の力も使えるな？」

「ひひひ！ よく知ってるな！」

「助けてくれるか？」

「ひやは！ いいぞ！」

自分の頭上に幼い子供の影が浮かび上がった　ハルファスだ。

上半身だけ姿を現した戦の悪魔ハルファスはその短い腕を頭上に掲げた。

矢はすぐそこまで迫っている。

「吹き飛ばし！」

甲高い声と共に突風が吹き荒れた。

突風と言っても半端な風ではない。

半径数十メートルにわたって吹き荒れる豪風に、飛んできた矢はすべてはじかれ、折られ、粉々に宙を舞った。凄まじいまでの気圧に耐え切れず地面は抉り取られ、わずかに生えていた草も根こそぎ吹き飛ばされてしまった。

「きやはははは！　飛んだ飛んだ！」

「……！」

予想以上の威力だ。

これはうまく使わないと敵味方構わず破壊してしまうと言う事態を招きかねない。

まるでクレーターのようになくなってしまった場所の中心に佇み、改めてハルファスを支配下に置けたことを深くリュシフェルに感謝した。

とても人が起こすとは思えない大災害を前に、両軍とも沈黙していた。

数千人の視線がすべて自分に向けられている。

3000もの敵国軍隊を前に一步も退かず、人知を超えた悪魔の能力で全てを打ち払った。

闇を思わせる黒髪に悪魔の末裔印である紫水晶の瞳、悪魔紋章を刺繍した正装と黒のマント、左手には第49番目の悪魔サブノックが鍛えた長剣。それは古来崇拜されてきたレメゲトンの姿そのものだ。今回ばかりは自分の容姿に感謝しよう。おそらくグリモワール軍にとっては最高の、セフィロト軍にとっては最低のパフォーマンスになったに違いない。

目立つ行動は好きではないが、四の五の言っている場合ではないのだ。

戦いは人が起こすもの。  
だとすれば、争いを動かすには人の心を動かすのが最も効率がいい。

とても何千人もの人間がここにいるとは思えないような静寂がトロメオを包んでいた。

ところが、その静寂を破る音がある。

「仕方ありませんね」

久しぶりに聞く声。

静まり返った戦場に似合わぬ、燕尾服の男が自分の目の前に現れた。

相変わらず神出鬼没だ。先ほどまでセフィロト軍の先頭にいたくせに一瞬で距離をつめてきた。以前から不審に思っていたのだが、どうもこいつは天使の加護なしに瞬間移動でもできるらしい。

「久しぶりだな、手品師<sup>マジシャン</sup>」

「ふふ、まだ名乗っていませんでしたか？ 私はセフィラ第5番目ゲブラ、峻厳の天使カマエルを召還します。お久しぶりです、クロウリー伯爵。やっぱり戦場で会えましたね。私が言ったとおりだったでしょう？」

「……相変わらずよく喋る」

マジシャン  
吐き捨てるように言ったが、手品師はまるで意に介さない様子だ



った。

「ちゃんと足止めに2人向かわせたんですけれどね。実を出し切ったファウスト女伯爵の力は思った以上です」

「はつきり言つてねえさんの実力は俺の数段上だ。並みのセフィラ2人程度では止められん」

「やはり、殺しておくべきでしたか？」

「……口には気をつける」

怒りの炎がかすかに胸の端を焦がす。

驚きでいったん攻撃が止んでいた兵团もまた矢の嵐を降らせ始めた。

同時に地響きと共にセフィロト軍が侵攻してくる。

「おやおや、このままでは進軍に巻き込まれてしまいますね」

「お前の軍だろう」

「いえ、マルクト様の軍ですよ」

マルクト様、などとはいけしゃあしゃあとよく言ったものだ。セフィロト国に忠誠など誓っていないくせに。

背後に迫った軍に怯えることなく、シルクハットのセフィラは声高に天使の名を呼んだ。

「カマエル！」

ぶわ、と熱風が吹きつけた。

まるであのくそガキがフラウロスを召還したときのようだ。

見ると手品師<sup>マジシャン</sup>の背後には真紅の甲冑を身につけ巨大な槍を手にした戦士が控えていた。熱風の元はその戦士　カマエルのようだ。

「カマエルだ！　はは！　面白くなってきた！」

自分の頭上に浮かぶハルファスが嬉しそうに笑う。

ゲブラは何もない空間からステッキを取り出した。まるで本物の手品師<sup>マジシャン</sup>だ。

こいつには他のセフィラにはない恐ろしさがある。その正体がかは分らなかったが、油断するわけにはいかない。

真直ぐに見据えて剣を構えた。

ゲブラは剣でなくステッキを構えている。背後に浮かぶ真紅の甲冑がとてつもないオーラを放出していた。

くそガキはこの天使がフラウロスの片割れだ、と言っていた。

この圧力がフラウロスと同等のものだとしたら、あのグリフィス家の末裔はとんでもない化け物を使役していることになる。

「ひやははは！ カマエル！ 倒す！」

キンキンと響く声が近づく馬蹄の音を裂く。

地響きと鬨の音が集中力を削ぐ。

「五月蠅い悪魔ですね、私とクロウリー伯爵の会話を邪魔しないで欲しいものです」

そういつて唇の端をあげる手品師に、鬨気とは別の何かを感じて背筋がぞわりとした。ついでに顔が引きつる。

ねえさんと変わってもらえばよかった。心の底からそう思ったが、今さら後悔しても遅い。

3000の兵が迫るトロメオの眼前で、一步も退かぬ決意でゲブラと対峙した。

ゲブラのステッキは炎を纏っている。

そう言えばくそガキはこいつと対戦した事がある。どんな能力を持つのか事前に聞いておくべきだった。

己のうかつさに舌打ちし、とんとん、と軽くステップを踏んだ。マルコシアスの加護のようなシンクロ率はない。体中にみなぎる力も違った感触だった。だが、驚くべきはこの身の軽さだった。

軽く跳んだだけでトロメオを囲む堀を飛び越えられるほどの脚力。つい先日ネツアクと戦闘した時もその速度に振り回されそうになったことを思い出した。

「身体能力にまだ慣れていないようですね」

ゲブラは楽しそうに笑う。

ほんの数度跳んだのを見て見抜くなど、本当に侮れない奴だ。

そう思っただけで睨むとゲブラはにこりと笑った。

「警戒しないでください」

「戦場で敵に会って、警戒しないなどと言う事は有り得ないぞ？」

一体何を言っているのか。

思わず眉を寄せた。

「ふふ、そうですね。でも、勘違いしてはいけませんよ、クロウリ伯爵。あなたの敵は私個人ではないのですよ」

馬の蹄が地面を叩くことで起こされた地響きがすぐそこまで迫っている。

特攻部隊がゲブラの真後ろまで来ていた。

「あなたの敵は、この、セフィロト国なのです」  
ゲブラの姿がふっと消えた。

「?!」

消えた?!

なぜこのタイミングで……

が、考えている暇はなかった。  
目の前に3000の軍が迫っていた。

「ひやはは！ カマエル消えた！ 人間だ！ 人間だ！ たくさん来るぞ！」

興奮するハルファスの声を無視して舌打ちした。

あの手品師はレメゲトン<sup>マジシャン</sup>をただ一人軍の前に取り残すため、ここにひきつけていたのだ。あいつが瞬間移動できることを忘れてしまっていた。

あまりの自分のうかつさにもう一度舌打ちする。

とにかくここを離れなくては何百頭もの馬につぶされてしまうだろう。

ねえさんにばれたら「何をやってるの！」と叱られる事必須である。常に先を読みなさい、と再三言われているのだが、いまだにそれが出来ず困った状況に陥る事が多い。

要するにねえさんとの実力差の理由はその辺にあるのだろう。

これはロストコインを探していた時代、さらには炎妖玉騎士団<sup>ガーネット</sup>に所属していた時代から変わらず自分の弱点であり続けているのだった。

「きやは！ 殺っていいか？ 殺っていいか？」

「できるだけ我慢しろ！」

ハルファスに向かってそう叫んで、とにかくこの場を避けるために思い切り上空に跳び上がった。

目前に迫った馬上の人物の顔が特定できるほどの距離まで来ていた。

が、耳元を風が切って一瞬で景色が豹変した。

「……え？」

振り向くと東の都トロメオ全体が見渡せた。足元を豆粒のような騎兵隊が駆け抜けていく。青空が隣にいた。

予想していなかった事態に混乱する。

ハルフアスの加護がどれほどの威力を持つのかまだ理解できていなかったようだ。

思いがけず高度まで跳び上がってしまった。

「さて、どうしようか」

体が降下し始めてから考える。

危機になってからようやく考え始める癖は改めた方がいいかもしれない。これまではすべて何とかなったが、きつといつか身を滅ぼすときが来るだろう。

困っているとハルフアスの甲高い声が頭に響いた。

「ひひ！ 任せる！」

楽しそうなハルフアスは、羽根に覆われた両腕を大きく広げた。ごう、と耳元の風が渦を巻いた。

次の瞬間にはまたも信じられない光景が眼前に広がった。

豪風が騎兵隊を翻弄している。

兵士の乗った馬が楽々と空に浮き、騎手を引き剥がした。剣士の手から外れた剣が乱れ飛び、その刃は馬も人も構わず傷つけていく。百人以上の騎兵が突如吹き荒れた豪風によって空に舞い上げられた。

すべてが上空に巻き上げられた状態で、自分はふわりと地面に着地した。

「ひひ！」

ハルフアスの笑い。

次の瞬間すべてが空から降ってきた。

何かがつぶれる音、砕ける音、叩く音　　大気全体が、震えた。

「……！」

一瞬にして周囲は惨状と化した。

十メートル以上もの高さまで巻き上げられ、落下した騎兵隊はほ

ば殲滅状態だ。

生きている者が残っているかも定かではない。ぴくりともしない人間と馬の群れを前に体が動かなかった。

遅れて頭上から振ってきた誰かの長剣をハルファスがかまいたたちのようなもので弾き飛ばした。

からんからん、と軽い音を立てて剣は地面に転がった。

うつ伏せに倒れた兵士の下にじわじわと赤いしみが広がっていく。すでに血溜まりの中に仰向けた兵士もいる。風で飛んだ剣が胸を貫いている人もあった。

再び戦場に沈黙が訪れた。

先陣騎兵隊の100人以上が瞬く間に壊滅したことで、後続部隊は足を止めている。

それどころか後方では逃げ出し始めたセフィロト兵もいるようだ。

「ひひひ！　ちよつと失敗か？」

ハルファスの声がかんがんと響く。

それではつとした。

今がチャンスだ。

「退け！　セフィロト軍！　退けばこれ以上は追わぬ！」

腹の底から搾り出すように叫んだ。

心臓が凄まじい速さで脈打っている。まるで頭の中からがんがんと叩かれているようだ。

兵の列が一步、また一步と退いていく。

それを見てほつとした自分がいた。

倒れた兵士に見向きもせず、散り散りに退いていくセフィロト軍

あまりにあっさりとしていて拍子抜けした。

ハルファスを魔界に返すと、ふと一息ついてあたりを見渡した。

最悪の光景が広がっていた。

抉られた地面に泡を吹く馬が転がっている。びくりと痙攣するそ

の足元には全く動かない兵士が転がっている。その地面は真っ赤に染まっていた。

自分をぐるりと囲んだ半径数十メートル以内はずっとそんな光景が広がっていた。

掘り起こされた土の香りと風につてきた血の匂いに思わずくもりとして頭を押さえた。

恐怖に目を見開いて事切れた、足元に転がる兵士と目が合う。

「……っ！」

悲鳴も出ない衝撃が全身を駆け抜けた。

全身が震えだす。

人を殺したのは初めてではない。語るべき事でもないが、触れ回る事でもない。その記憶は今でも重いの特筆すべき傷ではなかった。

戦争に来る時点で命のやり取りは覚悟してきたはずだった。

それでも、レメゲトンになる時一つだけ心のどこかで決めていた事があった。

「この力だけは使いたくなかった……」

悪魔の力を使って人の命を奪うことだけはしたくない。たとえ自分の剣でやむを得ず戦闘する事はあっても、人外の力をぶつける事だけは。

人間の持ちえないこの強大な力でもって抵抗する事もできない人間を殺す事だけは

泣く事を忘れた眼から涙が溢れる事はない。

それでも、その時自分は泣いていた。声も上げず涙も流さず泣いていた。

## SECT・11 先二待ツ答エ

砦の門が開いて誰かがこちらへ馬を駆ってくる。

ぼんやりと振り向くと、馬上から見慣れぬ青年が降ってきた。

「ウォル先輩っ！」

「ルーパス……か？」

理屈と関係なく滑り出た懐かしい名とともに疑問がこぼれた。

「そうですよ！ 忘れちゃったなんて言いませんよね？！」

くつきりとした獺犬のような目を持つ少年は、ガーネット炎妖玉騎士団の一員だ。

自分がまだ部隊長をしていた頃に新入りとして入ってきて、やたらと自分に懐いていた当時15歳の少年……だった。

今は見る影もない。顔つきは完全に大人のものとなり、身長は伸びてほとんど見下ろさなくてもいいくらいだ。何より声のトーンが落ち着いたものになっていた。

きゅつと眉間に皺が寄る。

「ひどいですよ！ オレを置いてレメゲトンになっちゃうなんて！  
そういえば以前フォルス団長が言っていた気がする。

ルーパスなんぞ後を追わん勢이었다ぞ！などと。

人懐こい獺犬は尻尾があつたら盛大に振っていただろう、大きな目をいっばいに開いた。

「すっげー会いたかった！」

間髪いれず抱きついたルーパスのぴんぴんはねた茶髪が顔の横にくすぐった。

多少の耐性を持つらしいルーパスは昔からよく自分にくっついていた。当時は腰の辺りに抱きついていたのに、今では首に手を回せる身長になっている。力も当時の比ではない。

昔なら仕方なくくっつけたまま歩いていたのだが、もう15の少年ではないのだ。さすがに絵的にまずいし、引きずって歩くには大



きすぎる。

両手を肩について体を離すと、ルーパーは悲しそうな顔をした。

「とにかく離れてくれ」

「冷たいですよ、先輩。久しぶりの再会なのに！」

マジシャン手品師を目の前にしたときに似た危機感が胸中をよぎる。

思わず一步退くと、転がっていた兵士に足が当たった。

びくりと体を硬直させると、ルーパーはぼんと手を打った。

「そうだ！ 倒れている人の中から生きている人だけでもすぐに手当しないと！ ってフォルス団長が。」

「先にそう言え！」

思わず叫んでしまった。

するとルーパーはめをぱちくりとさせた。

「珍しいですね、ウォル先輩が声を荒げるなんて！」

しまった、くそガキに怒鳴る時のように思わず……

思わず頬が引きつる。

自分は思った以上にあのくそガキに影響されているらしい。

続いて出てきた騎士団員たちが散らばった人と馬の群れを掻き分けていく。

むせ返るような血の匂いが辺りに立ち込めた。

ほとんどの兵は即死だった。遺体を並べ、地面の血をぬぐい、まだ息のある者は城内に運び込んでいった。

手伝おうと思ったのだが、ねえさんが呼んでいるという伝令を受けてすぐに皆へと向かうことにした。

ドアをノックすると入っていいわよ、とねえさんの声がした。

部屋に入るとねえさんはすでに正装からラフなワンピースへと着替えていた。

「ねえさんの方も大丈夫だったのか？」

「ええ、ビナーには少し手間取ったけれど、コクマはたいした事ないわ。見かけ倒しよ。2人とも軍と同時にあっさり退いていったわ。たいした事ない、ときられた彼も敵国では崇拜されるセフィラの一員なのだが。」

「あなたの方こそ大変だったんでしょ。ハルファスの力を解放したの？　ずいぶんと派手に立ち回ったようだけれど」

「ああ」

予想以上のハルファスの力に振り回されてしまったが。

「グリモワール側はすごい騒ぎだったわよ？　悪魔の光臨、ゲートイア、グリフィスの再来……もう普通に人前を歩く事はできないでしょうね」

いくらか予想はしていた事だ。

それでも表情が曇ったのは仕方のないことだろう。

「私もちよつと見とれちゃったわよ、アレイスター、クロウリー伯爵？」

「戦闘中だったはずだが……余裕だな、メフィア、ファウスト女伯爵」

ねえさんがくすりと笑い、つられて微笑んだ。

「双方に最小限の被害で退けたのは功績よ。とくに自軍の被害はほぼゼロ。あなたはレメゲトンとして誇っていいわ」

その言葉で先ほど目の前に広がった光景が返ってきた。

抉り取られた地面に累々と横たわる死体

「きつとまたクロウリー家の新しい歴史として刻まれるでしょうね」

「あんな……一瞬の出来事だろう。味気ない話だ」

「一瞬だからこそ、よ。かの『暗黒の33日間』がなぜ今も語り継がれていると思うの？　レティシア、クロウリーがほんの3日で王都を奪還したからよ。それこそ一瞬で、たった一人で1000人単位のセフィロト軍を追い払ったあなたは確実に名を残すでしょうね」

「よしてくれ」

英雄になりたいわけじゃない。名を残したいわけじゃない。

「悪魔の力を兵にぶつけるつもりはなかったんだ。ただ、ハルファスを制止出来なかった」

重い感情が心を支配していく。

綺麗ごとを言いたくはなかったけれど、ねえさんを前に弱音がこぼれた。

「人間に持ちえない力で軍勢を蹴散らすなど……」

「甘い事は言わないで、アレイ」

はっと見るとねえさんの瞳には黄金のきらめきが映っていた。

「あなたが守りたい物はいったい何？ それを一つに決める、とあの子に言ったのは他でもないあなたよ」

息を呑むほど絶対的なオーラを纏ったレメゲトンの長は厳しい声で言った。

自分の心の中をすべて見透かしているかのように自分を諭した。

「確かにセフィロト国にもグリモワール王国と同じように歴史がある。人々が住んでいる。一人一人に歴史があつて、家族がいる。あなたが躊躇するのも分かるわ。悪魔の力をそんな人々にぶつけないと言う気持ちも理解しているつもりよ。でも、それはグリモワール王国も同じこと。すでにカーバンクル周辺に住んでいた人達に死傷者は出ているし、トロメオの人は家を失っているのよ。それこそ亡くなった騎士団員の数は……」

ねえさんはそこで口を噤んだ。

しかし彼女はすぐに続けた。

「私達には世界を変える力なんてないわ。それこそ人ではない力で戦争をやめさせられるのだったらとつくにそうしてる。でも、そんな事現実にはありえない。だから……選びなさい」

きっぱりとねえさんは言った。

迷いなき瞳だった。

「与えられた世界で生きていくには理由はどうあれ選択しなくちゃいけないのよ。自分が生まれたから。好きだから。そんな自分勝手な理由で誰もが大切なものを選ぶのよ。もしあなたがあの子のいる

王都を、グリモワール王国を選んだとしたらもう迷わないで頂戴。  
国の要であるあなたが揺らいだら国全体が揺らいでしまうわ」

「ねえさん……」

「気をしっかり持って、アレイ。とても辛いのは分かっているわ。  
でもお願い、あなたはこの国に必要なの。私の前でいくら弱音を吐  
いてくれてもいいわ。私をどれだけ貶してくれても構わない。それ  
でも、あなたにしか出来ない事があるのを忘れないで」

どこか悲痛な叫びに、声を失った。

「ごめんなさい、アレイ。私一人じゃどうする事もできないの。3  
年前も、今も」

細い指が頬に触れた。

涙は見えなかったが、きつとねえさんは泣いていた。

自分と同じようにねえさんも涙を忘れてしまったのかもしれない。

「どうして私の大切な人はみんなこんな力を持ってしまうのかしら」

自分はどうする事もできずにその場に佇んでいた。

きつとみな表に出せぬ痛みを抱えているのだろう。

自分がいくつもの傷を刻んできたように、それぞれがそれぞれの  
過去をどこかに残しているのだ。それはいつも迷いなく強く揺ぎ無  
いねえさんも例外ではない。

何度も迷って、何度も傷ついて、何度も何度も挫けながらそれで  
も前に進んでいく。

いつかその先に答えが見つかることを信じて。

## SECT・12 未来へノ決意

それから数日、またセフィロトの動きが途絶えた。

カーバンクルに放たれた密偵は特に何の動きもないことを伝えていたが、油断は出来なかった。奇襲はセフィロト国の常套手段だ。いつ何時また兵が攻めてくるか知れない。

その合間を利用して空を飛ぶ訓練をすることにした。

ねえさんが召還する第69番目飛翔の悪魔デカラビアは飛行能力を与える。

背に翼を湛えるセフィラを相手にするに当たってこの能力はかなり有効だと言えた。それなりに使えるようになっておくべきだろう。ねえさんに頼み、シェフィールド公爵家の中庭で練習を始めた。

「普段悪魔を使役するのと同じくそう変わらないわ。身体能力的に問題はないから、必要なのは意思の力だけよ」

ふわりと背に生えた翼を一振りして、空に飛び上がる。

地に足が着かない感覚はやはり慣れる事が出来ない。

「地面がないというのは不安定だな」

剣を振るうとき地面を蹴る足はかなり重要だ。それが無いというのは不安を掻き立てる要素だった。

これでまともに戦えるようになるのだろうか。

「風を使うハルファスも召還者に飛翔能力を与える事が出来るのじゃないかしら。一度聞いてみるといいわ」

ハルファス。翼。轟音。

豪風

あの時の光景が舞い戻ってきてどきりとした。

「フォルス団長には私から言っておくから、偵察も兼ねてあちこち飛んできなさい。そうすればかなり慣れると思うわ」

ねえさんはひらひら、と手を振った。

「デカラビアの加護は大丈夫よ。私の持つコインの中では最も友好的な悪魔だから安心して」

本当にねえさんは何もかも型破りだと思う。

召還者以外に加護を与えるのは並大抵の事ではない。先日、悪魔同時召還も誰にでもできる芸当ではない。それこそ悪魔との親和性が並でないのだ。

この節目の時代にレメゲトンの長を務めていく重圧は計り知れない。

それを受け止め、国を導いていく彼女こそ伝説に相応しい。自分なんかよりずっと……

漆黒の翼を広げて青空に飛び立った。

草の匂いが体の隅々まで入り込んでくる。夏の空は抜けるように青い。こんな月並みな表現しか出来ない自分が嫌になるくらいに絶対的な青が塗りたくられていた。

吸い込まれそうになって仰け反った。

そのまま水にぶかりと浮かぶように漂った。

「ああ……」

思わず漏れた声が蒼に蕩けていった。

すべてが遠ざかっていく。

戦の音、自分の無力さ、過去に受けた傷も、今疼く傷も。

何もない空間に自分がポツリと浮いている。

孤独はない。だからと言って満たされたわけでもない。

ただ凪のように静かな気配が包み込んで、波音一つ立たぬ心の水

面を撫でていった。

「会いたい」

不意に思い出すのはあの少女の笑顔。

瞼の裏に焼きついた面影を、もう一度目の前の青空に描きなおす。

「……会いたい」

負の感情が凪いだ時、残るのはあの少女への想い一つだ。

今まで生きてきてこれほどまでに願った事があつただろうか。どの機能が麻痺しても、この想いだけは消えないだろう。

かろうじて正に向かう感情はたった一つの方向しか見ていない。穏やかで穏やかで、穏やか過ぎてうるさいくらい of 風の上で。ただ自分の中で『一つだけ』最も大切なものを確認していた。

自分の中ではつきりと決めた。

そうしたら道が見えた気がした。

未来へ続く道。

結局最後に導いてくれたのはやっぱりお前なんだ　ラック。

もう、迷わない。傷ついても立ち止まったりしない。躊躇ったりしない。もし世界を変える事が出来ないのなら、その流れの渦の中で最大限に努力する。絶対にお前を見失ったりしない。

誰よりも、お前の傍にいたいから。

「ずいぶんすっきりした顔をしてるわよ、クロウリー伯爵」

ねえさんの声が出迎えてくれた。彼女はきつと何もかもを分かっている自分を空に放ったんだろう。

いつだって心配をかけてばかりだ。

「ありがとう、ねえさん」

「いいえ。私は何もしてないわ」

こんな風に素直に感謝の意を述べられるようになったのもきつと

もう一度だけ漆黒の瞳を思い出して微笑んだ。

街に警鐘が鳴り響く。

市民の退去が完了し、兵が続々と全土から集まってきたトロメオは完全に城塞都市と化していた。

「来たわね」

凜としたねえさんの横顔は決意に満ちていた。

「行くわよ、アレイ」

デカラビアを召還して背に漆黒の翼を湛えたねえさんがにこりと笑う。

自分も続いてハルファスの加護を受けた。

すると全身が軽くなる感覚と共に耳元に違和感が生じる。

「何度見ても可愛らしい姿よね」

「……言わないでくれ」

うめくように呟いた。

違和感の正体は頭の両側から広げられた羽根だ。小動物の耳のようにくつついたそれが飛翔能力の証だった。小さな子供がつけていれば愛らしいだろうが、自分がつけるのはかなり抵抗があった。

恥ずかしい事この上ない。

できればねえさんと代わってもらいたいのだがそういうわけにもいかない。

「今日は空から来てはいないみたいね。軍のほうへ向かいましょう」  
「わかった」

地面を蹴るだけで簡単に浮いてしまう体をうまく風に乗せて、白地に金の旗印が目立つセフィロト軍に向かって飛んだ。

「セフィラが見当たらないわね。兵にまぎれているのかしら？」

ねえさんが訝しげな声を出す。

既に乱れ飛ぶ矢がねえさんに当たらず地面に落下しているところから見ると、既にバシンも召還しているようだ。

自分の方もハルファスが放つかまいたちに任せて、トロメオの城壁に進むセフィロト軍を見下ろした。

兵士たちが黒々とした塊となって矢の中を突き進む。

まるで連続して変化する絵画を見ているようだ。

「こんな時にラックがいたらきつとすぐにセフィラを見つけてくれるでしょうに」

ねえさんは軽く息をついた。



「仕方ないから探すわよ」

探すわよ、と言っても敵は万単位の軍勢だ。

先日奇襲を仕掛けてきたほんの3000人の兵とは文字通り桁が違う。

「ねえさん、それは無茶だ。相手が何もしてこないのならこちらも手を出さない方が……」

何万もの兵に単身突っ込むのは現実的にありえない。いかに悪魔の力を使い、戦略を得意とするねえさんであつてもだ。

自分がハルファスの力を完全に解放したとしても一度に止められたのは100人程度だった。

ところがねえさんは当然の如く言い放つ。

「何言つてるの。私たちの方が人数的に不利なのよ。一人でも多くつぶさない」と

「つぶす、と言つてもセフィラはコインを持つわけじゃない。いったいどうやったら加護を解く事が出来るのか分からないだろう」

「それに関しては少しだけ心当たりがあるの」

ねえさんは魅力的に微笑んだ。

こうなつてしまつてはもう止める事などできない。

大きくため息をつく、ねえさんを追つてトロメオの外堀に張り付いたセフィロト軍に向かって急降下した。

降下し始めると、逆に地面から上ってくる人影があつた。

「あら、好都合」

コクマとビナーの2人だ。

「向こうから来てくれたわよ」

「……本当に良かった」

心の底から呟いた。

「今日はここに固まつてるみたいね。ほら、あそこにゲブラもいるわ」

ねえさんが指した先に手品師<sup>マジシャン</sup>が馬上でこちらを見ていた。

あいつは本当にやる気がない。

放っておいても大丈夫だろうか？

「他にいるかもしれないから気をつけて。とりあえずコクマなんて瞬殺してくれるかしら？」

「……了解」

上官の無茶な命令にため息で答えて、目の前に迫ったセフィラの一人と対峙した。

## SECT・13 快樂幻想（ユピテル・フラウス）

「ふふ、今日は一対一で早々につぶさせてもらっわよ」

物騒なことを言い放ったねえさんは手のひらを上に向けた。  
闇の色をした球体が出現する。

本気だ。

ねえさんは本気でこの二人をつぶしにかかっている。  
もう一度大きなため息をついた。

「素手の人間を相手にするのは得意じゃないんだが……」  
剣を抜いた。刃がついていないほうで優男の前に構えた。

「今日はクロウリー伯爵がお相手？ そちらのお姉さんはおっかないからねえ」

「それは否定しない」

「否定しなさい、アレイ」

「……」

思わず目を逸らした。

「ま、いいわ」

ねえさんは闇色の球を頭上に浮かべた。

そうしてもう一つ手のひらに球を作り出す。

「負けたら承知しないわよ、アレイ！」

「分かっている」

さらに数個闇の球を周囲に浮かべたねえさんは、にこりと微笑んだ。

それこそまるで悪魔の化身のように。

コクマに視線を戻すと、すでに背後に知恵の天使ラジエルを戴いていた。

彫りの深い顔立ちに全てを包み込む温かな目をしている。ビナーが使役するザフィケルが至高の母なら知恵の天使ラジエルは至高の

父とも呼ばれる。

慈愛に満ちた一对の天使はいつも寄り添うように在るという。  
知恵の天使ラジエルを加護に持ったコクマはへらりと笑う。

「この前は2人がかりでお姉さん1人に止められたけど、今日はそうじゃないよ」

「そうだな。以前のままではすぐにやられることくらいわかってい  
るはずだ」

さすがにそこまでバカではないはずだ。

もう一度2人だけで出てくる以上何か策があると考えるのが普通  
だった。

「でも、奥の手はとっておくもんだから。一度手合わせ願いますよ、  
クロウリー伯爵！」

コクマは神官服を脱ぎ去った。

確かに夏の日差しは暑いが、別に脱ぐ必要はないと思う。ただ単  
純に脱ぎたいだけなのだろうか。このセフィラの考える事はよく分  
からない。

いや、ネツアクもゲブラも何を考えているかなど全く分からない  
のだが。

どうやら自分とはことんセフィラと相容れないらしい。

素手相手に剣と言うのは少々はばかられたが、四の五の言ってい  
る場合ではない。

コクマが両手を広げると、蒼い霧が両腕を取り巻いて固まった。

どうやらそれは頑丈な籠手へと姿を変えたようだ。

同じように足にも絡みついた霧が脛当てに変化する。

コクマが格闘家である事はねえさんから聞いていた。天使の加護  
を除けばスピードは普通、力がひどく強いわけでもない。技術も並  
よりいい程度。逆に言えばバランスの取れた拳闘士ともいえるのだ  
が、何しろねえさんの言葉には遠慮がない。

しかもねえさんは何故か第一印象でコクマを嫌ったようで、それ  
を隠そうともしていなかった。

手こずったりなんぞしようものなら後にどんな叱責が待っていることやら。

にしても遅い。自分が本気で殺す気だったらとっくに切りかかっている。

「準備はそれで終わりか？」

思わずあきれた声が出た。

蒼い霧がさらに額当てと拳サックに変わった。この上まだ武具が増えるのか？

「せっかちですねえ。いや、余裕なのか？ 敵が武装を整えるのを待つなんて」

相手が準備万全でないところを襲うのは自分の中の騎士道に反する。

そんな事を言っても虚言と奇襲が得意なセフィロト国には通用しないだろうが。

見下ろすとトロメオの外堀付近で激しい打ち合いが始まっていた。特に自軍が押されている様子はない。安心してセフィラを相手にしよう。

第43番目の悪魔サブノックが鍛えた長剣をまっすぐコクマに突きつけた。

「退いてもらおう。ここは貴様らが踏み荒らしている土地ではない」  
「その台詞はお返しするよ。セフィロト国の発展のため明け渡してもらおうか！」

上から振り下ろした剣を箆手が力任せに受け止めた。  
びりびり、と剣を握る両手に振動が伝わる。

そのまま剣を跳ね飛ばして逆手で腹部を狙ってきたが、そんな見え見えの攻撃を受けてやるほどお人よしではない。

飛んできた拳を肘と膝ではさんでつぶしてやった。

「ぎゃあっ！」

色男の口から出るには少々小汚い声を発して、コクマは手を引い

た。

ああ、確かにそうだ。ねえさんが褒めるような相手でも自分が手こずるような相手でもない。

籠手のお陰で骨が砕けることは免れたようだが、かなりのダメージを負ったらしい。だらりと下がった左手はもう戦闘に使えないだろう。

「うそだろお?! レメゲトンで一番強いのはファウスト女伯爵じゃなかったのか?!」

コクマは大きく目を見開いた。

それは正解だ。だが、他のレメゲトンが弱いのだと勘違いされては困る。

後衛のアリギエリ女爵やくそじじいならともかく、戦線に出ている自分は一介の騎士だ。ただ天使の加護を受けただけの者とは格が違う。

「くそ! もう少しとっておきたかったんだがな」

コクマはそう言うのと地面に向かって急降下した。

「?!」

何をする気だ?!

慌てて後を追う。

目下では万を越す兵隊同士が激しい戦闘を繰り広げているのだ。

その中に飛び込めば、いかに天使の加護を受けたセフィラと言っても無事に済むはずがない。

何より、加護を持たない一般兵に多大な被害が及ぶ。

降下の上度を上げる。

だが飛翔能力を使い始めてほんのいくらかしか経っていない自分は、飛びなれているセフィラのスピードに追いつけない。

最悪自由落下するつもりでセフィラの白い翼を追った。

風の抵抗が大きい長剣は鞘に収めた。

それでも追いつけない。

強風の中目を開けているのも億劫だ。

どうやら向かった先は戦乱の真っ只中ではないらしい。むしろその衝突帯を避けてトロメオから遠ざかるうとしているように思える。一体何を企んでいる？

戦場から少しはなれて開けた場所で着地した。なぜか天使の加護が消滅する。

後を追って草原の上に降り立ったが、警戒して距離をとった。何をするか分からない以上うかつに手を出さない方がいいだろう。

負傷した左手を庇うようにしてゆらりと立ったコクマはふいに唇の端をあげた。

コビテル・ララス  
「快樂幻想！」

鋭い叫びと共に、目の前の空間が揺らぐ。

先日くそガキが　　というかグラシャ・ラボラスが使った闇の空間に類似した特殊空間だろうか。

と、思ったがどうやら違ったようだ。

しかしながら信じがたい光景が目の前に広がっていた。

「なっ……！」

「驚いたかい？　これが奥の手だよ」

にやりと笑うコクマの隣には同じ顔をした男がいる。

そしてその隣にも同じ顔をした男。

気がつけば10人以上のコクマが自分を取り囲んでいた。

「……」

残像か？ いや、そうは見えないし、それほどのスピードがあるなら最初から使うはずだ。

ということは幻覚か。そんな能力がコクマにあったのか。

もし全員の能力が同等だとしたら、10人のセフィラを相手にするのはさすがに無理だ。だが、幻覚にそれほどの力を持たせられるとは思えない。

本物は左手をつぶされているから見失う事はないだろう。怪我をしている以上庇う動作をせざるを得ない。

幻影を一つずつ消して、最後に本体を相手にしよう。

「覚悟するんだね、クロウリー伯爵。ゲブラには悪いけど倒させてもらう」

何故そこでゲブラの名が出るんだ！

叫びたかったが、10人のコクマが一斉に飛び掛ってくるのが見えた。

サブノックの剣を閃かせて一人目を切り伏せた。



## SECT・14 狂風鷲（フレスヴェルク）

一人目の胴を分断した瞬間、その体は霧散した。

「！」

その場に残ったのは、真つ赤な天使の羽根が一枚  
目の前をふわりと通り過ぎ、地面に舞い降りた。

その様子を見てコクマは驚いた声を出す。

「噂は本当だったわけ？ 天使の攻撃を分断する……ネツアクの勘違いかと思ってた」

天使の攻撃、つまりこの分身もネツアクが矢から放ったガラスのヴェールと同じように天使の力で出したものだと言うわけだ。

コクマはあの分身たちを『フラウス』、と言った。セフィロト国の古代語で『幻想』『幻惑』という意味を持つ言葉だ。羽根を核にして実体化してあるのだろう。

物理的には分断できないはずのそれは、サブノックが鍛えた剣ならば容易に斬る事ができる。躊躇する理由はなかった。

肩をすくめたコクマを無視して自ら二人目に切りかかっていく。  
振り下ろした剣は二人目の箒手で止められ、先ほどと同じタイミングで拳が追ってきた。

「学習能力はないようだな」

もう一度拳をつぶして……と思ったが、そううまくいくはずもなかった。

完全に止めたと思ったはずの拳は生物にはありえない硬度を持っていた。

「くっ！」

攻撃の勢いを止めきれず、後ろ向きに飛ばされた。

何とか体勢を立て直して着地する。

同時にコクマの亡霊が数体、一気に飛びかかってきた。

なんとか応戦するが、いかにせん数が多い。それも、どうやら剣

以外の物理攻撃ではダメージを与えられないようだ。

物理攻撃が通用しないとなるとこれだけの数を一度に相手するのは不可能だ！

「ハルフアス！」

いったん空に逃げた。

分身の方に天使の加護はさすがにないらしい。空にまで追ってすることはなかったが、このまま放置しておくわけにはいかない。

何より、上司から完膚なきまでに叩きのめすよう指令が出ている。あまり時間をかけるとそれはそれで叱責を受けそうだ。

剣を納めて両手を下に向ける。

その先にあるのは……数体の『幻想』<sup>フラウス</sup>。

穏やかな風に耳の羽根が揺れた。

「力を借りるぞ、ハルフアス」

「ひひ！ うまく使えよ！ 強いぞ！」

「それは……重々承知だ」

一瞬だけ先日 of 惨劇が目の前をよぎる。震えそうになる手に力を入れ、脳裏によぎる光景を打ち払うようにぶんと頭を振った。

大丈夫だ。うまくコントロールすればきっと風は味方になってくれるはず。

前に突き出した手を取り巻くように風の渦が生じる。

その風の流れに同調して全身が熱くなる。

「ひやはは！ そいつの名前教えてやる！ レーージュがつけてくれたんだ！」

ハルフアスの声が頭に響く。

悪魔の力を使役するのは意志の力だ。技に名をつけることでそれ自体が強くなるわけではないが、名を口にする事で意志の力を強めて力のコントロールを潤滑にする事が出来る。

微かに唇の端をあげ、片隅に届いた名を呟いた。

「狂風驚……」<sup>フレスヴェルク</sup>

瞬間、その場の大気はすべて自分の制御下に落ちた。

フレスウェルク

狂風驚とはよく言ったものだ。

遠い異国の地で伝説の中に存在するという風を起こす驚、死体を食うとも言われる凶鳥だ。腕に羽根を持つ狂戦士<sup>バーサーカー</sup>ハルファスが使う技の名としてはこれ以上のものはない。

完全に制御権を握ったこの大気中は、ある種の特殊空間と言える。  
う。

地面に向けた右手を軽く振るっただけで大気が轟音を上げて飛び荒ぶ。

二人のコクマが宙に浮いた。

まるで糸でつられた操り人形のように自由を明け渡した彼らは、手で足でもかくように空気をかく 自分の支配下にある大気を。

刺すような動作でそちらに左手を突き出すと、その先からハルファスが普段飛ばすようなかまいたちが飛んだ。

鋭く空を裂いたそれは一瞬にして二人のコクマの姿を霧へと変えてしまった。

「ひひひ！ お前うまいな！」

ハルファスのお褒めの言葉を聞き流して風を操る事に全神経を集中する。

ガキが千里眼を使うときはこんな状態なのだろうか。

思うとおりに動かせる、と言うことは全ての情報を頭の中で処理してやりたい事を正確に打ち出さねばならないということだ。

与えられる情報量も動かせる手足の数も半端ではない。

額に玉の汗が浮かんだ。

確かにこれは長い間使っていられるものではないだろう。

大きく手を広げて一気に両手を振り下ろした。

大気が押しつぶされて地面にいるコクマたちは相当な圧力をかけられたはずだ。

幻覚は残り8人。

ねえさんに怒られる前に、自分の制御が効いている間に力タをつけたい。

「ひひひ！　たくさん斬を出したかったらな！　手を使ってるようじゃ駄目だ！」

「どうすればいいんだ？」

「もっとたくさんついてるだろ！　お前の手！」  
「どうということだ？」

眉を寄せたが、自分の手を見てはつと気づく。

一度により多くの斬撃を飛ばすには、全体で一つ飛ばすのではなく……

「ありがとう、ハルファス」

胸の前でクロスした手をぎゅっと握り締める。

「これで終いだ！」

叫ぶと同時に突き出した手をめいっばい広げる。

その瞬間に指の先から無数のかまいたちが飛び出した。

「！」

声も上げず次々と霧散していくコクマの分身たち。鋭い風に身を裂かれても悲鳴一つ上げず塵に帰していく。

なお勢いを増す大気の刃は地を抉り草木を蹴散らしていく。

怒涛の嵐のような攻撃が止んだとき、傷ついた大地の上に最後に残るのは本体だけだった。

フレスヴェルク

狂風鷲の結果を解き、荒い息を整えながら地面に降り立つと、残ったコクマ本体は負傷した手を庇いながらもへらりと笑った。

「やるねえ、伯爵さん。こうも簡単に幻想が殲滅させられるとは」

もう何も手札は残っていないはずなのだが、この余裕は一体何なんだろう。

いずれにせよコクマの動きを止めねば。

指の先に風を集中させる。

「おっと、やられる前に逃げるよ。10体程度じゃまだまだ余力がありそうだね」

「逃がすか！」

指の先からかまいたちを飛ばす。

それでも大量の情報に精神が疲れて集中力が落ちたいま、飛ばした斬撃に先ほどまでの威力はない。

「危ないな」

それでもコクマの太腿をかすめた風は薄く神官服を切り裂いた。敗れた箇所から白い肌が見え隠れした。

が、違和感を受ける。

白い肌に浮かぶ黒い紋様は、自身が入れた刺青とは考えにくい。

「これでいったんサヨナラだ。気の強いねえさんよろしく」

コクマは背の翼を広げた。

追うか迷ったが、トロメオからあまり離れるのはよくないだろう。退けたことでよしとして皆に戻る事にした。

ねえさんに叱られるのは避けられないだろうが、仕方がない。ありのままを報告してビナーの戦闘に参加するでしょう。

## SECT・15 幻想兵

上空から見下ろした城塞都市トロメオの正門前では多くの兵が接近戦を繰り広げていた。

眼下の戦場から飛んで来る矢をハルファスが軽くいなししていく。

「ねえさんはどこだ？」

きよろきよろと見渡すと、なんとねえさんは兵の先頭に立っている。

ろくな装備もしていないドレス姿のねえさんは背の翼を翻し、周囲にいくつもの黒球を浮かべて兵を先導するように戦っていた。

レメゲトンが一般兵を相手にするとは、いったい何があったんだ？  
兵同士がぶつかり合う戦場に急降下した。

剣が交わる音が響き渡っている。

こちらに気づいたねえさんは戦場からいったん退いて空に浮いた。いつも余裕の彼女には珍しく、うつすらと汗をかき軽く息が乱れている。

「一体どうしたんだ？ ビナーは？」

首を傾げて訊ねると、ねえさんは眉を吊り上げた。

「ビナーは退いたわ。代わりに傀儡を大量に置いていったのよ！」

「傀儡？」

「……いるのよ、兵の中に。斬っても斬れない、通常攻撃が効かない幻想たちが！」

「は？」

「生身の兵の中に幻想の兵が紛れ込んでいるわ。あいつは悪魔の力でしか倒せない。普通の兵だと思って切りかけたら大変な事になるわ」

「何だと！」

あれはコクマの能力ではなかったのか？！

「……ビナーってばあんなかわいい顔してなんて厄介な事を！」

ねえさんの金の瞳が怒りの炎に燃えている。

が、その言葉に一筋の違和感を覚えた。

「あれはビナーの能力だったのか？」

てつきりコクマの能力だと思っていた。

「どうということ？」

「コクマも幻想フラウスを持っていた。10人程度だが、物理攻撃が効かなかった」

「あいつが？」

ねえさんはきゅつと眉を寄せた。

「ビナーの加護かしら？ いえ、それよりは……」

表情が険しい。

「死霊遣いネクロマンサーが戦場に来ているというの？ だとしたら大変な事になるわ……！」

「ネクロマンサー？」

「セフィラ第8番目、栄光の天使ラファエルを使役するホドのことよ。ここに来る前、メイザース侯爵から受け取った資料の中にあつたわ」

ねえさんは険しい表情のまま一息に告げた。

「グリモワールの独立戦争の折、最も苦戦した戦いがあるのよ。それが死霊遣いホドが戦場に出てきた時のことよ。詳しい事は後で話すけれど、剣で斬っても死なない幻想フラウスの軍勢にグリモワール軍は壊滅的な被害を受けたの」

金の瞳がこちらを貫いた。

「そうなる前に幻想フラウスたちを消すのよ！ 一般兵じゃ傷もつけられないわ！」

「分かった」

話は後だ。

悪魔による攻撃でしか滅せない傀儡を相手にできるのもレメゲト

ンだけだ。

セフィラ、フラウス幻想。

その双方を一手に相手しなくてはいけない。

「行くわよ、アレイ！」

漆黒の翼を追って、再び戦場に降下した。

ねえさんが周囲に浮かべている黒球は重力の塊だ。

名もなきその技に一度触れてしまえばその力に反する事は不可能だ。

「一般兵と幻想兵の区別はつかないわ。だからって躊躇しちゃ駄目よ」

彼女が指を向けた黒球は粉々に砕け散り、その破片はすべて凄まじい速度で甲冑に身を包んだ兵士に向かう。

最前列にいた兵士はその黒い破片をもろに受けてしまった。

声を出す事もなく霧散したその兵は幻想。フラウス

その隣で劈くような悲鳴を上げて折れ曲がっていく自身の右腕を掲げているのは現実の人間。

「この軍全部を止めるつもりで行きなさい。後ろには幻想に抵抗する術を持たないグリモワール兵が控えているのよ！」

叫びながらねえさんは背に漆黒の翼を広げ、飛び立った。

そのまま敵兵の真っ只中へ突っ込んでいく。

後姿を見送り、自分も左手で剣を構えた。

千里眼を持つあのくそガキなら人間とそうでない者を見分けられただろうか。

「レメゲトンに続け！」

兵団長が叫ぶ声を背に聞きながら、ハルフアスの加護を湛えたまま長剣を閃かせて軍に突っ込んでいった。



数時間後、日暮れと同時に一斉にセフィロト兵が退き始めた。

何とかトロメオの城門を守りきったものの、疲労度はこれまでの比ではない。

「これが……狙いかしら」

「消耗戦と言っわけだな」

荒い息で地面にへたり込んだ自分を、ねえさんは毅然とした態度で見下ろした。

「そんな姿をみんなに見せちゃ駄目よ、アレイ。立ちなさい」

「……手厳しいな」

「もしメイザース侯爵が発見した資料による伝承が本当なら、これからはもつと辛い戦いになるわ。こんな程度じゃ済まないわよ」

同じ時間、何百もの幻想たちを相手にしてきたのだ。ねえさんだって疲れていないはずはないのだ。

それでも不敵な笑みを絶やさず、しっかりと地面を踏みしめて立っている。

思わず笑ってしまった。

この人には、勝てないな。

重い体を起こして立ち上がった。

自分より目線はずっと低いのに。力を入れれば折れてしまいそうな腕をしているのに。

どうしてこの人はこんなにも強いんだろう。

「でも本当に何か対策を立てない限り死霊遣いを撃退する事はできないわよ」

「その死霊遣いというのは何なんだ？ セフィラ第8番目ホドにはどんな能力があるというんだ？」

問うと、ねえさんは小さくため息をついた。

「栄光の天使ラファエルは、血を使って人間の分身を作り出す事が出来るのよ。天使の作ったものだから物理攻撃は受け付けない。破壊できるのはそれに順ずる悪魔の力だけ」

「血……？」

ふと思い出して、先ほど拾ってきた赤い羽根をねえさんに差し出した。

「これは？」

フラウス「幻想を斬った跡に残っていたものだ。天使の羽根だと思うのだが」

「羽根に血が染み込んでいるわね」

ねえさんは唇を噛んだ。

「どうやらホドがどこかに潜んでいるのは間違いないようだわ」

薄暗くなった平原を遠く睨んで、レメゲトンの長は目を細めた。

その凜とした眼差しは、まるでどこかに潜む敵を見つけ出すかのように鋭く、深い光を秘めていた。

悪魔の力でしか滅ばせない幻想兵。ホドの力がどれほどのものは分らないが、その数は計り知れない。

それをこれからたった二人で、それも他に出てくるセフィラを相手にしながら消滅させていくというのか……？

気の遠くなりそうな予感に、もう一度ふらつきそうになった体を必死で支えた。

収めるのを忘れていた剣を地に突いてバランスを取る。

サブノックの剣。

フラウス天使の攻撃を裂き、幻想を切り裂く

「ねえさん」

「なあに？」

「もしかしたら……突破口があるかもしれない」

金の瞳が大きく見開かれた。

## SECT・16 救世主

トロメオに戻ると、アリギエリ女爵を頂点に置いた医療班が慌しく駆け回っていた。門の手前で退けたものの、幻想兵が混在していたために被害は大きい。

特に今回前線で戦っていた炎妖玉騎士団員たちの中で重傷を負った者も多かった。

街を抜け、シエフィールドの屋敷に戻るとすぐにフォルス騎士団長、部隊長フェルメイ、それに琥珀騎士団長のクライノ<sup>アンバー</sup>カルカリアス卿を招集した。

会議用に使われる円卓を囲んで、全員が席に着く。

最初にねえさんの素っ頓狂な声が響いた。

「サブノックの剣？」

「そうだ」

悪魔の力以外で幻想兵を滅ぼす事ができる唯一の武器。

「第43番目の悪魔サブノックが武器を鍛える事はみな知っていると思う。その剣は、悪魔の攻撃に順ずる。つまり、レメゲトン以外の者も天使が作り出した幻想兵に対抗する事が出来るようになるということだ」

「それはレメゲトンでなくともあの幻を倒せるという事ですか？」

「おそらくそうだろう」

これは確信があつた。

「現在サブノックの武器を持つのは俺以外にはフォルス騎士団長と王都在住の漆黒星騎士団長クラウド<sup>ブラックルビ</sup>フォーチュン侯爵のみだ。だが、サブノックは一晚あれば武器を作成してくれる。与える相手の剣の腕を選びはするが」

「つまりは、幻想兵に対抗できる騎士の数を増やそうというわけね」  
ねえさんは物騒な笑みを浮かべた。

「騎士団長を前線で戦わせるわけにはいかないわ。腕の立つ者を選びすぎて、すぐに対 幻想部隊<sup>フラウス</sup>を編成しましょう。よろしいでしょうか、フォルス騎士団長？」

「ああ、人選はフェルメイに任せる。だが……」

フォルス騎士団長は深い緑の瞳に強い意思の光を灯した。

「私も前線で戦う。一人後ろでふんぞり返っているなど、性に合わないのでは」

さらりと言った団長にフェルメイが驚きの声を上げる。

「フォルス団長、ファウスト女伯爵のお言葉を聞いてらしたでしょう？ 総指揮のあなたが前線で戦う事などありません」

「それでも、武器の製作には一晩かかるのだろうか？ もし次にセフィロト国が攻めてくるのが一週間後だったとしても、たったの7人分の武器しか作れん計算になるだろうに……あの妙な人形に対抗できる人間は一人でも多いほうがいいんじゃないのか」

それは正論だった。

確かにサブノックが武器を与えられるのは一晩で一人だ。どんなに急いでも作る数には限りがあった。

しかし、フォルス騎士団長はグリモワール軍の総指揮官なのだ。

前線で剣を振るう事など仏なら考えられない。総指揮官が落ちる事は軍の敗戦を意味するからだ。

「お気持ちは分かりますがバーディア卿、ここは押さえてください」  
困ったようなねえさんの言葉にもフォルス団長は鷹揚に微笑んだ。  
「ならば総指揮官を琥珀騎士団長<sup>アンバー</sup>のクライノ殿に委託する。それでいいだろう」

全くそういう問題ではないのだが、豪快な性格を持つ炎妖玉騎士団長は満足げに頷いた。

「バーディア卿、それはいささか横暴です。総指揮官を委託など、そんな権限はゼデキヤ王にしかないのですぞ」

貴族出身の騎士団長クライノ「カルカリアス卿は強い口調で言った。

だが、フォルス騎士団長は聞く耳を持たない。

困った事だ。

むろんこの人の場合一度決めてしまつとよほどの事がない限り考えを変えないということは周知の事実である。こうなつた以上彼の心を覆させるのは難しい。

それが嫌ほど分かつている自分だからこそ大きなため息をついてしまつた。

「フォルス騎士団長、無理はなさらないでください。危険だと思つたら必ずすぐに退いてください」

「分かつておる！」

「ちよつとアレイ、認める気なの？」

ねえさんが眉をひそめたが仕方ないだらう、と返した。

どちらにしてもサブノックの剣の本数には限りがある。フォルス騎士団長には前線に立つてもらうほうがいい。

何より彼は他に類を見ない剛剣の持ち主だ。その豪快さによく似合う真直ぐで強い剣筋は生半可な実力では打ち合えないほどに洗練されている。

「残りの人選はフェルメイに任せる」

「御意」

こちらもやれやれといった顔をした部隊長フェルメイ「バグノルドも上司の性格をよく知っている。止めようなどと無駄な行為はそれ以上しなかつた。」

サブノックの剣を持つにはやはりそれなりの悪魔耐性がある。

クロウリー家の娘と結婚する権利を手に入れた義兄上は問題なく、フォルス騎士団長もそれなりの耐性があつた。

フェルメイが選出した炎妖玉騎士団員10名とクライノ琥珀騎士団長が選出した琥珀騎士団員10名はその日のうちにねえさんと自分待つ部屋へ一人ずつ通され、試された。

コインを使った耐性試験に合格したのは20名中たったの6名だった。

「まあ仕方がないわね。それでも一般的に見ればかなり多いほうよ」  
ねえさんは残った6人を見渡した。

その中には炎妖玉騎士団アルマンデイン部隊長フェルメイ<sup>ガーネット</sup>「バグノルド」の姿もあった。他3名の炎妖玉騎士団員と残り2名の琥珀騎士<sup>アンバー</sup>団員。うち一人はフェルメイ直属のリーダーを務める女性騎士だった。

いずれ劣らぬ騎士団の精鋭たちだ。サブノックの剣を持てば幻想<sup>フラウス</sup>たちをなぎ倒してくれる事だろう。

「とりあえず一週間ね。その時点でまだセフィロトが攻めてこないようならこの特殊部隊の人員も増やしましょう……まあ、敵が消耗戦を狙うのだったら次の戦闘までほとんど間はないと思うけれどね」  
ねえさんは肩をすくめた。

一刻の猶予もないということだ。

「一人目はこの後すぐサブノックと会ってもらおう。誰からでもいい、順番を決めてくれ」

「最初は私が参ります」

フェルメイが名乗り出た。

自分より一年後に炎妖玉騎士団に入団したフェルメイ<sup>ガーネット</sup>「バグノルド」は、その当時から才能の片鱗を見せていた。

現在では4つある部隊のうちアルマンデイン部隊の隊長を務め、細かい事を考えるのが苦手の騎士団長の下で補佐的な役割を担っているらしい。

おそらく面食いのくそガキが顔を覚えるのに苦労するであろう、これといった特徴のない顔はいつも優しい微笑を湛えている。時折見せる表情が3年前よりどこか大人びていて、時の流れを感じる事があった。

「ウォル先輩、俺、すごく嬉しいです」

「何がだ？」

「だって先輩は今回の戦で本当に悪魔の化身みたいに見えたから……ここにいたときからずっと不思議な雰囲気を持つ人だとは思っていましたが、今回本当にそう思いました。まるでレメゲトンになるためにいるような、そんな先輩が俺のために武器を作ってくれるなんて夢みたいだ」

本当に嬉しそうに微笑んだフェルメイの顔は3年前と変わっていませんでした。

口調もどこか幼い頃に帰ったように感じた。

「なんだか別の人みたいです。なんだか人間離れして、本当に悪魔になっちゃったみたい……あ、悪い意味じゃないんです！ 本当にかっこいいと思うから」

「気のせいだ」

自分はそんなすごい人間じゃない。

たまたま運よく偶然が重なって敵軍を退けた、ただそれだけの事だ。

「そんな事ありません！ 俺たちの救世主なんです、ウォル先輩もファウスト女伯爵も、医療班として負傷兵を手当てしてくださっているアリギエリ女爵も。そこにいてくださるだけで気持ちが全く違うんです。俺たちにはレメゲトンがついてるんだぞって」

大げさなほど大きなアクションでそれを示したフェルメイは、心の底からそう思っているように見えた。

心のどこか片隅に温かな感情が灯る。

「俺は少しでもそんなレメゲトンの人達の役に立ちたい。本当にそう思います。きっとみんな同じ気持ちなんです」

「ありがとう。お前がそう思ってくれるなら……俺たちレメゲトンも頑張れる」

自然にそんな言葉がでて、自分で驚いた。こういう人の真直ぐで温かい心を素直に受け取れるようになったのはかなりの進歩だろう。フェルメイも少し驚いたようだ。

それでも嬉しそうに笑い返してくれたのがまた嬉しく、思わず微笑み返した事に全く気づいてはいなかった。



## SECT・17 フェルメイ「バゲノルド

フェルメイを連れて、外に出た。

もう既に真夜中へと近づいた夏の空気が出迎える。微かにひやりとしているが湿気を含んだ、少しまとわり突くような独特の風だ。街の明かりが消え薄暗い松明のみが照らし出す中、空は満天の星に彩られていた。戦場とは思えない静けさがあたりを支配している。頭上の煌きに見惚れる暇もなく右手首に下げたコインを握り締めた。

「サブノック！」

悪魔の名を叫ぶと、空間がゆらりと揺らめいて第43番目の悪魔サブノックが現れた。ライオンの頭部を象った兜をかぶり、くすんだ青のマントを身に着けている。

兜に隠れて顔は見えないが、気難しそうな壮年男性の声がした。

「何用だ」

「ご無沙汰してりました」

「クロウリーの若僧か」

サブノックは、気分屋ではあるが人間に危害を加えたり攻撃したりということをしてしない。

その点ではハルファスと違って呼び出す時に安心感を持っていた。「黄金獅子が天命を全うして450年　もうそろそろこの国も潮時であろう」

サブノックの声はとても落ち着いている。

グリモワール王国の現況と現在の戦況を伝えようと思ったのだが、まるで今回の戦の何もかもを知っているかのような口ぶりだった。

「それでもなお　存続を望むか」

「無論です」

間髪いれず答えた自分に、サブノックはぼつりと呟く。

「自ら犠牲の道を選択するか　世界を支える可能性を秘めし悪魔の

末裔」

その意図するところが分からず首を傾げた。

悪魔の末裔、というのはおそらく自分を指しているのだろう。しかし、自らを犠牲にするつもりはない。グリモワール王国を守るのも戦うのもすべて自分の意思だ。

どういう意味なのか聞こうとしたが、先にサブノックがフェルメイに視線を映した。

「何を望む 少年」

自分が若造でフェルメイは少年……サブノックの瞳に、自分たちはどんな姿に映るのだろう。

信じられないほど長い時の中で、いったい幾人のレメゲトンと契約してどれだけの人間に武器を与えてきたのだろうか。

少年と呼ばれたフェルメイは短い質問を噛み砕くようにゆっくりと目を閉じた。

幾許かの沈黙を経て少年は目を開いた。

強い意思の光をその新緑色の瞳に灯した彼ははっきりとした口調で告げた。

「この世界の存続を。国の人々に未来を。そのために武器を取り戦う事は躊躇わない」

迷いなき瞳に映るのは未来。果て無き闘争も先を見据えれば一つの布石となる。

凜とした彼の横顔に人を背負う強さを見た。人の前に立つ先導者の輝きの片鱗を見た。

きつといつかフォルス団長の跡を継ぎ、国を守る炎妖玉国境騎士団を率いていく存在へと成長するだろう。

ふと垣間見えた姿に思わず頬が緩む。

兜に隠れたサブノックの表情は分らない。しかし、負の感情が放たれることはなかった。第43番目の悪魔はフェルメイを認めたようだ。

「光が別った世界 その存続を望むなら」

サブノックはそんな言葉を残して掻き消えた。

その場に残ったのは満天の星空と耳につく沈黙だけだった。

「明日には武器が出来上がるだろう」

「本当ですか？」

ぱつと顔を上げたフェルメイは、サブノックを前にしていた時と打って変わって幼い表情を残していた。

「ああ、怖かった……」

ほっと息をついて胸をなでおろしたフェルメイに、先ほどの凜とした空気はない。

フォルス団長が座を明け渡すまでにはまだもう少しかかりそうだ。サブノックが少年と呼ぶのは仕方のないことなのかもしれない。

それでも、きつといつか。

「それでも本物の悪魔に会ってしまった……！　すごい！」

興奮に打ち震えるフェルメイを見ながら、サブノックの言葉を思い出す。

光が別った世界。

世界を支える可能性を秘めし悪魔の末裔。

自らの犠牲

このフリーズをどこかで聞いた事があると思うのは気のせいなのだろうか。

晴れないわだかまりを残したまま、城塞都市トロメオの夜は更けていった。

悠長にしている暇はなかった。

次の日にはまたセフィロト軍が侵攻してきたのだ。

「幻想兵を盾に一気に攻め入るつもりね」

城壁から敵軍を見下ろすねえさんの声が冷たい感情を帯びた。

自分とその隣に立つのはフォルス騎士団長と、サブノックの剣を

手にしたフェルメイ　わずか4名の対　幻想部隊<sup>フラウス</sup>だった。

レメゲトンと違って悪魔の加護がなく空を飛べない二人は自分たちと別行動で騎馬部隊の先頭に立つことになっている。

対して自分とねえさんは空中から敵の真っ只中へ突っ込み、霍乱するといふなんとも無謀な作戦だった。

ねえさんは金の瞳でフォルス団長とフェルメイを射抜いた。

「あなたたちはレメゲトンと違って悪魔の加護を持たない普通の人間です。サブノックの武器があるとはいえ、決してご無理なさらないでください。特にフォルス騎士団長、炎妖玉騎士団長<sup>ガーネット</sup>が倒れば、騎馬軍全体が揺らぎます。引き際を心得てください」

きっぱりと言い放ち、背に翼を広げる。

その姿を見て声を失ったフォルス団長は感嘆のため息をついた。

「まるで悪魔そのものだ……本当に人間なのか？」

それを聞いたねえさんは唇の端をあげる。

全ての人間を魅了する悪魔の微笑で。

「もう半分は悪魔になってしまったのかもしれないわ」

「素晴らしい！　惜しいな、剣士であれば騎士団長になれる素材だ」意味の分からない団長の言葉に、フェルメイは小さくため息をつく。

「フォルス団長、お気持ちは分かりますが……」

「だからレメゲトンなのだな！　ウォルといいファウスト女伯爵といい、ゼデキヤ王が羨ましいぞ！　炎妖玉騎士団<sup>ガーネット</sup>に一人回せ！」

むちゃくちゃな理屈を言って豪快に笑った団長に、ねえさんが困惑のまなざしを向けている。

またも大きなため息をついたフェルメイを見て、自分は微かに笑んだ　フォルス騎士団長、心配しなくてもちゃんとあなたの跡を継ぐ素材は育っています。

そんな言葉を飲み込んで、ハルファスの名を呼んだ。

耳元がむず痒くなってどうにも納得する事のできない愛らしい加護が出現した。

「ははは、似合わんな、ウォル」

「……それは自分が一番分かっています」

終始楽しそうなフォルス団長に軽く礼をして空に浮かび上がる。

高いところからはセフィロト軍の全景が見渡せた。

数万にまで膨れ上がったセフィロト軍はその10分の1近くが幻想だと思われる。それも、一般兵にまぎれて普通の人間に襲い掛かる恐ろしい傀儡だ。

「グリモワール独立戦争の折、古の大天文学者ゲーティア・グリフィスは……」

隣のねえさんが軍を見下ろして呟いた。

「死霊遣いホドとその幻想たちを倒すために、初めて悪魔を召還したそうよ」

稀代の天文学者ゲーティア・グリフィス、つまりあのくそガキの先祖だ。

もともとセフィロト、クトゥルフなどの隣国が均等に支配していたこの地に悪魔崇拜の国を作り上げたのは彼と初代国王ユダ・ダビデ・グリモワールだった。

幾つもの敵に囲まれた苦しい戦いの中で彼らは悪魔を召還するようになり、その後建国してから72の悪魔と正式にコインでの契約を結んだ。

「初めて召還した悪魔は、魔界の創造主とも言われるリュシフェルだったのは知っているわよね？」

「ああ。本当か嘘かは定かではないが」

神と同一視されるリュシフェルは、魔界の頂点に立つ墮天の悪魔といわれていた。

ただしその存在は伝承のものでしかなく、メフィストフェレスやベルフェゴールと並んで偶像崇拜になりかけている最高位の悪魔のうちの一人だった。

「そう、それが本当かどうか分からないのよ。でも、彼は実際にホドを退けているわ」

ねえさんは魅力的に、妖艶に微笑んだ。

「彼と同じように悪魔の加護を持つ私たちが勝てない理由がどこにあるかしら？」

不敵な笑みはいつもと変わらなかった。

これから何万もの敵に突っ込んで幻想と現実の入り混じった兵と戦闘するというのに、不安など微塵も感じさせない。

「そうだな」

思わずつられて微笑むと、ねえさんは意地悪そうに笑った。

「よく微笑うようになったわね、アレイ。それもあの子のお陰かしら？」

思わぬ言葉に絶句したが、ねえさん相手に意地を張っても仕方がない。

「……そうかもしれないな」

「はつきり認めなさい。往生際が悪いわよ？」

それには肩をすくめるだけで答えて、左手で剣を抜いた。

「ゲオルグⅡファウストの末裔の力、見せてもらおうか」

「あなただってレティシアⅡクロウリーの子孫だということを見せて欲しいわね」

そういつて笑い合う。

互いの実力を認めているからこそできることだった。

「ご先祖様たちに恥じない戦いをしましょう」

「ああ」

たとえ敵が万の兵でも負ける気はなかった。

ハルファスの加護を全身に受けて、軍の真っ只中に向かってねえさんと二人、急降下した。

## SECT・18 切り札

消耗戦を狙ったセフィロト国の作戦は確実にグリモワール国の戦力を削いでいった。

傷ついた兵は戦線を離れその代わりに新たに兵団が送られてくるが、対 フラウス 幻想兵部隊は替えがない。

緊急で結成された対 フラウス 幻想部隊は『アウェイク 覚醒』と名づけられ、一週間のうちに10人にまで増えた。とはいえ激しい戦闘と一人あたりの相手にする兵の多さにより短期間で疲弊しきっていた。

毎日とはいかないまでも隔日以上頻度で攻めてくるセフィロト軍は確実に年内にトロメオを落とす気だろう。

特に幻想を伴って攻め入ってくるコクマやビナー、時にゲブラの相手もこなさなくてはいけない自分とねえさんへの負担は途方もないものになっていた。

『アウェイク 覚醒』の面々が時に加勢してくれたりもするが、空中戦には参戦できない。

もちろん向こうもそれが分かっているのだろう、嘲笑うかのよう  
に空から来襲したセフィラは迷うことなく自分たちに襲い掛かってくるのだった。

それでもやつと幻想兵と一般兵の区別がつくようになってきた。  
フラウス 表情に乏しい幻想は、兜に隠れて見えにくい顔を観察できればすぐに判別できる。ただし、混乱した戦場の中で冷静に判断できるかといわれればまた別問題だった。

「アレイ、伏せて！」

鋭い声に体が勝手に反応した。

屈んだ頭上をねえさんの放った黒球が凄まじい速度で通過し、コ

クマの形をした幻想を消滅させた。

背中合わせに構えた周囲を何百の兵が取り囲む。

幻想たちの合間に時折見える一般兵をなんとか避けて攻撃したい。荒い息を整えるように深呼吸した。

いくらかすつきりした頭で敵をぐるりと見渡す。

「こう毎日じゃうんざりするわ……カーバングルを取り戻すどころかトロメオの防衛で手一杯じゃない！」

「ホドからラファエルの加護を引き剥がす手段はないのか？ 大元を叩けば幻想を相手にしなくてすむはずだ」

「心当たりはあるのだけれど……」

会話はそこで一旦途絶え、二人同時に飛び掛ってきた敵を吹っ飛ばした。

二人の幻想兵は黒球とかまいたちを食らって霧散する。

「うまくいくか分からないわ！ でも試してみる価値はあるはずよ！」

「それは何だ？」

「印を、探すの」

「印？」

「そうよ」

ねえさんは頷いた。

「私たちがコインを持つようにセフィラも必ずどこかに天使の加護印を持っているはずだと思うのよ。それがどんな形か分からないけれど」

「なるほ、どっ」

飛び掛ってきた兵を一刀両断しながら答えた。

「つまりホドを探すより、印がどんなものなのかを見つけるのが先なんだな」

「そういうこと！」

ねえさんはそこで一旦口を噤んでから、ふっともらした。

「おそらく、皮膚のどこかにその印を刻んでいると思うわ。悪魔と



の契約でも、コインを使わなければそうなるはずだから」

「あの……くそガキの額に浮かんだ印のようなものか？」

「ええ、そうよ。次からは少し気をつけてみてくれるかしら？」

そこでねえさんはきつと上空を睨みつけた。

「ホドの前にあの二人を何とかしないといけないものね！」

近くにいた『<sup>アウェイク</sup>覚醒』のメンバーに合図して戦地から戦空へ移動した。

もう馴染みの姿となってきた白い翼のセフィラ二人は、初めて会ったときと変わらない様子で浮いていた。

腑抜けた笑みを湛えたコクマと、半分閉じた眠そうな瞼で神官服に埋もれている少女ビナー。

「そろそろ降参したらどうだ？ レメゲトン」

「そういうわけにはいかないわ」

「だがずいぶんお疲れのようだね」

「ご心配ありがとう……もう喋らないでくれる？ あなたと話すのが一番疲れるのよ」

「相変わらず厳しいなあ」

「分かったなら黙って頂戴。こっちもあまり時間をかけてられないの」

それを聞いた優男は肩をすくめるようにしてへらりと笑った。

「マルクト様とケテル様がついている限り時間の問題だね。無駄な事はやめたほうがいい」

それがまたねえさんの癪に障ったらしい。

ぴくりと一瞬頬が引きつったねえさんは、次の瞬間に冷たい空気を纏った。触れれば低温で火傷しそうな極寒のオーラだ。

隣で見えていてぞくりと背筋が冷える。

これは、かなり、危険だ。

頭の中で警鐘が鳴り響く。

「アレイ」

ねえさんのメゾソプラノは絶対零度の冷気を纏っていた。

「これからのことは見なかったことにしてくれるかしら？」

「え？」

思わず首をかしげた自分に、ねえさんは魅力的に微笑んだ。

連続の戦闘で疲弊しきったところに最も嫌うセフィラの挑発

ねえさんはどうとうキレてしまったようだ。

「私はゲオルグⅡファウストの末裔、メファイアⅡラスティミナⅡファウストよ。悪魔のグリモワールと共に歩んできたファウスト家450年の歴史をなめてもらっちゃ困るわ」

ねえさんは背の黒い翼と共に両手を大きく広げた。

一体何が起ころうとしているんだ？！

とにかく驚くような出来事が待っているだろうとしか予想できない。ねえさんがいったい何を始めるのか予想もつかない。

その場を離れようなど微塵も思わなかった。

それより何より体が動かなかったのだ。

「ひひ！ ひひ！ くるぞ！ くるぞ！」

「……ハルフアス？」

頭上に浮かぶこの悪魔が動揺しているところを初めて見た。

その影響か、体が硬直したように動かない。

「すげえ！ すげえ！」

ハルフアスの甲高い声が響く。

コクマとビナーも困惑の表情を隠さずねえさんを見ていた。

ねえさんは妖艶な薔薇色の唇からメゾソプラノの声でとある悪魔の名を呼んだ。

伝説上にしか存在しなかった、最高位の悪魔の名前を。

「メフィストフェレス……！」

その瞬間、戦場全てが沈黙に包まれた。

## SECT・19 メフィストフェレス

一体何が起きているのか分からなかった。

以前巻き込まれたグラシャ・ラボラスの特殊空間とは違う。あの場所は光を失っても音だけは響いていた。それも、これほどの広範囲に広がる事はなかった。

半径数キロにもわたる戦場から全ての音が消え去ったのだ。剣の交わる音も騎馬兵の立てる地響きも、人々の怒号や悲鳴も。

嵐の前に静まり返った世界のように、沈黙がすべてを支配していた。

頭が混乱する。

しかも、先ほどねえさんが呼んだ名は……

「ほほほ 契約以来 初めてですね」

沈黙の中に響いた女性とも男性とも突かぬその声に、ハルファスがびくりとしたのを感じた。

悪魔が恐れる悪魔。

それは幾人も存在しない。

メフィストフェレス リュシフェル、ベリアル、アスタロト、ベルフェゴールなど名立たる悪魔と並び、最高位に位置する中でも伝え聞く昔語り以外での存在が確認されていない悪魔の一人。

年齢も性別も判別できない中性的な顔立ちに薄く笑みを湛えていた。

伝説の通り、漆黒の闇を閉じ込めた色の長いコートを着込んでいる。磨かれた革靴と白い手袋は紛れもなく紳士のものだ。

「お久しぶりです、閣下」

この悪魔の召還と同時にデカラビアの加護が消し飛んだねえさんは背の翼を失っていたが、それでも空に浮いていた。

代わりに現れたこの悪魔の加護だろうか。

沈黙が支配しているこの空間で、ねえさんとその悪魔の声は頭の

中に直接響くような感覚で届いた。

「世界は蠢き 揺らぎ 時に滅します それでもなお 逆らい続けるのですね」

「この世に生を受け大切なものを知った時によやく人は人と成り、世界を愛し、崩壊を防ごうと尽力するのです。それがたとえ戦と言いう形で現れようとも」

「ふふ 幾重にも折り重なる世界の中 一つだけを選ぶのですか 他を捨ててまで」

「人に感情が存在する限り続いていくのです。世の定め、争いも和解も…… 無関心は人としての生を失っています」

いつだったかねえさんは言った。

自分勝手な理由で誰もが大切なものを選ぶのだと。

もし自分がセフィロト国に生まれていたらもっと違う選択をしていたろう。クロウリー家に生まれなかったらレメゲトンになって国の前線で戦う事も大切なものを命がけで守ろうとする事もなかったかもしれない。

しかし、そんな仮定は無意味だ。

既に自分はグリモワール国でアレイスター「ウォルジェンガ」クローリーとして生きている。

ウォルジェンガ「ロータスとして生を受け、いつしか国の中枢に入り、名を変え、騎士を目指すも志半ばで未来を閉ざされた。その後レメゲトンとしてロストコインを搜索し、さらに戦場でセフィラを相手に戦闘を繰り返してきた。

自らの体質のせいで母を失い、姉と新しい家を得た。騎士団での居場所を捨てる代わりにねえさんやじじいと出会った。あのくそガキの存在を知った。

その過去全てが自分を形作っている。

大切なものを決めている。

「世界に興味がないということとはもう生を諦めたということと同義です。世界と関わり、影響し影響され、自分を創りながら人は生き

ていくのですから」

「ほほほ 迷いの無い言葉ですね」

年齢性別共に不明な紳士の悪魔は嬉しそうに笑った。

「私は貴方が好きですよ メフィア 我が名の娘」

「もったいないお言葉です、メフィストフェレス閣下」

ねえさんはいつも迷いない。

揺ぎ無い精神に悪魔は惹かれるのだろう。クローセルも、バシンも、デカラビアも……メフィストフェレスさえも。

それに比べて自分はいつも迷ってばかりだ。それは戦場に来て、敵を眼前にしても変わる事が出来なかった。悪魔の力で一般兵を傷つけるたび心に傷を刻んでいるなどは、絶対に口に出せなかった。嫉妬も何もかも超えた次元で彼女を心から尊敬している。

ねえさんの目の前にいる紳士は目を細めてこちらを見た。

ハルファスではないが、威圧感にびくりと身を竦ませてしまった。

「悪魔の子 黄金獅子の末裔 王族の良心 すべてが揃うということ こそが世界の分岐点なのですね」

「閣下、それは……」

「さて お困りのようですね」

ねえさんが問おうとしたのを分断して、メフィストフェレスは肩をすくめた。

召還者の彼女は問いを諦めて深く頭を下げた。

「はい。ぜひお力添え願います。死霊遣い<sup>ネクロマンサー</sup>ホドの術により多くの兵に被害が出ています。できる事ならば……ホドを見つけ出し、我が軍に勝利と祝福を」

「お安い御用です ほほほ」

メフィストフェレスは不気味な笑いを残して黒い霧へと姿を変えた。

霧はねえさんに纏わりつくようにして吸い込まれ、消えた。

先ほどまで悪魔から発せられていた威圧感がねえさんに移る。ハルファスがひつ、と小さな悲鳴をあげたのが聞こえた。

背後に漆黒の闇色のオーラを纏ったねえさんは凄まじい気を発しながら二人のセフィラを睨みつけた。

「さあ、覚悟なさい。レメゲトンを敵に回すとどうなるか教えてあげるわ」

沈黙の世界の中で。

動きのない世界の中で

メフィストフェレスの特殊空間において動いているのは支配するねえさん、ハルファス悪魔の加護を受けた自分、それに天使の加護を持つコクマとビナーだけだ。

ゲブラ辺りが巻き込まれていたとしたら動いていたかもしれないが、今日手品師の姿は目にしていなかった。

もし他に動けるものがあるとすれば……それは幻想を操っているホド本人に他ならないだろう。フラウス

「メフィストフェレス？ 聞いた事がない名前だねえ」

コクマは、ハルファスすら恐れるメフィストフェレスの恐ろしさがかかっていないのか、まだ挑発するような態度を改めずにへらへらと笑っていた。

ねえさんはそんなコクマに慈悲を掛けるつもりはないようだ。

相手を馬鹿にしたような笑みを張り付かせたコクマと相変わらず眠そうなビナーを冷たい目で見た。

「折角だから教えてあげましょう」

ねえさんの声には抑揚がない。

背筋がゾクリとした。

「メフィストフェレスは魔界でも最高位に位置する悪魔の一人よ。かのゲーティア・グリフィスが魔界の創造主リユシフェルと契約を結んだ折、他の天文学者も悪魔を何人も呼び出そうとしたわ」

ねえさんが言うのはあくまで伝説の中での話　グリモワール建国にまつわる逸話の中でしか語られない物語だった。

「もちろん私の先祖も魔界から悪魔を呼び出したわ。それが、このメフィストフェレスよ」

伝説にしか過ぎないと思っていたそれは、どうやら史実だったらしい。

「クロウリー家にマルコシアスが代々仕えてきたようにファウスト家にはずっとメフィストフェレスがついていたわ。もちろん、表向きは王家に知らせることはせずにね」

含みのある言葉からは、王家がメフィストフェレスの存在を知っていたように思える。

ゼデキヤ王はファウスト家がコイン以外の、しかも最高位に位置するメフィストフェレスを呼び出して使役している事を容認していたというのか。

それでは、グリフィス家がコイン以外の悪魔を呼び出そうとしたというのは本当なのか。

リュシフェルを呼び出したというゲーティア「グリフィスの伝説は真実なのか。

頭の中が混乱する。

「私も15になると同時に契約したわ」

ねえさんは静かにそこまで言うのと、どこからかナイフを取り出した。

そしてその刃を黒いドレスの上に滑らせる。

「！」

鋭い刃は黒い布を引き裂き白い肌を露にした。

布の裂け目から見える腹部に、漆黒の魔方陣が鈍い光を放っている。見た事のない悪魔紋章が刻まれたそれは、時折くそガキの額に現れる印に酷似していた。

「これが私の6人目の悪魔」

ナイフを捨てて、ねえさんは慈悲の欠片もない表情を向けた。

「刻ときの悪魔メフィストフェレスよ」

そこでようやく、先ほどこの空間に飲み込まれてからずっとわだ

かまっていた違和感の正体がようやく分かった。

眼下に広がる戦場は、ピクリとも動いていない。

音がなくなっただけではなく、幻想<sup>フラフス</sup>を含めた全ての兵隊の動きが止まっていたのだ。

「もう茶番は終わりよ。さようなら、セフィラ」



SECT・20 コクマ

「茶番？ それはこっちの台詞だよファウスト女伯爵。ホド様の加護があれば負けることはないのさ」

「その口を閉じなさいといったのよ、コクマ。もうあなたの顔も見たくないわ」

ため息をつかんばかりの勢いでねえさんが言い放つ。  
目が据わっている。

これまでセフィラや幻想たちを相手にしてきた時とは雰囲気フラウスが全く違っていた　まさしくねえさんはキレていた。

我慢を重ねていた感情が一度に爆発したかのように、それも内側に全て収束してしまったかのように凄まじいオーラが内面から迸っている。

「あなたたちの国では別れる時何ていうのかしら？」

「古代語かい？ V - A - L - E……ウアレ、と言うよ。お元気でという意味もある」

「そう」

ねえさんはにこりと微笑んだ。

最後に向ける微笑だった。

「ウアレ、コクマ」

ねえさんの細く長い指がセフィラに向けられた。

自分は何も出来ずただそこにいた。ハルファスも珍しく黙り込んで成り行きを見守っている。

派手な立ち回りで民衆の注目を集めるクロウリー家。伝説の名をほしいままにして絶対的な支持の揺るがないグリフィス家。決して表舞台には出ず、だがしかし最高位の悪魔メフィストフェレスを役してグリモワール王国を影から支えてきたファウスト家。

代々レメゲトンをつとめてきた3つの公爵家はそれぞれの形ですつとグリモワール王家を守ってきたのだ。

ごくりと唾を飲んだ。

これからのことは見なかったことにしてくれるかしら、と言ったねえさんの言葉をようやく理解した。

時が停止した今、自分は唯一の目撃者となるのだ。

「ふふ、まずは印がどこにあるのかを探さないかね」

ねえさんはセフィラに向けた指を軽く振った。

それだけで二人ともピクリとも動かなくなる　まるでそこだけ時が止まったかのように。

「コクマは上半身になかったわよね。足のほうかしら？」

ねえさんは躊躇なくコクマに近づいていき、どこから取り出したナイフを閃かせた。

皮膚は全く傷つかず、一瞬で神官服のみが切り裂かれた。

現れたコクマの大腿を見てねえさんはにこりと微笑む。

「そう、ここにあったの」

もし少しでも時が動いたならば、確実にこの場を離れるか、そうでなくとも表情は歪むか青ざめるかしていただろう。

しかし、それすらも許さないメフィストフェレスの時の支配は絶対だった。なすがまま、されるがままにコクマは天使の印を晒してしまっていた。

「印を失ったセフィラはどうなるのかしら？　就任する時に記憶を消すといっていたわね。セフィラになる以前の記憶が戻るのかしらそれとも再び白紙に戻るのかしら」

妖艶に微笑んだねえさんはコクマの印に細い指で触れた。

触れそうなくらいに顔を寄せ、耳元で囁く。男を奈落へ誘う甘美な響きは酒のように中毒性を持ち、酔わせ狂わせる。

脳髓からしびれるような甘い誘い。

「次に会うときはどんな姿になっているか楽しみね。もう少しいい男になったらお相手するわ」

メフィストフェレスの加護を受けたねえさんは、分かれの台詞を甘く囁いて軽くコクマの顎をなげた。

艶美な仕草にどきりとする。

そこにいるのはレメゲトンの長ファウスト女伯爵でもくそガキの育て親ミーナでもない、ただメフィアと言う名を持つ女性だった世界中の男を狂わせる事が出来る極上の美女。

「G-O-O-D B-Y-E」

それはグリモワール国の古代語で、『さようなら』。

コクマの大腿に触れたねえさんの指が薄く光を放ち、天使の印を消し去ってしまった。

それでもコクマはピクリともしない。

しかし、背の翼は完全に消失した。

「……！」

ほんの一瞬の出来事だ。

ねえさんがメフィストフェレスを召還して、時を止めた。ただそれだけでこれまで苦戦していたコクマからあっさりと天使の加護を引き剥がしたのだ。

あまりの出来事に呆然としていた。思考がうまく働かない。体もうまく動かない。ハルファスも声を漏らさずじっとしていた。ところが、そこに初めて聞く声が響いた。

「コクマ」

鈴のなるように愛らしい声。

呆けたように放たれたそれは幼い少女のものだった。

その声の主に向かってねえさんが微笑む。

「時の支配を破るなんて、やっぱりコクマよりあなたの方が強いよね……」

その先にあるのは神官服に埋もれて空に浮かんだ少女の姿だ。

「ビナー」

半分閉じた瞼はこれまでと変わらなかったが、愛らしい唇が微かに動いていた。

ほんの少し首を傾げているのが小さな悲しみの芽生えを感じさせた。

「それでも私の敵じゃないわ。怪我しないよう大人しくなさい、ビナー。いい子ね。分かるでしょう？」

記憶を剥ぎ取られた代わりに天使の加護を穿たれた彼女に、グリフィスの末裔を投影していたのかもしれない。ねえさんは幼い子に語りかけるような口調になった。

しかしビナーの名を授かった少女は答えることなく隣で時を止めた男性の名を呼び続けた。

「コクマ……コクマ」

確認するように、返事を待つように繰り返し名を呼ぶ少女の背後に理解の天使ザフィケルが出現した。慈愛に満ちたその天使はビナーを守るように大きな羽根で包み込んだ。

「ザフィケル。コクマも一緒に」

既にねえさんによって知恵の天使ラジエルの加護を失ってしまったコクマはもはやコクマではない。閉ざされた時の中で硬直し、空に浮くのは名も持たぬ一人の人間だ。

それでも少女はコクマと呼び、共に帰ろうとしている。

加護を失った元セフィラの居場所などセフィロト国には存在しないだろうに。連れ帰っても処分が待っているだけだろうに……

胸が痛んだ。

また自分は要らぬ傷を心に負ったようだった。

が、その時、ザフィケルから光が放たれた。

強烈な光線に一瞬目がくらんで思わず目を閉じた。

しばらくしておそろおそろ目を開いたとき、広がっていたのは信じられない光景だった。

「なっ……！ そんなばかな！」

目を疑った。

なぜならこれまで戦場だった場所が突如として薄汚い街の片隅へ

と変化していたのだから。

空を隠すように両側に立ち並ぶレンガ造りの建物。馬一頭が通ればいっぱいになってしまふような狭い道。その道の両端にはみすばらしい布を体に巻いた人々が建物の壁に寄りかかっている。

隣にいたはずのねえさんはおらず、またコクマとビナーの姿もなかった。背後にいたはずのハルファスの姿もない。

太陽の光が届かないために薄暗く陰気くさいその場所に自分は一人佇んでいた。

「ここは……」

記憶の片隅が刺激された。

微かだが覚えている。

懐かしい名前が想起する。

ふと自分の手を見ると、剣を握っていた形跡のない綺麗で小さな手があった。手首のコインも消失している。

ぼろのような服を纏い、裸足の足は土で汚れていた。

「王都ユダ城下の裏街通りじゃないか……」

そう、自分が５歳まで育てられた場所だった。

## SECT・21 過去へノ旅

ゆつくりと歩を進めた。

道の端にうづくまるボ口雑巾のような人々に触れないよう慎重に細い道を進んでいった。

地面の感触が直に伝わってくる。凍える寒さがなく、しかし焼けるような暑さもないということは秋か春なのだろう。ほんの少しだけ冷やりと乾燥した空気から秋ではないかと予測した。

ずっと上に見える空の色はきつとそろそろ夕方だ。かつてはそんな風にして細い隙間に見える空の色で天気と時間を知る生活をしていた。

舗装もされていない土の道はどこまでも続いている。

それでも微かな記憶を頼りにいくつかの角をまがり、同じような景色の中を進んでいった。

しばらく行くと袋小路に突き当たった。

その最奥にうづくまる人影がある。

「キイじい」

勝手に自分の口から声が漏れた。いつの間にか自分の声でなくもつと幼く高い声に変わっていた。

その声に反応して人影が顔を上げる。

「おお、ウオルか」

顔中が白い髪と髭で覆われている小さな人影はよっこいしょ、と掛け声をかけて起き上がった。

髭だらけの小さな老人はそのまま壁にもたれかかるようにして座り込む。

「元気にしておったか」

ああ、思い出した。

この人は自分の名付け親だ。

どこか遠くの国から商人としてやってきたが事業に失敗し国に帰

る金もなくしてしまった異国の老人だ。昔取った杵柄で教養深く、またなぜか自分と母リリア「ロータスに目をかけてくれていたのだ」  
った。

しかしながら、自分はどうしてこんな場所にいるのか。この体は5歳以前の自分なのか。本当にここは王都ユダの裏街通りなのか。もし全部が本当だとしたら、いったい何が起こったのか。

ねえさんはどこへ？戦場でメフィストフェレスを召還し、コクマの加護を引き剥がしたばかりだったのに。ビナーは？そうだ、この景色の直前、理解の天使ザフィケルの光に包まれて……  
とにかく混乱していた。

「俺はいつたい……ここは？」

「何を言っておる、自分の庭のような場所だろうに」

目の前のキイじいは髭の奥で微笑んだ。

封印していた過去を少しずつ開封していく。

身売りをしてまで自分を5つまで育て上げてくれた母は、仕事の間いつも自分をキイじいのところへ預けていった。キイじいの話を聞きながらいつしか眠りにつき、そして朝日と同時に迎えに来る母と一緒に小さな家に帰るのが常だった。

裏街通りに住む器量のいい娘が貴族のところへ奉公し、拳句孕まされて捨てられた。もちろん彼女に家族と呼べる者たちはいない。いるならとくに裏街通りからは抜け出している。

土道の片隅に住む者たちが家族のようなものだ。

思い出したことで何となくほっとしてキイじいの隣の壁に腰掛けた。

すると彼は嬉しそうに微笑んでいつものように生まれ故郷の話をしてくれた。

キイじいの故郷では悪魔の代わりに『龍』というモノが崇められていたらしい。4匹の龍はそれぞれ光、水、炎、闇を司っており、4つの部族がそれぞれ加護を受けていたのだという。

「お前さんの名はわしの国の守り神から貰ったんじゃ。水を統べ、

理性を司る壮麗な『水龍』という妖魔の真実の名じゃよ。この国で言う悪魔のようなものじゃ。国中から崇拜されておった」

これはキイじいが何度も何度も繰り返した言葉だった。

聞いてもいないのに懐かしそうに故郷の国で崇めていた『龍』というモノの話をするのだ。

「ウォルジェンガ、お前はきつと強い騎士になる。何しろその名を持つ水の龍は軍神じゃからな」

満足そうに笑うキイじいはきつと自分自身が故郷に恋焦がれていたのだろう。いつか帰りたいと願っていたのかもしれない。

ずっと昔、光を司る龍と闇を司る龍の対立が生じた。それによって引き起こされた妖魔たちの全面戦争により闇の龍は消滅したのだった。ところがそれから何百年も経った頃、消滅したはずの闇の龍が復活してしまう。その暴走を食い止めたのは光の部族に生まれた金の瞳をもつ少年だった

そんなお伽話を聞きながら、自分は夢の中へと誘われていくのだ。夢の中では今は見ぬ想像上の『龍』の姿と、いつしか憧れるようになった墮天の悪魔リュシフェルの姿を描いた。壮大で流麗な彼らを想像しながら眠りに落ちていく。

それはとても幸せな眠りなのだった。

「ウォル」

澄んだ声が路地裏の袋小路に響いた。仕事で明日の朝まで帰るはずのない母の姿がそこにはあった。肩まで流れるストレートの黒髪と晴れた日に建物の隙間から見える空のように澄んだ蒼い瞳。

記憶の中にあるままの母だった。

自分の喉から嬉しそうな声が漏れる。

「かあさま」

深窓の令嬢のような儂い魅力を持つ母はとも5歳の子がいると思えないほど美しかった。折れそうに細い腕を広げて待つ母リリア  
「ロータスの胸に飛び込もうと幼い足は裸足で地を蹴る。」



が、寸前で思いとどまった。

5歳の自分とは違う。今はもう知っている。

自分に流れる悪魔の血が今この瞬間も母の体を蝕み続けている事を……

足をすくませて立ち止まった自分に母は不思議そうな笑みを向ける。

「かあさま、ごめん」

「どうしたのウォル」

健康とはいえないほどにやせ細った手首が袖からのぞいている。いつも優しく抱きしめてくれる母は、その度に毒気を大量に浴びていた。ほとんど耐性のない母は自分を身籠った時から少しずつ少しずつ死へと近づいていったのだ。

「いらっしやい、私のかわいいウォル」

伸ばされた腕から逃れるように一歩後ろに下がった。

今だから分かる事がある。

もしかすると、クロウリー家に足を踏み入れる直前急死したキイじいも

「来るなっ！」

悪魔の血は周囲の人間を確実に蝕んでいく。自分の意思とは関係なく、相手の意思も関係なく。

大切な相手だからこそ触れてはいけない。そう学んだのはクロウリー家に引き取られてからの話だった。その時にはもう遅すぎた。強い言葉で拒んだ自分を不思議そうな目で見つめる母。

目の端が潤んだ。

この体はまだ泣く事を忘れてはいないようだ。

「ウォルジエング、一体どうした。ちゃんと理由を説明しなさい」  
「近寄るなあっ！」

喉の奥から搾り出すようにして叫ぶ。

甲高い子供の声は静かな裏通りによく響いた。

握り締めた拳が震えて、視界が滲んでいく。鼻の奥がツンと痛く

なつて瞼が熱くなった。頬を冷たい雫が伝っていった。

もうほとんど忘れかけていた感覚だった。

最後に泣いたのはいつだっただろうか。

拭うのも忘れて大きく目を開いて二人を見た。

5歳の自分の世界全てだった二人を

「アレイツ！」

頭の中に響く鋭い声が記憶を引き裂いた。

新しい名は自分を古い記憶から引きずり出した。

薄暗い裏街の景色がぐにやりと歪んでいく。母の顔もキイじいの

髭も夢のように消えていく。触れてはいけないと思ったはずなのに、

消えていく二人に思わず手を伸ばしていた。

が、小さな手が二人に届く事はなかった。

気がつけば、目の前にはまた戦場が広がっていた。

## SECT・22 加護ノ終ワリ

戻ってきた現実世界で、ねえさんの金の瞳に貫かれた。

「ザフィケルの幻覚なんか飲まれないで頂戴。気をしっかり持っていれば幻覚は見ないはずよ」

「あ、ああ……すまない」

ぼんやりとした頭であたりを見渡すと、先ほどと景色は変わってなかった。

メフィストフェレスの加護を受けて凄まじい気を発するねえさんと、それに相對する理解の天使ザフィケル、完全に時を停止し、知恵の天使ラジエルの加護を失ったコクマ。

先ほどまでの光景は天使ザフィケルが見せた幻影だったらしい。隣のねえさんはため息をつかんばかりの勢いで言い放った。

「とにかく涙を拭きなさい。情けない！」

「！」

しまった、先ほどの光景は夢ではなかったのか？

慌てて頬に伝った涙を拭いたが、ねえさんの声が追い討ちをかけた。

「それから、マザコンは嫌われるわよウォル。かあさま、かあさまって……いい加減親離れしなさい！」

恥ずかしさに顔が熱くなった。

「まあ、でもこのことはラックには内緒にしてあげるわ。感謝なさい」

また一つ弱味を握られてしまった。不覚だ。一生ねえさんには逆らえない運命なのかもしれない。

そう思っただきなため息をついた。

妖艶な笑みでなく、いつものように不敵な笑みを浮かべたねえさんはもう一度ビナーに指を突きつけた。沈黙の戦場に広がる空の中

で、最後の勝負を決めるつもりだろう。

逃げようとぴくりと動いたビナーだったが、力の差は圧倒的なよ  
うだ。

そのまま硬直して動かなくなった。

ああ、これでやっとコクマとビナーと幻想を<sup>フラウス</sup>ひたすら相手にして  
いた戦いが終わる　　妙に安心した気分だった。

数での攻めは思った以上に体力も気力も消費していた。これ以上  
続けば自分たちだけでなく、『<sup>アウェイク</sup>覚醒』の面々にも負担がかかりすぎる  
だろう。

この二人から支配を引き剥がし、死霊遣いホドのみを集中して相  
手にする必要があった。

「ごめんなさいね、ビナー。可哀想な子」

ねえさんにはまるでビナーの加護印の位置が最初から分かっている  
ようだった。迷うことなく少女の右肩に手を当てた。

コクマに対する態度とはあまりに違いすぎる。

「もしもう一度会えるのなら……」

その先にねえさんは何を言おうとしていたのだろうか。

静かに目を閉じたねえさんは、とん、とビナーの肩を叩いた。

ビナーの背後にいたザフィケルが消失した。

悲しそうに佇むねえさんに声をかけられずにいた。

15歳で最高位の悪魔メフィストフェレスと契約するのは並大抵  
のことではなかっただろう。この女性はいったいどれほどの重圧に  
耐え、責を負ってきたのだろう。

計り知れないその人生の一端を初めて垣間見た。

「あとはホドね」

そう言っただけ顔を上げたねえさんはいつもの表情に戻っていた。

「でも、少しだけごめんなさい。慣れないことをしたものだから…  
…少し疲れたわ」

肩をすくめたねえさんからメフィストフェレスの重圧が消えていく。

蒸発するように悪魔の加護が霧となって立ち上り消失していった。

「アレイお願い、この二人を」

それでも心配するのは自分のことではなかった。今倒した敵の事

大切なものを選びなさいと言い、情の欠片もない攻撃で二人のセフィラから天使の加護を引き剥がしたというのに。

ぐらりとねえさんの体が傾くと同時に、戦場の音が舞い戻ってくる。

圧倒的な力を見せたレメゲトンの長は、加護を失って落下した。

「ハルファスっ！」

慌てて叫ぶと、風が駆け抜けた。

時が動き出して重力に逆らわず地面に向かうセフィラ二人の体をも包み込んだ風は、戦場を吹き抜けるにはあまりにも優しすぎる風だった。

「ひひ！ ビックリした！ まさか あいつ来るなんてな！」

甲高い声にはまだ動揺が隠しきれていない。

自分もまだドキドキしていた。

伝説だと思っていた最高位の悪魔メフィストフェレスが召還され、その力を目の当たりにした。まさしく歴史上ただ一人の目撃者となった。

「ねえさんは……メフィストフェレスは一体どうやって加護を引き剥がしたんだ？」

「ひひ！ あいつは時間を狂わせる！ あの女 触っただろ！ 時間が巻き戻ったんだ！」

そうか。ねえさんは時間を操り、セフィラが印を持つ前まで時間を戻したのだ。

動き始めた戦場からは変わらず地鳴りが響いている。

今この瞬間、時が止まり二人のセフィラが加護を失った事など誰

も気づいていないだろう。

しかし、メフィストフェレスの力の及ぶ以外の場所ではちゃんと時間が動いていたらしい。気づかぬうちに太陽はかなり西に傾いていた。

このままいつまでも空にいるわけにはいかない。3人を運ばねば。

「ハルフアス、とりあえず皆まで頼む」

「ひひ！ 分かった！」

ハルフアスの操る風に乗せて、3人をトロメオのシェフィールド公爵家に運んでいった。

セフィラ二人の扱いは、迷ったが一応鍵をかけた部屋に閉じ込めておく事にした。

ガネット

炎妖玉騎士団に属する若い騎士二人を見張りにつけ、自分はフォルス団長の元に向かうことにする。今回の事を報告せねばなるまい。日が沈み、セフィロト軍は退いていったのだろう、フォルス団長はすでに屋敷に戻ってきていた。

フォルス団長の隣には補佐のフェルメイがいた。この二人は常に共に行動しているらしい。

「おお、ウォル。無事だったか！ ファウスト女伯爵が怪我を負ったと聞いたのだが、大丈夫か？」

「ファウスト女伯爵は悪魔の力を多用したために疲労で休んでいるだけです。ご心配には及びません」

とは言っても、メフィストフェレスの力を使う時に彼女にかかる負担を考えると長い休養が必要かもしれない。しばらくは自分ひとりでセフィラを相手にしなくてはいけないだろう。

「そうか！」

「フォルス団長、そのファウスト女伯爵が二人のセフィラを捕縛しました」

「なに?!」

団長は大きく目を見開いた。

隣のフェルメイも驚いた顔をしている。

「現在天使の力の加護を失ってこの屋敷内で軟禁してあります。天使の加護がない彼らはただの人間です。今は炎妖玉騎士団のラストイとブランチに見張りを任せてあります」

「レメゲトンというのは、本当にすごいな」

団長は驚いた表情を隠そうとしてもしていなかった。

サブノックの剣を持ち、実際にセフィラと戦闘した事のあるフォルス団長だからこそ言葉だった。天使や悪魔の加護があるのではないのでは身体能力が絶望的に違う。加護のない状態では普通の人間でも、加護持ちのセフィラというだけでその戦闘力は一般兵何十人分にも相当する。

「すべてファウスト女伯爵の功績です。彼女は本当に……最高のレメゲトンです」

心の底からそう思う。

「ではセフィラは私たちにお任せください。ファウスト女伯爵にはしっかりと休養をとっていただきたい」

「ありがとう、頼むぞ、フェルメイ」

「はい」

にこりと笑ったフェルメイとフォルス団長に軽く礼をしてその場を離れた。

ねえさんの休む部屋に入ると、アリギエリ女爵が待っていた。

「ねえさんは？」

「今はお休みになられています。外傷はありませんが、かなり疲労が溜まっているようです。一度ゆっくり休養をとられるべきだと思います」

「やはりか……」

コクマ、ビナー、ホド、幻想兵……

次々襲ってくる敵をほとんど一手に引き受けていたのだ。それは

仕方のないことだろう。

「それからクロウリー伯爵、王都から伝令が入っています」

「王都から？」

ゼデキヤ王からの書簡だろうか。もしくは姉上からの個人的な手紙か、または父上から帰ってこいという命令だろうか。

ところが、その予想はどれも違っていた。

「フォーチュン侯爵からです」

「義兄上から？」

なんだろう。

「クロウリー伯爵とファウスト女伯爵に向けた書簡です。ミス・グリフィスのことについてのようですが」

「?!」

心臓が跳ね上がった。

何かあったのだろうか。

震える手でアリギエリ女爵から書簡を受け取った。



## SECT・23 遠き知ラセ

手紙の内容は驚くべきものだった。

義兄上が団長を務める漆黒星騎士団に所属するの少年騎士が、新たなレメゲトンが就任した事。その少年が第14番目の悪魔レラージユとの契約に臨み、失敗して暴走した事。そして、あのくそガキがたった一人で悪魔の暴走という最悪の事態を収めたという一連の事件についての記述だった。

「新しいレメゲトン？ 聞いていないぞ」

「一週間ほど前に王から直接の伝令が来ていました。ただ、お二人ともお疲れの様子だったので報告は避けていました」

「それは……すみません」

アリギエリ女爵の言葉に返す術はなかった。

確かにこここのところの自分たちはそんな余裕などなかっただろう。余計な気を回させてしまったことが申し訳ないと思った。

「どんな人間なんです？ その新しいレメゲトンは」

「今年騎士団試験に合格したライディーン<sup>からす</sup>シンという少年騎士です。そのため部隊配属前の鴉に所属しますが、剣の腕はクラウド<sup>からす</sup>フォーチュン騎士団長の折り紙つきと聞きます。ミス・グリフィス<sup>からす</sup>がその才能を見つけ出し、ゼデキヤ王に進言したとのことですよ」

「今年騎士団試験に合格と言うとまだ15か」

「ねえさんがメフィストフェレスと契約したのも15の時だと言っていたな。」

しかし契約に失敗し、ひいては暴走させるなど、まだまだ未熟な証拠だ。ゼデキヤ王の勘が鈍ったのだろうか？

手紙には、千里眼やフラウロスの炎、最近覚えた古体術の空手などを駆使して新しくレメゲトンになった少年の命を救った様子がまるで見てきたように克明に記されていた。どうやら義兄上も戦闘に参加したらしい。

読み終わった後には、驚きに声が出なかった。

第14番目の悪魔レラージュは『破壊の悪魔』という別称を持つ、戦闘を好み躊躇いなく人を傷つける恐ろしい悪魔だ。その強さは生半可なものではなかったはずだ。

それを収めたというのか？ たった一人で？

確かに自分もねえさんも今は戦場において、王都で何が起きていてもどうする事もできない。王都に残留した中で唯一暴走した悪魔レラージュと張り合えるとしたらアガレスとフラウロスのコインを所有するあのくそガキだけだろう。

義兄上の手紙は、あのくそガキが順調に成長していることを讃え、戦場に出る日も近いだろう、という言葉で結んであった。

なんともいえない感情が胸中を駆け抜けた。

アリギエリ女爵は優しく微笑んだ。

「ミス・グリフィスはお元気そうですね。頼もしい限りです」  
「……」

それと裏腹に、胸を裂くような痛みが襲った。

新しいレメゲトンの实力は分からないが、破壊の悪魔レラージュと戦闘して無事でいられるはずがない。

あいつはまたひどい怪我をしたんだろうか。銀髪のセフィラに連れ去られたときのように、ねえさんをセフィラから救出したときのように

今すぐに王都へ飛んで帰りたい衝動にかられた。

あいつはまた泣いていないだろうか。辛い目に遭って肩を震わせていないだろうか。心に受けた傷を誰にも言えずに隠してやいないだろうか。

「大丈夫ですか、クロウリー伯爵。お顔色がすぐれないようですが」  
「あ、ああ……」

心配をかけないようと思ったが、きっと表情はこわばったままだったろう。

それでもアリギエリ女爵は何も聞かずにいてくれた。

どうして傍にいてやれないんだろう、と何度も繰り返した問いをもう一度繰り返す。

もう数回は読み返した手紙にもう一度視線を落とした。

アガレスの召還による身体能力の向上、フラウロスとの悪魔同時召還、剣技での応戦と炎による束縛、それに千里眼　グリフィス家の末裔は恐ろしいほどの速度で進化していく。

ほんのしばらく会わないだけで。

「ラックのことでも考えてるの、アレイ？」

突然部屋に響いたメゾソプラノにびっくりとした。

ベッドを見下ろすと金目の猫がイジワルそうに微笑んでいた。

上体を起こすとストレートブロンドが頬にかかった。今まで気づかなかったがねえさんは少し痩せたようだ。顔色もかなり悪かった。それでもいつものように微笑を浮かべるねえさん。

「あなたでも寂しそうな顔するのね。初めて見たわ」

その言葉には答えず、黙って義兄上からの手紙を渡した。

ねえさんは一瞬首を傾げたがすぐに読み始める。その表情は真剣そのものだった。

「新しいレメゲトン……ゼデキヤ王も思い切ったことをなさったわね。賭けにでも出たのかしら？　珍しい」

「今年騎士団試験に合格したばかりの少年騎士で、名は……ライディーン」シンとアリギエリ女爵が言っていた」

「ふうん。珍しい名前ね。異国生まれかしら？」

「詳しくは分からない。が、剣の腕はかなりのものらしい」

「あら、あなたと一緒にね」

「契約に失敗した挙句悪魔を暴走させるような15のガキと一緒にしないでくれ」

「ふふ、ごめんなさい」

ねえさんは楽しそうに笑った。もうずいぶん回復しているような振りをしているが、本当なら体を起こしているだけでも辛いはずだ

った。

でも、ねえさんは絶対にそんなところ見せようとしないう、見せたくないと思っっているだろう。

せめてこの場を早く離れよう。

そう思っただが、ねえさんがどこか悲しげに呟いた言葉に思考が停止した。

「でも、心配ね。ひどい怪我してないかしら？ 辛い事があつて泣いてやいないかしら」

自分と同じだった。

「どうして私たちはあの子を放つてこんなところで戦っているのかしらね」

それは自分も聞きたいことだった。

王都なら戦場よりずっと安全だと思っっていたが、それは間違いだったようだ。

守るためにはやはり傍にいない必要があるのだろう。どんな場所であつたと隣にいれば手を差し伸べてやれるし盾になつてやる事もできる。

遠くはなれた今はそれが出来ない。

「こつやつて遠くで祈る事しかできないなんて……」

ねえさんが自分の心の内を代弁してくれた。

それだけで心の中が軽くなつたような気がした。

だから思わずこんな言葉を発していた。

「あのくそガキなら大丈夫だ。あいつは一度や二度挫けても、ちゃんと立ち上られる。あいつは、強い、から」

そう、見守る側が切なくなるほどにあいつは強い。

勝手にグラシャ・ラボラスを呼び出してティファレトを退けた時も、知らないうちにゲブラを床に沈めるほど実力をつけていた時もそうだった。今回も誰もいなくともたつた一人で破壊の悪魔レジャーに乘つ取られたレメゲトンの少年を助けてしまった。

迷つていたかと思えばいつの間にか道を見つけ出してしまふ。弱

そんな形をしておきながら誰よりも圧倒的な力を使役する。

鳥頭の阿呆のくせによく分からない場面で本来の鋭さを発揮する。あいつははつきりと『強くなりたい』と言った。だから大丈夫だ。ねえさんは驚いたように目を丸くして、しかし次の瞬間にははじけるような笑顔を見せた。

「ふふ、でもそれって少し寂しいのよね。本音を言ってもうちよつと頼って欲しいのよ。ね、そうなんでしょ？ アレイ」

「知らん！」

凶星を疲れて思わず声を荒げてしまった。

ねえさんには何もかも見透かされているようで得体の知れない怖さがある。

「セフィロトもこの屋敷内にいる。若い騎士に見張りを頼んであるが、処分はフォルス団長に一任した。アリギエリ女爵によれば命に別状はないそうだ」

「そう、ありがとう」

ねえさんは金の瞳で笑う。

これ以上何か言われる前にさっさと退散することにしよう。立ち上がって部屋を後にした。

今晚もサブノックと会わねばならない。今日は誰の番だったろう？

玄関ホールで佇んでいると、フェルメイに連れられて見覚えのある姿が歩いてきた。

「ウォル先輩っ！」

獵犬のような瞳の元少年が抱きついてくる前に押し止めて、軽くため息をついた。

悲しそうな顔をした獵犬は見なかったことにする。

「フェルメイ。炎妖玉騎士団は人手不足なのか？」

「いえ、そういうわけでは……ルーパーはいまやリーダー候補の筆頭です。悪魔耐性もありますし、『覚醒』のメンバーとしては妥当

な選出だと思ったのですが」

「へへ、オレけっこう強いんすよ！」

嬉しそうに笑うルーパースは、3年前から体格以外に変わったとは思えない。見上げていたのが同じ目線になって、勢いよく飛びつかれたらおそらく支えきれないだろう大きさになって、声のトーンが少しばかり低くなった。

しかし、中身はいまだに変わっていない。どんなに遠くにいても駆け寄ってくるし体格を無視して飛びつこうとするし……

だがフェルメイが選んだのなら確かだろうか？

「ルーパース、ウォル先輩を困らせるなよ?!」

「分かってますよ、部隊長。オレがウォル先輩を困らせるわけじゃない」

既に困っているのだが。

とは言えない……言えない。

大きなため息をつく、諦めてルーパースを第43番目の悪魔サブノックに会わせてみる事にした。

## SECT・24 理解

次の日にはサブノックの鍛えた武器が届いた。

どうして彼はルーパースを認めたんだろう……いまだに信じられない。

「うわああ！　かつこいいい！！」

武器の悪魔サブノックがルーパー스에与えたのは、見上げるほどの長さを持つ槍<sup>ランス</sup>だった。円錐形の部分まであわせると3メートル近くあるだろう。

ところがルーパースはそれを軽々と振り回した。

とてつもない腕力だ。フェルメイの推薦もあながち間違いではないようだ。

だが……

「こんなに狭いところで振り回すんじゃない！　迷惑だ！」

「うあ、すんません！　つい嬉しくて……」

ルーパースを怒鳴る事にもうなんの躊躇いもなくなっていた。

とにかくこいつは中身がガキっぽい。声は大きいし、隙あらばすぐ抱きついてくるし……いつまでも自分が15歳の少年だとも思っているのだろうか？

それがどこか王都においてきたグリフィス家のガキを思い出させる部分があつて、わけもなく苛々するのだった……そういえば年も一緒だな。

またどうでもいい共通点に気づいてしまつて大きくため息をついた。

ノックして部屋に入ると、ねえさんは既に戦闘準備を整えていた。これまではずっとレメゲトンの正装で戦場に出ていたのだが、今日はかなり違っている。

短いタンクトップとアーミーショートパンツ、丈夫そうな編み上げのブーツ。まるで女盗賊のような格好だった。髪も邪魔だったのかアップにして結い上げてある。

黒のマントを羽織って全体を隠しているが、動くと腹部の白い肌に刻まれたメフィストフェレスの刻印が見え隠れする。大腿部にはベルトでナイフが幾つも括りつけてあった。

皮のグローブを装着し肩当てを装備しているが、他に防具は見当たらない。

機動性のみを重視して服を選んだようだ。どこかあのくそガキの普段着に似ているのは、あいつの服を選んだのがねえさんだからだろうか。

に、しても少々露出が過ぎると思う。できれば並んで歩きたくない。

「昨日はありがとう。おかげでずいぶん休めたわ」

「まだ休んでいた方がいいんじゃないのか？　かなり疲労が溜まっているとアリギエリ女爵が言っていたが」

「休んでる暇なんてないわよ。コクマとビナーがこちらに落ちた今、ホドとゲブラ……もしかするとケテルやマルクトが台頭してくるかもしれないのよ。戦闘能力はあの二人と比べ物にならないでしょうね」

「……だからそんな格好になったのか？」

頬を引きつらせながら問うと、ねえさんはにこりと微笑んだ。

「ただの趣味よ」

返答できず絶句した。

別に見苦しくはない。むしろすれ違う男なら振り返るだろう。だが……

大きくため息をついてうなだれた。

「あなたも服、変えたら？　どうせ物理攻撃を受けることなんてないでしょう。動きやすい方がいいわよ。見繕ってあげましょうか」  
「いや、いい」



「髪だけでも括らない？ それとも切る？」

「遠慮しておく」

もう一度大きなため息をついて、くるりと背を向けた。  
するとねえさんは不思議そうに聞いてきた。

「でも何故髪を伸ばしているの？ 邪魔するように」

「特に意味はない」

「嘘。ラックじゃあるまいし、意味のないことはあまりしたがらないじゃない。」

「……」

何もかもお見通し、か？

しかし答える気はなかった。半分意地のような、くだらない理由だったからだ。

「願掛けかしら。それとも誰かと約束したの？」

「違う」

このままいくと自分は一生髪を伸ばし続けなくてはいけないことになるが、それもまあいいかと思う。人生の一つの軌跡として受け入れよう。

「教えてくれたっていいじゃない」

「言つべきほどの事じゃない」

「あらそ。頑固ねえ」

そう言つとぼん、とねえさんの手が肩に触れた。

「さ、行きましょ。私たちもラックに負けてられないわ」

「……そうだな」

遠い王都で一人奮闘するあいつに負けぬように。

自分も進化し続けていかななくてはいけない。

コクマとビナーを失ったせいなのか、そこから数日間セフィロト  
国は音沙汰なかった。

それが恐ろしくもあったが、疲弊しきった対  
フラウス 幻想部隊 『覚醒』  
アウエイク  
にとつてはいい休養となったのも事実だった。

その間に装備を整え、カーバンクル奪還の準備を始めねばならなかった。

密偵調査により、軍が配置されている位置はだいたい分かっていた。ただ問題は未だ死霊遣いホドの容姿すら分かっていない事で、彼の位置を掴むのが最重要課題だった。

フラウス  
まず幻想兵を何とかしない限り、グリモワール軍に勝ち目はないだろう。

メフィストフェレスなら一瞬で見つけ出して機能停止させるかもしれないが、召還には相当な気力と体力を消費してしまう。つい先日召還したばかりでもう一度、というのはねえさんの身が危険だった。

何より、表向きは刻の悪魔<sup>とき</sup>の存在は王家ですら知らないということになっているのだ。無闇にさらすのが危険であることに変わりなかった。

そうすると、現在自分たちが天使に対抗できる手段はねえさんが使役する重力の悪魔バシンと翼の悪魔デカラビア、それに自分の戦の悪魔ハルファス。アリギエリ女爵は攻撃系のコインを持たないため、あとはフォルス騎士団長やフェルメイなどを筆頭に12人まで増えた対<sup>フラウス</sup>幻想部隊<sup>アウェイク</sup>『覚醒』<sup>アウェイク</sup>だけだった。

「まだ早いわ。カーバンクルまで防衛ラインを戻すときは、せめてホドを倒してからでないと無理よ」

ねえさんはきっぱりと言った。

円卓を囲むようにして並んだのはフォルス団長、クライノ<sup>アンバー</sup>カルカリアス琥珀騎士団長、途中合流した輝光石騎士団長のサンアンドレアス<sup>ダイヤモンド</sup>、ヴァルデイス卿、そしてその補佐がそれぞれ1名ずつと兵団の代表が2名。

自分たちレメゲトンを含めて11人だけで行われる首脳会談の場でのことだった。

「死霊遣いなど、昔話の中だけの出来事だと思っていたがそういうわけではないのだな」

「はい」

ヴァルデイス卿のうめくような呟きにねえさんが緊張を含んだ声で答える。

「撃破したコクマとビナーは未だ目を覚ましません。もし意識が戻ったとしてもホドについて話すかどうか……当てには出来ないでしょう。幻想兵は生きた人間の血さえあればホドの能力の続く限りいくらかでも生み出せる無敵の兵です。現在のホドがどれほどの能力を有しているかは分かりませんが、現状を見ると少なくとも2000以上の兵を同時に動かす力を持っているようです」

「2000か……厳しいな」

「はい。それも幻想兵を『一度に動かせる数』が限定条件のようで、倒しても次の兵を次々作り出す事が出来ます」

そう、それが最も厄介な事だった。

作り出す幻想兵に限りがあるのならはこのまま戦い続けていればいつか勝機が見えただろう。

しかしそううまくはいかなかった。

今や城塞都市トロメオの周囲は無数の赤い羽根が舞う平原と化していた。それはまるで流された血のように大地を赤く彩っている。

「死霊遣いか……伝え聞く話ではかのゲートティア・グリフィスが魔界の支配者リユシフェルを召還し、ホドからラファエルの加護を引き剥がしたというが」

「加護を引き剥がすとは一体どういうことなのでしょう、ファウスト女伯爵。もしサブノツクの武器で可能であれば『アウェイク覚醒』を総力でホドにぶつけるとい手もありますが」

「……加護を引き剥がすのはある意味簡単よ。体のどこかに刻まれた天使の印を失くせばいいだけの話ですもの。加護もちのセフィラと戦える力があるのなら、一般兵にだって可能よ」

「ねえさん、さすがに一般兵には無理じゃないのか？」

首を傾げると、ねえさんは冷たく抑揚のない声で言い放った。

「簡単よ。だって、印のある部分を体から切り離せばいいだけの話

ですもの。命を奪ってもいいわ。同じ事よ」

「いずれにせよ、その話しぶりでは戦闘能力的に一般兵では無理だろう。それなりに部隊を編成せねばなるまい」

ダイヤモンド  
輝光石騎士団長ヴァルデイス卿は厳しい口調で言った。

「もしくはファウスト女伯爵とクロウリー伯爵に一任してもいいのか？ 悪魔を使うレメゲトン」

ヴァルデイス卿の厳格な青い瞳で睨まれると、父上を目の前にしたような威圧感に押されてしまう。

おそらくそれは視線に敵意が混じっているからだろう。王に忠誠を誓う厳格な輝光石騎士団長はレメゲトンに対してもとそれほ  
ダイヤモンド  
どいい感情を抱いてはいなかった。

ねえさんは一瞬顔をこわばらせた。

口を開こうとした時、以外にもフォルス団長の後ろに控えていたフェルメイが参入した。

「それは無茶です！ セフィラはホドだけではないのですよ。たった二人で何人もの天使を相手にするのは不可能です！」

いつも笑顔を貼り付けているのに、今は頬を赤く染めてヴァルデイス卿を睨んだ。

「私も幻想兵とセフィラを相手にしたからわかります。彼らと戦闘するのは並大抵の事ではありません。戦闘レメゲトンのお二人だけに負担をかけるのは間違っています」

きっぱりと言いつつフェルメイを、フォルス団長が抑える。

それでも言い足りない、と言いたげに唇を一字にひき結んだフェルメイに心の中で感謝する。

悪魔を使役し、空を飛び、大気や時間さえも操ってしまう自分たちはすでに半分人間ではなくなってしまったのかもしれない。

それでもそんな自分たちを理解してくれる人がいれば救われる。温かな気持ちに心が灯っていた。

幻想兵を相手にいつたいどうしたらいいのか。その答えが出ないまま、セフィロトの攻撃が再び始まった。

季節はいつしか秋になっていた。

赤い羽根が舞う平原を冷やりとした風が吹き抜けるようになり、日が落ちるのも早くなった。青々としていた草原はいつしか黄色く染まっていた。

「きたわね」

ねえさんが押し殺した声で呟いた。

外壁の上から見下ろしたセフィロト軍は、幻想兵を前線に並べた陣形だ。それはまるでこちらの打つ手をすべて封じようとしているかのようだった。

「ホドの方は私が引き受けるわ。あなたは『<sup>アウェイク</sup>覚醒』の援護に行つて」

「……ねえさん」

「なに？」

「頼むからあの悪魔は使わないでくれ。近くにいない状態で使われると、フォローに行けない」

メフィストフェレスは体力を消耗しすぎる。周囲に敵しかいない状態で使われると助けにも行けない状態に陥る危険性があつた。

ねえさんは心配してくれるなんて意外ね、と肩をすくめた。

「大丈夫よ。あなたみたいに後先考えずに行動するような事はしないから。それに、ホドを探すのには手間取ると思うけれど、幻想兵が全員で襲つてこない限りバシンとデカラビアだけでも負けないわ。それよりあなたの方こそ気をつけなさい。ケテルかマルクトが出てくるかもしれないわよ」

「分かっている」

ねえさんがゲブラの事を忘れてはるがなと思つのだが、名前の欠片も出てこなかった。

わざとだろうか。

まあ、コクマを嫌うなら同じようにへらへらと相手を煙に巻くゲブラともあまり相性がよくなさそうだ。余計な事は言わないでおこう。

「それじゃ、後でね。レメゲトンに友好的な部隊長さんよろしく」この間の会議以来、ねえさんはフェルメイがお気に入りの方だった。

対してヴァルデイス騎士団長への警戒を高めていつていた。もともと友好的とはいえない関係だったのだが、さらに悪化していくのは手に取るようにわかった。

背に翼を湛えたねえさんを見送って、自分もハルファスの加護を纏った。

外壁の外にはすでに軍を配置してある。幻想兵に手間取る間に兵の数はまた倍増していた。

ここは東の辺境、食糧の備蓄も少ない。それは敵国にもいえるはずなのだが、密偵によるとどうやらセフィラが物質輸送に参与しているようで、食料は十分あるとのことだった。

いくらか特性は持つものの様々な能力を有する天使と違って、悪魔は数が多い分能力に限られるものが多い。

それは特化しているといえれば長所だが、できないことが多いのも事実だった。

すでに馬上で突撃体勢を整えた『アウエイク覚醒』の元へふわりと降り立つ。フェルメイが気づいて問う。

「ウォル先輩、幻想兵はどうでしたか？」

「前線フラウス一列全員幻想だ。気をつけろ」  
「アウエイクそう言つと『覚醒』の面々に緊張が走った。

20人にも満たない部隊だ。目の前に並ぶ万の軍勢を見せられれば慄くに決まっている。

それでも退くわけにはいかないのだ。

「本当に……すまないな。俺たちレメゲトンがもつとしっかりしていればお前たちをこんな危険な戦闘に巻き込む事もなかった」

「何言ってるんすか、ウォル先輩！」

ルーパスの大きな声が響いた。

「オレ嬉しいつすよ！ 隣で戦えて。少しでも役に立てて！」

にまっと笑った猟犬は、大きな槍を<sup>ランス</sup>一振りした。

続いてフェルメイが困ったような笑みを浮かべる。

「そうですね、もっと入れない世界かと思っていました。でも、そんな事はなかった。ウォル先輩が私たちに助けを求めてくれた時、同じ世界で戦える力をくれたとき本当に嬉しかったんです」

「以前はもつと悪魔に近いものかと思っていたけれど、違っていたみたいですね」

紅一点の隊員アズが微笑む。二刀流の彼女は、レイピアを両腰に差していた。

「ははは！ 悪魔の力を使われたらどうひっくり返っても勝てんのだがな！」

フォルス団長がいつもの大きな笑い声で皆の微笑を誘った。

急ごしらえだが本当にいいチームになったと思う。おそらく生死を共に賭けているせいもあるのだろうが、もつと奥、信条や考え方といった部分で繋がっているような気がしていた。

それはねえさんも同じだ。

揺ぎ無い精神で導いていくねえさんの人気は絶大だった。

「ファウスト女伯爵は？」

「彼女は一人でホドを探しに行った。俺も行く予定だったが、思った以上に幻想兵が多い。こちらに加勢しろといわれた」

「はは、確かにこりやあ一筋縄ではいかんぞ」

見据えた先には何万もの軍隊。しかもその最前列を占めるのは、通常の物理攻撃が通用しない幻想兵たちだ。

「打ち合わせしたとおりだ。絶対に一人にならないよう2人組みだけは崩すな。あとは……」

そこで一瞬躊躇ってしまった。

頭の中を漆黒の瞳の少女がよぎる。

ああ、確かハルフアスとの契約の直前にあいつも躊躇しながら同じ事を言っていたな。

微かに唇の端をあげて、全員に聞こえるようはつきりと告げた。

「死ぬな。全員生きて帰ってきて欲しい」

そう言うと、フォルス団長が大きな声で笑った。

「それはこつちがお前に言う事だ！ お前はすぐ無茶をしたがる上に意外と考えなしだからな！」

「そうですね、ウォル先輩。失礼ですがあなたが一番危なそうです」  
フェルメイが目を逸らしながら言う。

「そうか？」

首を傾げたが、『<sup>アウエイク</sup>覚醒』のメンバーがいつせいにため息をついて頭を押さえたような気がした。

何なんだろう、この疎外感は。

フェルメイが苦笑しながら言った。

「どうしたらこの心配が伝わるんでしょうね……」

「いいんすよ、そこがウォル先輩の魅力でもありますから！」

ルーパーは相変わらずにこりと笑う。

もしかして、もしかしなくてもこいつら凄まじく失礼な事を言っていないか？

「はっはっは。もてるな、ウォル！」

フォルス団長の笑いに顔が引きつりそうになったが堪えた。

こんな状況で相手をしてもらえない。

しかしながらずいぶん場が和んだのも事実だった。

と、ほころぶように笑っていた紅一点のアズがふと全員に尋ねた。

「みなさん古代語は堪能ですか？」

返事はない。みなそれほど得意ではないようだ。

「一つだけ、覚えてください。任務に向かう同僚に送る言葉です」  
アズは優しい声で呟いた。



「G - O - O - D L - U - C - K」

G - O - O - Dは良いという意味、そしてL - U - C - Kは  
思わず口元が綻んだ。

「何ニヤニヤしてるんすか、ウォル先輩」

ルーパスが訝しげな顔で覗き込んでいる。

慌てて顔を引き締めると、アズが続けて呟いた。

「幸運をお祈りします、という意味です。ですから、みなさん」

G - O - O - D L - U - C - K

その瞬間、セフィロト軍が関の声を上げた。

予定通り、『<sup>アウエイク</sup>覚醒』は一丸となって敵軍に突っ込んでいった。

全員がサブノックから与えられた武器を閃かせて。それぞれずつ  
と共にしてきた乗りなれた馬で きつとまた今日から戦神の化身  
となって戦う日々が続いていくんだろう。

召還したハルファスの風の加護を全開に使い、襲ってくる兵を次  
々に跳ね飛ばしていった。

「ハルファス」

「なんだ！ お前から話しかけてくるの珍しいな！」

「<sup>フレスウェルク</sup>狂風驚とは何だ？ あれは一種の空間支配なのか？ この間のメ  
フィストフエレスのように」

「ひひ！ そうだ！ 規模がぜんぜん違うけどな！」

目の前の敵から目を離さずに、周囲の仲間に気を配りながらハル  
ファスに問いかける。

「俺の力じゃせいぜい100人くらいだ！ あれとはケタが二つく  
らい違うんだ！」

「では、グラシャ・ラボラスを知っているか？」

「ああ！ レラージュとフラウロスとあいつは俺と同じくらいだ！」  
何が同じなのだろうか。年齢？それとも強さ？

そういえば技の名はレラー・ジュがつけたと言っていた。

フレスウェルク

「あいつも特殊空間を使うだろう？」

目の前に振ってきた幻想兵を問答無用で切り払った。

ハルフアスは幻想兵が霧散するのを楽しそうに見ている。

「ひひ！ あいつはいちばんだ！ かなわねえ！ あいつならこの間の奴にも勝てるかもな！」

この間の奴、というとメフィストフェレスだろう。

グラシャ・ラボラスの力は未知数だ。使役したレメゲトンがいなかったこともあり、一体どんな能力を有するのか謎のままだった。

「フラウロスとレラー・ジュは仲悪いぞ！ 俺はそうでもないけどな！ ひやはは！」

王都に残留したくそガキはフラウロスの炎でレラー・ジュに立ち向かったらしい。

もしこのハルフアスのようにレラー・ジュと親しい悪魔だったらどうなっていただろうか……そんなこと考えたくもないが。

「じゃあ、これが最後の質問だ」

「何だ？」

「サブノックは嫌いか？」

「ひひひ！」

甲高い声でハルフアスが笑う。

「俺はあいつ嫌いじゃないぞ！」

「ありがとう」

「ひひ！ お前頭いいな！ あいつを動かせたらな！」

ハルフアスの言葉に微かに微笑む。

そして襲い来る兵たちから逃れるように空に跳び上がった。

「ひひ！ 俺はお前も好きだぞ！」

悪魔に告白されるといふのはなんと微妙な気分なんだろう ね

えさんの感情を少しばかり理解した。

王都で今も成長を続けるあのくそガキに追いつかれないように。自分も進化し続けなければならない。

大きく息を吸い込んだ。

「サブノック！」

騒がしい戦場に自分の声が響き渡った。

## SECT・26 ホド

戦場に彼を呼び出すのは初めてだった。

ゆらりと空間が揺らめいて武器の悪魔が姿を現した。ここのとこる毎晩呼び出しているのだ。もうかなり見慣れた姿になっていた。

獣の頭部を象った兜、くすんだ青のマント。

「何用だ」

口調が少し不機嫌に聞こえるのは気のせいだと思いたい。

「お力添え願います。武器でなく、あなたの剣の腕を」

ここは遜るべきではない。

そう思っ  
てまっすぐにサブノックを見てそう言った。

「何を目指す」

「同胞の無事と、領土の奪還を」

「ハルファスだけでは足りぬか」

「セフィラ第8番目ホドを発見し我が軍に勝利を願います」

「ラファエルか」

サブノックはそういった後しばらくの間佇んだ。

一体何を考え、どんな結論を導くのか分からなかったが、待つことしか出来なかった。

足元では今も『<sup>アウェイク</sup>覚醒』が道を切り開き、それに続いてまさに破竹の勢いで突き進むグリモワール軍の姿がある。

彼らは強い。騎士団の中から選りすぐられた人材、それもサブノックの武器を与えられた面々だ。

「傷つく覚悟はあるか クロウリーの若造」

「あります」

サブノックの剣は傷を腐らせるといふ。すなわち敵兵の命を悪魔の力で奪うということだ。

そうすれば自分は心に傷を刻むという事をサブノックはお見通しなのだろう。その上で、力を借りる覚悟はあるか、と

「ひひ！ こいつは強いぞ！ これなら俺は柱に納得してやる！」  
「柱……？」

またハルフアスはよく分からない言葉を使う。

「お前には聞いておらん 黙れ ハルフアス」

「お前こそ斬るぞ！」

言葉こそ荒かったが、二人の間に険悪な空気はなかった。

嫌いじゃないと言ったハルフアスの言葉は嘘ではなかったらしい。

「仕方あるまい」

まるでマルコシアスが言うような台詞を吐いて、サブノックは腰に差していた剣を抜いた。

それだけで剣の持つ禍々しいオーラが辺りを侵食した。

自分はずいぶんと頼りになる助っ人を手に入れる事が出来たよう  
だ。

「若造 代わりに あの傀儡どもを 消してやろう」

「ありがとうございます」

「ひひ！ 俺はラファエルの方に行くぞ！」

「お前が懐くとは 珍しいな ハルフアス」

「ひやは！」

ハルフアスは甲高く笑っただけだった。

本当にそうだ。なぜハルフアスはこれほど自分に従順なのだろう。  
それはずっと不思議に思っていることだったが聞けずにいた。ハル  
ファスがまじめに答えるはずはない。

「ではサブノック、お願いします」

「日暮れまで それ以降は 帰る」

サブノックはそういい残して戦場に降下していった。

「行くか！ ラファエルだ！」

サブノックを見送ったハルフアスは当たり前のように言い放った。

「まさか、ラファエルがどこにいるのか分かるというのか？」

「当たり前！ 当たり前！ 俺は風！ ラファエルも風！」

要するに属性が同じとでも言うのだろうか。

それを知っていたらこれほど苦労する事はなかったのに！

いや、いまさら文句を言っても仕方がない。この悪魔が聞いたことしか答えないし、頼んだ以上の事はやってくれないのはわかっていたはずだ。

逆に言えばこの上ないほどに忠実なのだが。

扱いづらい……

ホドを見つけて喜ぶべきはずなのに、なぜかどつと疲れが出てきてしまった。

戦場の上空を飛び回るねえさんと合流し、ハルファスの示す方向へ向かった。

こっちだ、と言ったハルファスはどんどん高度の高い方へと向かっていく。

トロメオが遠ざかる。秋の空が近づいてくる。相当な速度で上空へと向かう。大きな雲が行く手を阻んでいる。

と、思ったが、白い雲に染みのようなものが見えた。

あれは、もしかすると。

近づくにつれて人影だという事がはつきりしてきた。

白い神官服。

「ホド……！」

押し殺した声に怒りが混じる。

あいつが。あの人影が幻想兵を作り出している張本人。多くの一般兵を死に追いやり、グリモワール軍に多大な被害をもたらしたセフィラ第8番目ホド。

どうやら相手もこちらに気づいたようだ。

住んだ青空に浮かぶ雲をバックに、とうとう現況と対面した。

「やっと会えたわね、ホド」

「……見つかっちまったか」

第一印象としては意外、の一言に尽きた。

年はおそらく15に満たないだろう少年だった。大きな羽根に埋もれるように両手足を小さく折りたたんで空に浮いている。大きなフレームの眼鏡は今にもずり落ちそうで、その奥にのぞく鳶色の瞳を不機嫌そうにこちらに向けていた。

同年代の少年と比べても小柄な方だろう。とても2000以上の<sup>フラウス</sup>幻想を操っているセフィラには思えなかった。

「ラファエルだ！ 見つけた！ 見つけた！」

しかし、背の翼は本物だ。

そしてこれまで発見できなかったのはずっと上空から全てを見下ろしていたせいなのだろう。もしかするとねえさんがメフィストフェレスを召還した時も上空から見下ろしていたかもしれない。

見たところ武器のようなものは所有していないが、ザフィケルのように幻覚を使うのか、コクマのような拳闘士なのか。

いずれにせよ天使の印を探さねばならないだろう。<sup>フラウス</sup>

「幻想たちをとめてもらうわよ」

ねえさんはにこりと笑う。

するとホドはどこからか大量の赤い羽根を取り出して空に撒き散らした。青空に赤い霧が舞い、それは徐々に形作っていく。

「悪趣味な人形ね」

その姿を見てねえさんは頬を引きつらせる。

ホドは翼に包まったまま顔も上げずにぼそりと言った。

「こいつは強いぞ。お前らなんか一瞬でやつつけるかもな」

目の前に浮かんだのは手品師<sup>マジシャン</sup>の姿。

幻想とはいえ会いたくない相手だった。

「幻想は飛べないものだとかばかり思っていたわ」<sup>フラウス</sup>

「こいつは特別仕様だ。羽根も血もいっぱい使ったから強いんだ」  
なるほど。普段相手にしている羽根一枚から出来た幻想兵にそれほど  
の強さは与えられないらしい。

「お前らの血も欲しいな」

初めてホドが顔を上げた。

血が欲しい、などと年若い少年が口にするのはひどく不気味だった。背筋がぞわりとする。

しかし、ねえさんは2000の幻想兵を操りながら相手に出来るようなレメゲトンではない。手こずる事はまずないだろう。

と、思っていたら聞きなれた声が後ろから響いた。

「ふふ、ホドにだけは手を出していただくと困るんですよ、クロウリー伯爵」

はっと振り向くとそこには本物の<sup>マシヤン</sup>手品師の姿があった。



他のセフィラと違って背に翼を湛えてはいなかったが、加護を受けているのは炎のようなオーラが噴出している事からすぐにわかった。

「ひひひ！ カマエルもきたか！ 今度は逃げるなよ！」

ハルファスの甲高い声に頭が揺さぶられる。

さあどうしよう。と思ったがどうやらねえさんは本物の手品師を相手にする気はないようだ。そっちは何とかしなさい、とばかりにホドの作った幻想の方を向いたままだ。

仕方がない、とゲブラのほうに視点を移す。

「僕の方を選んでもらえるなんて光栄です、クロウリー伯爵」

黒いステッキをくるくると回す手品師<sup>マジシャン</sup>ゲブラは、不気味な笑みを見せた。

どうにもこいつの視線は気色悪い。できれば戦いたくはないのだが、くそガキじゃあるまいしそんな我俣は言っていられない。

サブノックの剣を抜いてゲブラのほうに突きつけた。

「今日はちよつと本気でお相手しなくちゃまずいようですね」

ゲブラもステッキを真直ぐこちらに向けた。

初めてこいつの本気を目の当たりにするかもしれない。油断できない。こいつの実力は未だ計り知れないのだから。

背後ではねえさんが幻想のゲブラを相手にしている。

ホドが落ちるのは時間の問題だ。

「できればお前とは戦いたくなかったよ」

「そんな寂しいこといわないください」

言いつつも間合いをつめるゲブラ。体格はそう変わらないから間合いも同じくらいだろう。

双方の突きの間合いすれすれで停止した。

少しでも動けばそれが契機になり打ち合いが始まるだろう。

息すらも潜めてゲブラの目を睨みつけた。

が、不意に背後に気配を感じて振り向く。

そこにいたのはナイフを閃かせた少年ホドの姿。

ねえさんは、と思ったがいつの間にか分裂して数の増えた幾人もの幻想兵に囲まれて身動きが取れない状態になっていた。

しまったと思ったときには遅く、腰に焼け付くような痛みが走った。

あまりの激痛に思わず仰け反る。

「ふふ、物騒なものは納めてください」

その隙を突かれ、ステッキで完全に剣を押さえ込まれてしまった。間合いもつめられ、ゲブラの漆黒の瞳が迫る。

あるうことかゲブラの手が加護を持つ耳の羽根に触れた。

「愛らしい加護ですね。手触りも……申し分ない」

「く……」

最後の力でゲブラの腹を蹴り飛ばし、間合いを取った。

仕方がないが剣を納め、右手で痛みの方を探る。頭がくらくらしてきた。

触つてみると左腰にナイフが根元まで刺さっているのが確認できた。下手に抜いたら出血するかもしれない。触らない方がいいだろう。

「アレイ！」

ねえさんの悲鳴が響き渡る。

自業自得もいいところだ。

ホドの方はねえさんが相手しているから、と完全に意識をゲブラのみに集中していた。

「ひやはは！ やられたな！ ばーか！ ばーか！」

言い返せない言葉が惜しみなく頭上の悪魔から降ってくる。同時にゲブラに向かって無数のかまいたちが飛んだ。

が、ゲブラはそれをステッキから現れた炎の盾ですべて防いでし

まった。

じわじわと血が滲み出してきているのが分かる。抜かなくても失血で意識を失うのは時間の問題だった。なんとかしなくてはいいい。

両手を広げてゲブラとホドにそれぞれ向けた。

「ひひ！ そんなことしたらお前死ぬぞ！」

ハルファスの忠告も無視して両手に意識を集中する。

フレスヴェルク  
「狂風驚！」

その空間の風が完全に自分の支配下に落ち、二人のセフィラを翻弄した。同じ場所にいるねえさんだけは傷つけないように……

痛みに耐えながら空間支配を行うのはかなりの精神力が必要だった。

かすんできた視界の中でホドを捉える。小柄な肢体はなす術なく豪風に弄ばれていた。

その方向にかまいたちを飛ばした。

風の舞う轟音にまぎれて微かな悲鳴が聞こえた気がした。

フレスヴェルク  
狂風驚が真紅に染まる。

「……っ！」

これは自分の血か、それともホドの血か？

もう分からなくなっていたが、最後の意識の中でメゾソプラノの響きを聞いた。強い意思を持った声だ。

誰の声だろう。

それに導かれるように意識が浮上した。

「アレイ！」

覚醒と同時に痛みが意識を貫いた。

体が軽いのはバシンの重力調整のお陰だろうか。

「すぐにアリギエリ女爵がいらっしゃるからもう少し待ちなさい」

「ねえさん……」

金の瞳を見てほっとする自分がいる。

「ホドは？」

「さつき幻想兵が一瞬で全部消えたわ。戦場は大騒ぎよ。セフィロト軍はおとなしく退いていったみたい」

「そうか」

安心してもう一度目を閉じた。

「天使の印を傷つけたわけではない……一時的なホドの意識消失によるものだろう。奴はおそらくまた来る」

自分の息が荒いのは自覚していた。

なぜか震えるほどに寒気を感じていた。

「分かったわ、後でいい。話を聞かせて頂戴。今は」  
やさしいメゾソプラノに包まれて、もう一度意識が急降下した。

次に目を覚ましたときはベッドの上だった。

最初に目に入ったのは心配そうに覗き込むねえさんの顔。

「ああ、よかった」

起き上がるうとしたが体はそれを許さなかった。

「ここは……今は？ 戦はどうなっている？」

「大丈夫、まだあなたが刺されてから数時間しか経っていないわ。傷を縫合したばかりなの、動いちゃ駄目よ」

傷……そうだ、ホドのナイフで刺されたのだった。

油断して背をやられるなど、剣士失格だ。

「ごめんなさい。私がホドを甘く見たせいで……」

幸いにも傷の痛みのおかげで意識ははつきりしていた。

「いや、やられたのは自業自得だ。ゲブラに集中しすぎて周囲に気を配る事を怠った俺の責任だ。ねえさんのせいじゃない」

そう言うとなえさんは泣きそうな顔で笑った。

「とにかくしばらくは戦場に出るのは禁止よ。新しく『アウェイク覚醒』のメ

ンバーを増やす事もね。そうね、一週間は動いちゃ駄目」

「ねえさん、それは」

「大丈夫、敵もホドをやられたらしばらくは動けないわよ」

ねえさんはそう言って微笑んだ。

そうして自分の頭を優しく撫でた　まるで幼い子供にするように。

「本当にごめんなさい」

「いや、今回は完全に俺一人の責任だ」  
唇をかみ締めた。

もうずいぶん強くなったつもりだったのに、やはりまだまだ自分は未熟者だったようだ。

「次は絶対にゲブラもホドを仕留めてみせる」

「そうね、楽しみにしているわ」

ねえさんは金の瞳でにこりと微笑んだ。

その顔にも濃い疲労の色がある。

「ねえさんも休んでくれ。しばらくセフィロト軍が来ないのなら…」

…」

「人の心配をせずにあなたは自分の回復だけ考えたらいいのよ」  
レメゲトンの長はそう言うのと立ち上がった。

颯爽とした後姿には何か強い決意が見え隠れしていた。

## SECT・28 廻ル季節

何日かしてベッドから起きだしたが、ほぼ監禁状態で無理やり休まされたために戦況は全く分からない。

左腰の傷は痛んだが歩けない事はなかった。戦闘は思うように出来ないかもしれないが日常生活に支障はないだろう。当たる寸前自分の勘がかるうじて働いたのか、急所は外れていた。

不幸中の幸いだ。

とりあえず総指揮官のフォルス団長に謝罪をし、戦況を聞くためにいつもの会議が行われる円卓の間に向かう事にした。

「おおウォル、もう平気なのか？」

「はい、おかげさまで」

そこにいたのはフォルス団長とフェルメイだけだった。

「会議は今終了したところです。ウォル先輩がホドを撃破したお陰でセフィロトが動く気配はありませんでした。このまま動きがなければ一気にカーバンクルまで攻め入る考えも出ています」

「ホドはまだ加護を失ったわけではない。おそらくまた幻想兵が襲ってくるだろう」

薄れゆく意識の中で使った狂風驚だ。フレスヴェルク ゲブラもいたあの場でホドを仕留められたとは考えにくかった。

眼鏡をかけた少年のような風貌のホド。あの15に満たない少年が2000もの幻想兵を操っていると考えると恐ろしい限りだった。戦場でやる気なく見えたゲブラは、もしかするとホドの護衛のためだけにいたのかもしれない。それなら自分たちがホドと邂逅してすぐに現れたのも納得がいくし、戦場であからさまに働いていなかったとしても上司から文句を言われる事はそれほどないだろう。

いずれにせよホドに手傷を負わせたことでいくらか軍に余裕を与える時間を作る事が出来た。

「後で他の『アウェイク覚醒』のメンバーにも顔を見せてあげてください。すごく心配していますから」

「ああ、すまない」

戦場に出る前に言っていた事が本当になってしまつて、なんともバツの悪い思いだつた。

しかし、くそガキにだけは言わないでいてもらおう。心優しいあいつは絶対に他人の傷まで自身のもののように受け取って心痛めるに決まっているんだ。

ふと窓を見ると、秋の深まつた空が広がっていた。

あいつは元気にしているだろうか。

会いたい

ブラックルビー

今も漆黒星騎士団で稽古しているのだろうか。風邪はひいていないだろうか。ねえさんと離れて恋しくて泣いていないだろうか。

俺のことを少しは思い出してくれているだろうか。

そんなくだらないことを考えてしまつて、自嘲気味に笑つた。

グリモワール国の秋は短い。

もうしばらくすれば雪が降り始めるだろう。そうすれば戦闘はこれまでほど激しく行われないだろう。

その前にカーバンクルまで防衛ラインを戻したかったが、来年に持越しかもしれない。

長い冬を越えれば春だ。

その頃には、あのくそガキも合流して3人態勢で戦闘に臨む事が出来るだろうか。

最近特に肌寒くなってきた季節を感じながら、一人ぼんやりとそんな事を考えていた。

予想通り、初雪が降る前にまた幻想兵を含んだ軍隊が攻め入って

きた。

が、ホドの方もダメージから回復しきっていないようで数はこれまでの比でないほどに少なかった。一般兵がふえており、ようやくこちらにも『アウェイク覚醒』に頼りきりの戦闘スタイルを脱する事が出来た。もちろんそれは本格的な冬に入る前までの話だった。

雪が降り、フラウス幻想たちが振り撒いていった赤い羽根が隠れるようになる頃、セフィロト国の攻撃はぱたりと止んだ。

その隙にカーバンクルへ攻め入ろう、と輝光石騎士団長のヴァルデイス卿は主張したが、兵の疲労度と備蓄食料などの問題を考えると、春まで待つのが得策だった。

おそらくセフィロト国側も同じことを考えているのだろうが、自然界がもたらす季節変化にはさすがに反抗できない。

凍えるような冬には春のために力を蓄え、作戦を練るしかなかった。

そして、静まり返ったトロメオで年を越した。

その平穏も長くは続かなかった。

この冬最後の雪が平原を白く染め上げる頃、とうとうセフィロト国から関の声が上がったのだ。敵の軍勢とこちらの軍勢の数はほぼ同じ。

幻想兵が混じっているのかどうか分からないほどに人数が膨れ上がっている。紛れ込んで一般兵を襲う危険性があったため、今や50人にまで増えた『アウェイク覚醒』のメンバーを二人一組で部隊に組み込んであった。

そして、ねえさんと自分は二人だけで空から急襲する。

地上部隊の作戦は全面的に3人の騎士団長に委任してあったため、心配する事はない。

セフィラのみを相手にするつもりだった。



ねえさんは相変わらず、雪の降る中だというのにメフィストフェレスの印を露にした機動性に富む格好をしている。

見ているだけで寒い。

そう思つて視線を逸らすと、ねえさんに睨まれた。

さすがにタンクトップではなく袖のあるものを着ており、マントも冬仕様だったが、なぜ腹を隠さないのか。

「挑発するために決まってるでしょ」

「挑発？」

「メフィストフェレスの印が見えていた方が向こうも狙つてくれるんじゃないかと思つて」

たつたそれだけの理由で？！

「風邪をひいても知らんぞ」

「ふふ、ご心配ありがとう」

ねえさんは楽しそうに笑うと、デカラビアの加護を受けて雪の舞う空に飛び立った。

ハルフアスを呼び出してすぐに後を追う。

目の前には白地に金の旗印も神々しいセフィロト軍が迫っていた。

この雪を過ぎれば一気に暖かくなるだろう。

春ももうすぐだ。

ゼデキヤ王からは、春にグリフィス家の末裔を戦場に投入する旨が届いていた。

それはどこか楽しみでもあり、心苦しくもある。

こんな場所ではあいつの優しい心はつぶれてしまうかもしれない。戦つて相手の命を奪うことにあいつが耐えられるとは思えなかった。綺麗な、無垢な心のままでいて欲しい。それは我儼かもしれないが全身全霊を賭けて願う事だった。

ここへ来てから殺戮を繰り返してきた。

悪魔の力を使い、サブノックの剣を振るい、軍を指揮することで

敵国の人間の命を奪ってきた。

それを悔やむ事はない。そうしなければグリモワール国の兵が傷つき、命を落とす事になる。自分はグリモワール国を選んだのだから。

心に刻まれた無数の傷はもう二度と癒えることなどないだろう。

何度も血を流した手からその染みが消える事などないだろう。

それでも自分は大切な方を選び、守ろうと決めた。

揺らいではいけない。

迷ってはいけない。

ずっと、心の中で繰り返す。

軍の上空に浮かぶホドの姿をとらえた。

ねえさんと目で合図しあって真直ぐその方向に向かう。

しかしそこにいたのはホドだけではなかった。

宣戦布告のときを想起させる。先頭に立つのは宣戦布告の時に大使長を務めた男だった。色素の薄いウェーブがかった茶の髪と狡猾そうな顔に見覚えがある。表面だけに貼り付けたような笑みがひどく気味悪い。

その右後ろに控えるのは手品師ゲブラ。

左後ろには眼鏡の少年ホドが控えていた。

「あなたは初めまして、よね？ いえ、一度だけ王都ユダでお会いしたかしら」

「ええ」

敵の大將と思われる人物はにこりと笑った。

「セフィラの長、第1番目ケテルです。以後お見知りおきを」

「レメゲトンの長、メフィア＝R＝ファウストよ。あまり言いたくないけれど、一応社交辞令として言っておくわ……よろしく」

ねえさんの纏う空気はぴりぴりしていた。

それほどにケテルのオーラは絶大だったのだ。

背後に浮かぶのは天界を司るという天使メタトロン 『神』と

いう名で呼ばれることもあるその天使は黄金のオーラを全身に纏っていた。布で隠した顔は見えない。それでもその神々しいまでの威圧は衰えていなかった。

握り締めた拳が震えそうになって、唇をぎゅっと真一文字に結んだ。

これまでの天使とは文字通り桁が違う。

「とりあえずご挨拶だけでもしておこうと思ひまして。軍はすぐに退きますよ、本腰を入れるのはもう少し暖かくなってからです。私、

寒いのは嫌いなんですよ」

狡猾な笑みを隠そうともせず。

「ところで、彼らはどうしていますか？」

「コクマとビナーなら預かっているわ。けど別に返して欲しいって訳じゃないんでしょう？」

「ええ。お任せします。もし起きたら少々手こずるかもしれませんが、お願いしますよ」

「……目覚めてない事までわかってるんじゃないの。わざわざ聞かないで頂戴」

ねえさんの機嫌が悪くなってきた。

ケテルはそんなことお構いなしにねえさんの腹部を指差す。

「それが噂に聞く刻の悪魔ですか。晒したままとはずいぶんと余裕ですね」

「一体どこの噂で聞いたのかしら。あれを見て残ったのはアレイだけのはずよ」

おそらくホドのせいだろう。メフィストフェレスの支配が届かない上空から、時が止まった戦場を一人で見下ろしていたに違いない。

「いいじゃないですか。そんなことどうでも」

ケテルは軽く礼をした。

「春、草木が芽吹く頃　トロメオをいただきに参ります」

「あら、それは予告？　そっちこそ余裕ね」

ねえさんはその瞬間、予備動作なしにナイフを投げた。

煌く刃が真直ぐケテルに向かう。

最もそれは目標にまで届くことなく、飛び出したゲブラのステッキですべて叩き落されてしまったが。

「好戦的な御婦人ですね」

「お互い様よ」

代わり飛んできた炎球をバシンの重力操作で叩き落しながらねえさんが妖艶な笑みを見せた。

「これ以上この国を荒らすのは許さないわ。次にきたら……本気で

つぶしにかかるから」

「これは手厳しいですね」

コクマと同じような台詞で薄笑いを浮かべたケテルは、次の瞬間に消え去っていた。

同時に後ろに控えていたホドとゲブラも消失し、戦場からは幻想兵の姿が消えた。

「アレイ」

ねえさんの声は強張っている。

「あいつはやばいわ。メタトロンが天界の長っていうのはかなり頷けるわね」

その言葉に自分も賛同した。

握り締めた拳が硬直している。あの絶対的な黄金のオーラを思い出してぶるりと身震いした。

あの銀髪のエフィラが召還したミカエルの銀のオーラを前にした時も相当な威圧かんだった。しかも銀髪のエフィラは相当な剣の使い手で加護なしでも自分と同じくらいの実力を持っていた。

しかし、メタトロンは常軌を逸している。

「対抗するにはそれこそ魔界の長　リュシフェルでも召還するしかないかしら？」

「……ねえさん」

「何かしら？」

「あの……王都に置いてきたくそガキの額にもねえさんみたいな悪魔の紋章が浮かぶ。もしかして、あいつが契約した悪魔は」

「ふふ、それは言っちゃだめよ、アレイ」

ねえさんはにこりと微笑んだ。

「知らない事におかなくてはいけないの。そこに触れちゃ駄目。グラシャ・ラボラスを持っているだけでも大変なのに、それ以上あの子に枷をかけられないわ」

「やはりグリフィス家が召還した悪魔は……」

「今はトロメオ防衛のことだけ考えましょう」

数十年前にコイン以外の悪魔を召還しようとして追放されたグリフィス家。辺境の山奥に屋敷を築き、『リュシフェル』の名を冠した少女を育て上げた。

そして、3年前。

あのくそガキが山奥で瀕死の重傷を負ってねえさんに拾われた。いったい何があった？

グラシャ・ラボラスとの契約は？リュシフェルの召還は？他のグリフィス家の人間は一体どこへ消えたんだ？

考えても仕方がない。

ケテルが予告した春は、もうすぐそこまで迫っていた。

そして春。

予告どおり、これまでに最大の軍勢がトロメオの眼前に集結していた。

もちろんこちらにも準備を万全に整えて待っていたのだ。

戦闘衣装に身を包んだねえさんと共にセフィラたちを迎え撃つ事になった。

「さつと見たところ幻想兵がいないわ。おそらく私たちのほうに3人がかりで来るはずよ」

死霊遣いホド、手品師ゲブラ、そしてセフィラの長ケテル。

3人とも非常に厄介な相手だ。

フラウス幻想を多用してくるホドはおそらく消耗戦になるだろう。いかにして本体を叩くかがポイントになる。

得体の知らないゲブラは、天使の力がなくともかなりの実力を持っていると思われた。手にしているのはステッキだったが、間合いの取り方、観察能力、そして構えからして奇妙な剣術を使うだろうことは用意に予測できた。

そして天界の主を使役するケテル。メタトロンの支配は圧倒的で、ハルファスで対抗できるかは分らない。メタロン自身の能力もあまり知られていない。独立戦争の折はリュシフェルと凄惨な戦闘を繰り広げたという言い伝えが残っている程度だ。

「他のセフィラは……第10番目マルクトはどうやら全軍指揮のようね。慈悲の天使ツアドキエルを守護に持つケセドが戦場に出てくるとは考えにくいし、アレイに聞く話だと戦闘能力的はネツアクも出てこなさそうよね。あ、でもコクマやビナーが出てくるくらいだからもしかしたら来るかしら。ま、でも相手にならないでしょうけど。基礎の天使ガブリエルを使役するイエソドは分らないけれど、あと警戒するとしたらあの銀髪のセフィラだけね」

「もしそいつが来たら俺が叩き潰す」

「ラックを盗られないように？」

「それは関係ない」

関係ないことはなかったが、それ以上に剣士としてあのセフィラには負けたくなかった。

戦場にいる間も稽古は欠かしていない。何百何千の幻想兵を相手にしてきたのだ、謹慎処分を受けているティファレトよりずっと強くなっている自信があった。

「間違いなく空中戦になるわよ。ハルファスは疲れていないかしら？」

「メタトロンの相対するのを楽しみにしている……のんきな奴だ」

「ハルファスとすっかり仲良しになったわね」

言われてため息をつく。

確かにその自覚はあった。今では空中戦はハルファスでないとうまくいかないほどになっていた。地上での戦闘に関してはまだマルコシアスの方がシンクロ率は高いだろうが。

やっと慣れたハルファスの加護が耳元に広がる。

「さ、行くわよ。あのケテルの鼻っ柱を折ってやらないと気が済まないわ！」

「そうだな」

真直ぐに敵軍を見つめた。

その中にセフィラの姿を見つける。

「ねえさん」

「なあに？」

「G・O・O・D　L・U・C・K」

そう呟くと、ねえさんは金の瞳でにこりと微笑んだ。

「Y・O・U　T・O・O……あなたもね」

古代語で笑顔を交し合って、空に飛び立つ。

その時はまだ希望を胸に抱いていたはずだった。

しかしながらそれは淡い希望だった。

次の日には、戦場に参入してきたケテルによってその希望が完全に費えた。



SECT・30 絶望ノ再会

どうして。どうしてこんな事になった？

目の前には大量の死体が転がっている。肩に刻まれた紋章は黒い翼の獅子が象る印　グリモワール王家の紋章だった。

何が起きたのか全く理解できなかった。

累々と横たわる人間だった塊。トロメオのメインストリートは真っ赤に染まっていて、地面はどこどころ抉れている。死体は焦げた後があつたが、炎で焼けたわけではなさそうだ。皮膚が溶けるように焦げている。

街並みの壁もほぼ破壊されており、どれも丸く焼け焦げた穴が開いていた。

生きている人間を探してメインストリートを駆けていくと、その中でたった一つ人影があつた。

目の前に広がる惨劇に呆然としながら、その中に一人佇む影を睨みつけた。

「そんな顔をしないでくださいよ、クロウリー伯爵。ゲブラに叱られてしまいます」

「ケテル……貴様何をした……？」

扉を破られたトロメオのメインストリートはグリモワール兵の死体で埋められていた。

空から襲来したホドとゲブラの二人を相手にしていたのだが、瞬く間にセフィロト軍が侵攻し始めたのを見て二人をねえさんに任せ、軍の援護に空から降りてきたのだが……

地面に降り立った時には既にこの状態だった。

この分ではすでにセフィロト軍はシェフィールド侯爵の屋敷を制圧している事だろう。

城外にいたグリモワール軍はすでに退き始めているはずだ。

「私は何もしていませんよ。メタトロンを召還した以外はね」  
ぞわり、と全身総毛立つ。

何かが来るのを察知して地を蹴った。  
その瞬間自分がいた地面が抉れた。

「ひやは！ 光の力か！ やべえぞ！ やべえぞ！」

「光？」

「俺たちと反対の力だ！ 光は強いからな！ それを束にすると破壊できるんだ！」

ハルフアスの説明は相変わらずよく分からないが、どうやらメタトロンは光の力を破壊に使うらしい。

「よく避けましたね。流石です」

ケテルがぱちぱち、と拍手する。

バカにされているとしか思えないが、自分でもよく避けたと思う。目には一切映らなかった。ただ、これまでの戦闘経験と勘が危険だと叫んでいた。

心臓が早い。

「ひひ！ お前でよかったな！ あの女だったら直撃だったぞ！」  
常に前線にたつてきた自分が命の危険に陥った事は一度や二度ではない。

その中で培ってきた勘が役に立ったようだ。

おそらくこれは良く見れば見えるというレベルのものではない。  
何もかもを超越した速度で飛んでくる光の矢だ。

周囲の街の破壊具合から考えて、これがグリモワール軍を殲滅させた原因だという事は容易に分かった。

見えない速さで襲ってくる光の矢があれば、何千ものグリモワール軍を蹴散らすのにそう時間はかからなかっただろう。

「アレイ！」

メゾソプラノが響き渡った。

はっとして見上げると、ねえさんがこちらを見下ろしていた。

「一旦退くわよ！ ここまで制圧されたら……私たちの力じゃもう

どうしようもないわ!」

「あ、ああ」

ケテルはにやりと笑ったが、それ以上追ってくる事はなかった。

信じられない出来事だった。

セフィロトの総力攻撃が始まってからわずか2日、城塞都市トロメオはケテル一人の前にあっけなく陥落したのだった。

「一体何が起きたんですか、カルカリアス卿!」

グリモワール軍はトロメオから少し離れたところにある都市カインまで退いた。

被害は甚大だった。トロメオ城内にいた兵の半数近くを失い、堀の外にいた兵への被害も大きい。『<sup>アウェイク</sup>覚醒』の人数も半分近くに減っていた。

陣頭指揮を執っていたフォルス騎士団長とフェルメイも重傷を負い、かろうじて軽症ですんだカルカリアス卿の指示で兵が撤退したのだった。

「私にも……何も分からないのだ」

カルカリアス卿の話によると、最初は軍のみで押していたのだが、突如として現れたセフィラが圧倒的な力で軍を弾き飛ばしたのだという。

「光の束のようなものを浴びると、みな溶ける様に皮膚が焼けて…

…」

自分が見た死体と一緒にだ。

光の束と呼ぶのは自分が受けそうになった光の矢と同じものだろう。

「本当に一瞬の出来事だった。あの白い神官服が」

カルカリアス卿が頭を押さえた。

すべてケテルか。

ぎりり、と唇をかみ締めた。

「失礼します」

そこへアリギエリ女爵が現れた。

「ゼデキヤ王から書簡が届きました。レメゲトンのラック・グリフィス、<sup>エミラルド</sup>翠光玉騎士団、そしてさらに一般兵があと数日ほどで到着するとのことですよ」

「！」

あいつが戦場に来る？

この最悪の状況で？

もう何から考えたらいいのかわからなくなった。

圧倒的なケテルの力、甚大な被害を受けたグリモワール軍、重症の総指揮官バーディア卿　問題が多すぎる。

ねえさんも沈鬱な顔をして唇をひき結んでいた。

それから数日、重症兵の手当てと砦としてのカシオの整備などに追われ、何を考えている暇もなかった。

重症だったフォルス騎士団長が歩き回っていた事はかなり驚きだったが、彼の回復力からすれば当然のことなのかもしれない。

そして一週間後、ようやく騎士団長とレメゲトンでの会議を開く事が出来た。

ここまでセフィロトの攻撃が無かったのは奇跡としか言いようが無いだろう。

シェフィールドの屋敷でしていたように円卓を囲んだが、あまりに悲惨な状況に誰一人口を開く事が出来なかった。

みなどうしたらいいのか全く分からないのだ。

多くの兵を失いトロメオを明け渡した今、軍全体が絶望に沈んでいた。

そこへ、ドアをノックする音が響く。

「グリフィス女爵が到着されました」

若い騎士の声に心臓が跳ね上がる。

扉が開いて入ってきたのは……美しく成長したグリフィス家の末裔の姿だった。

凜とした空気を纏う横顔は最後に見たときよりずっと大人びている。大きな漆黒の瞳の中の光も全く衰えておらず、肩甲骨の辺りまで伸びた黒髪が象牙色の頬にかかる。

体にぴったりとしたレメゲトンの正装のドレスが良く似合うらしい体つきに成長していた。背も少し伸びただろうか。

本当にあのくそガキ……か？

雰囲気は全く違う。

そこにいるのは天真爛漫な少女ではなく、成熟する一歩手前まできた絶世の美女だった。

全員の視線を釘付けにしたグリフィス家の末裔はその場で膝をついた。

「ラック・グリフィス、ただいま到着しました」

自然な敬語が滑り出たその声は、紛れもなくあのくそガキのものだった。

が、どうにもあの頭と口が直結したくそガキと目の前にいる美女が結びつかない。

彼女は迷うことなく真紅の甲冑に身を包んだフォルス騎士団長の前に進み出た。

「ただいまより炎妖玉騎士団長、フォルス・リーバーディア卿の指揮下に入ります。よろしくお願いします」

そう言って深く礼をした彼女を呆然と見つめてみると、振り向いた瞬間目が合つてにこりと微笑まれた。

その笑顔だけは変わっていなかった。

ところが、変わったと思ったのは気のせいだったようだ。

円卓の部屋を出た次の瞬間、グリフィス家の末裔はくそガキに戻ってねえさんの胸に飛び込んだ。

「やっと、追いついたよ。ねえちゃん」

それを受け止めたねえさんはいつものように頭を撫でてやる。

「ラック……本当に大きくなって……！」

感動に打ち震えるねえさんの手の感触を確かめるようまた阿呆面で笑うくそガキの姿を見て、なぜかほっとする自分がいる。

「暴走した悪魔を取り押さえたそうね。フォーチュン侯爵から聞いているわ」

「うん。すぐがんばったよ」

はじけるような笑顔が自分の中に幾つも刻んできた傷に流れ込んだ。

包まれて少しずつ癒されていくのが分かる　驚くほど優しい感触で。

「アレイさん」

はっとするとねえさんのところにいたはずのくそガキがすぐ傍にいた。

「やっと、追いついたよ」

近くで見るとやはり顔つきも少し大人びている気がして見つめるのは照れくさかった。

もうこのくそガキも少女の時を脱しようとしている。

「遅かったな」

「仕方ないじゃん。おれは未熟者だったんだから」

「違うない」

「もう！」

そういつて頬を膨らますと、記憶の中にいる少女の姿と重なった。もっとたくさん言いたい事があつたはずなのに、再会しただけですでもう満足してしまい、言葉が出てこなかった。

言葉もなく見下ろしていると、少女は相好を崩した。

「阿呆面で笑うな。気が抜ける」

「いいじゃん、アレイさんに会えて嬉しいんだ」

その言葉に心臓が跳ね上がる。

それはいくらか期待してもいいと言う事なのだろうか。それともいつものように素直な気持ちを告げただけなのか。

きつと後者だろう。

こいつがそんな小難しいことを考えるはずもないし、駆け引きと言う単語を知っているかすら怪しいものだ。

「レラージュと戦闘したそうだな」

「うん、強かった。勝てないかと思つたよ」

ずっと心配だった。義兄上の手紙を読んでから。

「ひどい怪我をしたんじゃないのか」

すると少女は悲しそうな顔になってふるふると首を振った。

「おれは平気だ。でも新しくレメゲトンになったライディーンにひどい怪我させちゃった」

まただ。そんな傷ついた顔をして。

それは人の傷だ。お前まで傷つかなくてもいいというのに。

「でも、ちゃんとそいつを救つたんだろう？」

「うん、ちゃんと生きてた」

「なら何故そんな顔をする。お前は……よくやつた」

素直に褒めることができて、自分が一番驚いた。いつからこんな風に言葉を紡げるようになったんだろうか。

ぼん、と頭に手を置いた。

記憶にあるより少し近い距離にどきりとした。

「ほんと？」

「ガキにしてはな」

「ガキって言うな！」

懐かしいやり取りを口にして、思わず微笑んだ。

それを見た少女が呆けたようにじっと見上げてくる。漆黒の瞳に吸い込まれそうになってしまふ。

いったいどうしたんだ。

不審に思つて漆黒の瞳を覗き込む。

「何だ、ぼんやりして」

その声にはつとした少女の頬がみるみる赤くなつていく。

何だ、何か悪い事でもしたか？

「変な奴だな」

ところが予想したような反論が返つてこなかった。

不思議に思つてもう一度聞く。

「どうした」

「な、何でもないよ」

慌てたように頬を染めて首を振る少女の反応はこれまでと全く違つていた。

どうしたんだろう。

赤くなつた頬に触れようと手を伸ばすと、それを避けるように飛び退つた。

「あ……」

ざくり、とナイフが心臓に刺さる。

拒絶された。

伸ばした手についた血の染みが見えたのだろうか。彼女は血の匂いにひどく敏感だから。それとも、もう自分に傍にいて欲しくはないのだろうか。

いずれにせよ、伸ばされた手は行き場を失つた。

ところが少女は頬を染めて懸命に弁解した。

「違うんだ！ 嫌なわけじゃないんだ！ でも、なんだかすこく……」

嫌なわけじゃない？それではどうして拒むんだ……？



漆黒の瞳がまっすぐこちらに向いている。

「すぐく……」

姿形だけではない。

最後に会ったときとは何かがほんの少し違っている。

なぜだろう。何が違うかは分からないが、この少女の中で何か変化があった気がした。

細い指がそつと自分の胸に触れた。心臓の音を確認するように手のひらを当てる。照れくさそうな声で少女が呟いた。

「何でいままで平気だったんだろうね」

まだ赤い頬にそつと手を伸ばした。

少しびくりとしたが、今度は逃げなかった。

すべらかな感触に今すぐにも抱きしめたい衝動にかられた。

「不思議だな。すぐく…… 幸せなんだ」

少女がもう一歩近づいてきた。

漆黒の瞳が真直ぐに見上げている。

どうしたんだろう。何か、おかしい。今日のこいつは今までと何か違う。

不意に少女は背に手を回して抱きついてきた。

突然のことに狼狽する。

「いったいどうしたんだ」

これまで散々この少女を抱きしめてきたくせに、いざ逆に抱きつかれるとどうしていいのか分からなかった。

お前は、一体何を望むんだ？

手を伸べられることを望んでいるのなら、今すぐにも差し伸べてやろう。何しろ、自分はもうお前以外は要らないと分かっているのだから。

「もうどこにも行かないで」

その言葉は父親に送るものなのか？それとも一人の人間に送るもの？

もしくは 恋人に贈るものだとは少しは期待しているのか？

「仕方ないな」

前はどれでもいいと思っていたのに、今はそう思えなかった。自分がこの少女を想うように、この子にも想い返して欲しいそれは、人生のうちに最初で最後の我侭だ。自分が想うように彼女も想ってくれたなら。

ただもう少しだけ、この少女の温かさを満喫してもいいだろうか。

トロメオが陥落し、敗戦濃厚な戦場だというのにこの少女がいるだけでもう大丈夫な気がしていた。守りたいものが傍にある。それだけで気持ちはずいぶん違うものだ。

もう少ししたら、きっとこの気持ちを伝えよう。それまでに戦争が終わっているかは分からないけれど。

その頃には少女は感情を理解するようになっているだろうか。

そんな悠長な事を言っていたから失敗したのかもしれない。

再会できた幸福感に包まれて、ねえさんがかけた保険の意味に気

づいていなかった。

アエテルヌム

フラウス

永遠などというものは虚偽だと、昔誰かが言っていたというのに

・ ・ ・ オワリ ・ ・ ・ (後書き)

to be continued . . .

この物語は連作です。

【LOST COIN - head】 <http://ncode.syosetu.com/n3660c/>  
【LOST COIN - tail】 <http://ncode.syosetu.com/n3665c/>  
【LAST DANCE - head】 <http://ncode.syosetu.com/n4082c/>  
【LAST DANCE - tail】 <http://ncode.syosetu.com/n4617c/>  
【PAST DESIRE - head】 <http://ncode.syosetu.com/n6324c/>  
【PAST DESIRE - tail】 (本作)  
【WORST CRISIS - head】 <http://ncode.syosetu.com/n0921d/>  
【WORST CRISIS - tail】 <http://ncode.syosetu.com/n0973d/>

順にお楽しみください。

[illegible]

次回から

【WORST CRISIS - head -】

【WORST CRISIS - tail -】

の2章を同時更新します。基本は一日交代で一話ずつ更新と言う形になります。

第一幕はWORST CRISISで完結します。幕間が2章、その後第二幕を連載する予定です。

当初の予定よりずいぶん長い話になってしまいました。よろしければもうしばらくお付き合いください。

071121 早村友裕

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7899c/>

---

PAST DESIRE -tail-

2010年10月8日14時06分発行